
A new adventure and bonds

夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A new adventure and bonds

【Zコード】

Z8579X

【作者名】

夕陽

【あらすじ】

あの、藍染たちとの戦いから約50年。

死神にとつては短く。人間にとつては長い時間がたつた。

現世組は皆、戸魂界へ。そして、戸魂界で、一護たちは…。

一護をはじめとする、石田、井上、茶渡。そして、遊子、夏梨。たつ木に智吾、水色を取り巻く死神ストーリーが今、始まる…。

回収会？（前書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しくお願いします。

同窓会？

新たな冒険

新たな絆

*

*

*

*

あの、だれもが震え上がった、藍染との戦いから約50年。

死神にとつては短い時間。人間にとつては長い時間。

そのため、現世組の死神代行 黒崎一護、滅却師の石田雨竜、人間なのだが、一護といふことで才能を開花させた、井上織姫、茶渡泰虎

そして、一護が、藍染と戦つてゐる時、目が覚め靈力があると分かつた、有沢竜貴、浅野啓吾、小島水色。

あと、黒崎家の遊子に夏梨の9人はもちろん死んだ。

ちなみにともと死神だった一心は、一番最後に死んだ夏梨に付き添い尸魂界に、一緒に行つた。

遊子を抜いた残りの8人は、「死んだら尸魂界に行く」ということを知つていたので無事に尸魂界にたどり着きそれぞれ流魂街に振り分けられた。

一護、遊子、そして水色は西流魂街1地区「潤林安」。

石田、チャド、井上は南流魂街7・8地区「戌吊」。残りのたつき（

これからは「たつき」と書く、啓吾、夏梨、一心は北流魂街80地区「更木」に。

みんなばらばらがある程度固まつてゐる。

南流魂街78地区に送られた、石田達。そして最も治安が悪いとされている北流魂街に振り分けられた、夏梨たち。

振り分けられた所はばらばらであるが、皆それぞれどこにいるのかはわかつていた。

(簡単に言えば、最後に死んだ夏梨とともに「魂界」に行き、偶然同じところに振り分けられた一心は、縛道の77天挺空羅てんていくうらでみんなに呼びかけた、ため。)

そこである日みんなは一護のいる西流魂街1地区に集まつた。

*

*

*

「よう。みんなは久しぶり
「ひさしひりー。黒崎君！」
「いっちじー……会いたかったよ。」「
「おーす。啓吾ーお前変わつてないな。」「
「一護ーうで、うで！息が…。」「
「おーわりーな啓吾」「
「大丈夫ですか？浅野さん。」「
「えつなに？なぜに水色、敬gブギヤつ…!。」「
「つるさい。もーだまれ！」「
「わーあ。たつきちゃん。死んじやうよー。」「
「何言つてんの織姫。もつ私たち死んでるのよー。」「
「アーそうだつた。」「
「こち兄ー遊子！」「

「夏梨ちゃん！お父さん！」

「いちじ～。ゆず～。あいたかつたぞー。」

「キモイ！もうこれ以上しゃべるな！」

「ナイス！夏梨！」

「ム。」

「あー。君たち久しぶりの再会のところ悪いんだが、少し黙つてくれないか？。」

「…………。」「…………。」「…………。」「…………。」

「わいー。石田。」

「分かればいい。」

「ンじゃ。えーと。……。」

「……まさかと思つが黒崎。何の用もなしに僕たちをここへ招いたのか？」

石田が、ここまで来るの結構大変なんだぞ、とつぶやか、一護に怨むような視線をぶつけた。

「……途中で切るな！そんなわけねーよ。」

「えー。ゴホン。ンじゃみんなにいくつか質問するだ。」

「まず、一つ。みんなはいつごろ死んだ？」

「はいはーい。」

井上が手を挙げた。

「ンじゃ井上」

「ゴホン。私は、35歳の時に病氣で死んじゃったんだ。」

「確かにそんぐらいの時、織姫、ガンで倒れたね……。」

「そうか。じゃ次。たつき。」

「えつ。あたし。あたしは交通事故。」

「何歳ぐらい？」

「うーん。3…7、8歳かな？」

「そうか。次は…啓吾」

「おれつ。俺も交通事故つか、有沢が死んだ交通事故と同じなんだ

よ。」

「えつわせーそーいえばあれ3台こつきに事故ったんだっけ。」
「ことはあんた…、信号無視したほう?」

たつきは、不敵な笑みを啓吾に向けた。

「へつ…ち、ちがうよーそれもつー台のまつ。」

「ほんとーお?」

「ほんとーほんとほんとですかひー。」

「…。あつやう。」

「ふ。」

(苦労してるな。啓吾)

一護は心の中でこいつそり思つた。

「…。じゃ次。水色。」

「ん。僕は、27歳ぐらじに海に行つて、溺死。」

「むーいな

夏梨がつぶやいた。

「ははつ…。じゃ次、石田」

「ン。僕か。僕はな。やつぱやめた。」

「…。おー。やめんなよ。」

一護、啓吾そしてたつきが突つ込んだ。

「いやー。」

「こまかすな。」

「厳しいな黒崎。」

「厳しくない。第一みんな答えてるんだから、お前も答える。」

「…。」

「あつ。もしかしてすんごく恥ずかしい死に方だつたりして。」

夏梨が言つた。

「…。」

石田は顔こぼ出していいないが、内心めぢやくぢや焦つていた。

(なんでわかつたんだ。)

「図星か。」

「凶星だな。

「うん。
四星だね。」

○小説「火の鳥」の題材

「田口洋次郎」

卷之二

「絵文等」

石田かほりと書いた

「そんなに恥ずかしいのか？」

「はあ！。僕が死んだのは……。」

ここにいる石田以外のみんなが、なぜか分からぬがす」と緊張し

ていた。

「……。業が36歳」ふ。三日もつて、威却師の修業をしてる時。

岩の上から誤つて足が滑り高頭部強打。そのまま死亡。

近くこひる人す

を抜いた9人は笑っていた。

「マジか石田。修行中に足が滑… プふ… って高頭… ふは… 部強打で

まつま
死んだ

一瓣が笑ひ一瓣がうれかれて聞一。

「一語の悶」の如きが、

「ま、三、八、二、一、語、一、語、の、間、で、第、六、が、そ、れ、か、」

ほんとかよ

啓吾も笑いをこらえて聞いた。

「だからほんとだつて言ひてるだらう。」

石田が切れた。

「…………。はい。すいませんでした。」

卷之三

「アーニー、アーニー、アーニー！」

日本ノルマニシスの歴史

石田が轉くせれなから井上に向かひて言つた

はしきみせん

一分かればいい

「…。そういう黒崎は、どうして死んだんだ？」

「俺か。俺はつ、ていうか俺たちは、親父が車を運転してる時に。相手の車が突っ込んできた。交通事故。その事故で死んだのが、俺と遊子。」

「そうか。でも君が死んだらすぐに朽木さんとか阿散井君とか来るんじゃないのか？」

「もちろん来たぜ。まあ。來たって言つても俺たちが流魂街に振り分けられる場所にな。」

「何故だ。君がきたなら即刻死神にすればいいものを。」

「ああ。ルキアがすぐにでも俺を死神にしようとしてたな。」

「じゃあなんで。」

「俺が断つたんだ。俺が死んだのは、大学を卒業した最初の夏。遊子は大学生の夏だ。もちろんまだ誰も死んでないから知り合いは誰もいない。だからみんなが来るのを待つてたんだよ。なあ。遊子。」

「うん。」

「そりかまあ分かつた。ところでなぜ夏梨ちゃんは何故死んだんだ？見た目はずいぶん若いが。」

「あー。私が死んだのは一兄たちが死んだ10年後。つまりあたしの年は30歳。○・k?ンで、死因は、ひかれそうになっていた親子を助けて死んだ。」

「ああ。そうか。一つだけ聞いていいかい？」

「うん。」

夏梨が答えた。

「後悔してないか？」

「もち！」

夏梨は飛び切りの笑顔で答えた。

「そうかい。」

石田は安心したような声を出した。

「おーい。もう一かい。」

一護が少し大きめの声を出した。

「ああ。もちろん。」

石田は答えた。

「ンじや最後にチャード。」

「ム。俺は、……。上から鉄骨が降つてきて死んだ。」

「ン？ 前にもこんなことなかつたか？」

一護が水色に聞いた。

「あーー。うん、あつたね。」

「だよな」

「うん」

「……。ちょっと二人とも何話してるので？ ねえなに？ なんなのー？」

「なんですか。浅野さん。」

「はっ。水色が敬^{ゴブ}ギヤ」

「だ・ま・れ」

たつきが、啓吾の腹を踏んだ。

（あははは。さつきもあつたな）の光景。

井上は内心苦笑した。

「は…い」

啓吾はのどから搾りだいたような声を出した。

「ねーインコの兄ちゃん。」

夏梨がチャードに聞いた。

「インコの兄ちゃんじゃない。茶渡泰虎だ。」

「あつやう。まあそれは置いといて。……。さつき自分の死に方のこと話してるとき細かいことハシヨッただる。」

「ム。」

（やつと気づいたか）

チャードは思った。

「ム、じゃなくてーちゃんと答へなよ！ えーとなんだつけ。やー、」

「違うぞ夏梨！ 茶渡兄じゃなく、チャード兄だー。」

一心がこじりとばかり胸を張つて夏梨に言った。

「だまれ親父。」

夏梨が睨んだ。

「はーい。」

「んじゃ。チャド兄はどうして死んだの?」

夏梨が改めて聞いた。

「ム。俺は、ビル建設現場の道をとつてたら、ベビーカーを押しながら歩いてる婦人の上に鉄骨が降ってきた。それを俺はかばって死んだ」

「ふーん。あたしと同じじやん。」

「でもよーチャドー。お前高校のときは、上から鉄骨が降ってきても生きてたじゃん。」

一護が聞いた。

「打ち所が悪かつたようだ。」

「…。そうか。」

同窓会？（後書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しくお願いします。
誤文字などの指摘がありましたら報告お願いします。
感想お待ちしています。

死神にならないか？（前書き）

第2話、どうぞ！。

死神にならないか？

私たちの運命は

もつ一度交わる」とができるのだろうか？

*

*

*

*

尸魂界。

十三番隊隊舎。

「その話は本当ですか。浮竹隊長！」

「本当だ。」

ルキアは浮竹の答えを聞き、驚いたような表情をしていた。

「そうですか。私が…。」

「いやなら行かなくていいんだぞ。」

「…。いや。行きます。やはりこのことは私が適任だと思いますので。」

「ああ。先生もそうおっしゃっていた。でも一人で行くのか？。」

「ええ。そうですね。でもそうしたら誰を誘おうか…。」

「ああ。そうだな。3番隊の阿散井君なんてどうだ。」

「ええ。それは私も考えたのですが。恋次は、何せ隊長の身ですの

で。仕事が忙しいかなーと。」

「ああそうか。じゃあ…。そุดだな田番谷隊長とかは？特に一護君の妹の夏梨ちゃんだけ？」

「はい。」

「喜びそうじやない。」

「

「ええ。でも田畠谷隊長はちゅうと今は、手が離せないやつなので。

「…。そつか。じゃあやつぱし一人で行くのか？」

「はい！」

ルキアは気合が入った声で答えた。

「そつか。まあそんなに難しくはないだりつ。もう少ししたらあつちから来そうだけじな。」

「そうですね。」

ルキアは苦笑した。

「それじゃ。行つてきます。」

「おう。」

ルキアは瞬歩で、その場から消えた。

「楽しみかなあ。朽木は。」

浮竹は、ふふっと微笑みながらつぶやいた。

「さあー！今日もじりむ。」

ばた。

「キヤー！ 浮竹隊長大丈夫ですか？！」

近くで隊長のことを見ていた清音が叫んだ。

（ああ。今日も布団かな。）

浮竹は他人事のように思つていた。

*

*

*

*

西流魂街1地区

「…。結局みんな寿命で死んだんじゃないんだね。」

遊子が言つた。

「そうだな。まあそりじやなきやみんなこんなに若いわけないしな。

「一護が苦笑しながら言った。

「ところで黒崎。ほかに僕たちに質問はないのかい？」

「…。」

「お兄ちゃん？」

「ン。あーあるぜ。もう行っちゃえばぶつちやけこれ最後の質問だ

ぜ。」

「…………（ゴク）…………」

一護以外のみんながつばを飲み込んだ。

「みんな……。死神になる気はないか？」

「えつ。」

声を出したのは…夏梨だ。

「それ本氣？一兄。」

「本氣だぜ。」

「みんな多少は靈力があるだろ。」

「うん。まあ。」

答えたのはたつきだ。

「だから誘つてんだ。死神にならないかつて。」

「…………。」「…………」

みんなは黙りこくつた。まあ当然だな。一護はそう思つた。

「それほんと！一兄！！」

ゆういつ夏梨だけが目を輝かせ一護に聞いた。そんな夏梨の態度に驚いたのか、一護は一瞬言葉を失つた。

「ああ。まあな。」

「あたし絶対なるよ一兄！。」

「そ、そうか。」

「みんなは？。」

夏梨は生き生きとしてさつきから黙つているみんなに聞いた。

「私はなつてもいいよ。」

井上だ。ひじを曲げる程度に手を挙げながら言った。

「あたしもなつていいよ！…ていうか、私はバリバリなる気満々だつたけどな。」

たつきが意氣揚揚に答えた。

「はーい俺も俺も。」

「僕も。」

「ム。俺も。」

「わ、私も。」

上から啓吾、水色、チャド、遊子の順だ。

「そうか。」

一護は内心胸をなでおろした。みんなの反応は少し予想外だつたらだ。

「残りは…石田だけだな。」

みんなは石田を見た。石田はうつむいていた。

が、急に顔をあげた。

「はあ。君たちなんだい。人の顔をじろじろ見て。僕の顔に何かついてるのか？」

「ン。いやお前はどうだ…。死神になるかどうか。」

「僕は、滅却師クインシーだ。でもまあいい。いいよ暇だから。死神になつてあげても。」

(めちゃくちゃ上から田線だ)

一護たちは心の中で思つた。

「そうか。じゃみんなで死神になるぞー。」

「何そのやる気のない声は。」

たつきが言つた。

「ねえ黒崎君。死神になるには、死神の学校に行かなくちゃいけないんじゃないの？。」

井上が一護に聞いた。

「えつそななの？。」

啓吾も、一護に問いかけた。

「ああ。やつだ。」

「えつじやあ、試験とかはあるの。」

「…。じゃあ、それはそこそこいる人に説明してもいいおつか。」

一護は家の裏を指しながら言った。

「くつ。そこに誰かいるの?。」

井上が変な声を上げた。

(馬鹿な。一護に私の靈圧がわかるはずが…。)

「いいから出てきなよ。」

一護が呆れていった。

「出でこないなら迎えに行へよ。ただしあと一〇秒たつたら。」

「一〇。九。」

(じつかる出でこべか?)

「八。七。六。」

(どうする。)

「五。四。三。」

(あーも考えてもらいちが明かない。)

「二。一。口。」

シコン。

「ふー。やつと出てきたか。」

今までてきた人物を見てみんなの顔が驚きやら嬉しさやら。

一護は今出てきた人物に話しかけた。

「……。久しぶりだな。…。ルキア。」

死神にならないか？（後書き）

どうでしたか？ついにルキア登場です！

誤文字のじ揃揃、感想お待ちしています。

漁靈廷へ（前書き）

ルキア登場しました！ちなみにルキアは1-3番隊副隊長です。

それでは、第3話スタート！

あなたの思い

私の考え方

*

*

*

*

「ぐ、朽木さん…。」

「朽木…。」

「朽木さん。」

「朽木さん。」

「ルキア姉。」

「ルキアちゃん。」

「…。」「

「朽木さん…。」

「ル、ルキアちゃん！？。」

上から、井上、チャド、石田、たつき、夏梨、遊子、一心、水色、
路智だ。

「…。」

ルキアは黙つて、一護のほうを向いた。

「ン。なんだルキア？。」
ドシ ドシ ドシ ドシ

ルキアがすごい足音を立てながら一護のほうへ近づいた。
「何が…。久しぶり…だ。」

「へつー。」

一護は驚いて変な声を上げた。

「バン！」

「つ……。何すんだよ、ルキア！！痛いじゃないか！。」

「当たり前だ！痛いように殴つたんだからなー。」

ルキアはまた一護を殴つた。

「「「「「「「「……。」「」「」「」「」「」「」

みんな目の前の光景に唖然とした。

「ちよつと朽木さん！やめなつてー。」

再び、ルキアが、一護のことを殴つた時の音で我に帰つた井上が、急いで止めた。

「と、止めるな！井上……あと一発。あと一発、殴らなければ私の気が收まらない……。」

そう言いながらルキアは、自分の拳に、「ハアー。」と息をかけた。

「なんで朽木さん、出てきてそつそう、黒崎君を殴つてんの？。」

「……あの、一護に私の存在がばれたからだ。」

「おい！ルキア今、俺のことを「あの」って言つたら…どういう意味だそれ！」

「フン。そのまんまの意味だ。それ以外になにがある。」

「なんだと！俺より弱いくせに。」

「貴様こそなんだ。さつきから偉そつてーお前はそんなに偉いのか？」もう死神代行ではなかろうにーーー。」

「だまれーお前にそ、そんなに偉くなつたのか？」

「フン。」

ルキアはそういうながら自分の左腕についている、副官掌を見せた。

「どうだー。」

「昇進したのか…。」

石田がつぶやいた。

「ああ。さすがに50年もたつとな。」

「お前その割には、ちっとも成長してねえじゃないか！外見が。」
一護が今思ったことを口にした。

「五月蠅い！たわけが！。」

ルキアは、顔を真っ赤にして答えた。

「はいはい。」

慣れたようなやり取りに、一護以外のみんなは、いまだに固まっていた。途中でつぶやいた石田、井上も、再び硬直状態に、戻っていた。

「ルキ姉！！」

一番最初に、硬直を解いたのは、夏梨だ。

「…。なんだ。夏梨か。」

一護が少し驚きつつ、つぶやいた。

(まさか一番最初に、ルキアに声をかけるのが夏梨だとは思わなかつた。)

「なんだ。夏梨。」

ルキアが夏梨に問いかけた。

「うん。なんでルキ姉は、ここにいるの？」

(確かにそうだ。なんでルキアがここにいるんだ？)
一護は今の夏梨の問いかけを聞き、思った。

「…。私は、一護たちを迎えてきた。」

「……。へつ？。」

一護がすつとんきょううな声を上げた。

「…えつ。なになに。なんでルキアちゃんが一護たちを迎えてきたの？」

今の一護の声を聞き、我に返ったのか、啓吾がルキアに聞いた。
「つむ。私は、一護、遊子が死に、尸魂界へ来たとき、一護を死神に引き入れようとした…というは知ってるな。」
ルキアは、皆の顔を見渡しながら言つた。

当然みんなは、うなずいた。

「それでその時、一護は断つた。」

「うん。」

遊子がうなずいた。

「その時の一護の言い分が、『俺たちが死んだのは、皆より早い。だからここに』。知り合いがいねえ。まあここにいるやつら、全員そうだけどな…。けど俺は、しばらくは遊子といたい。しかも俺は死神になる気はねえ。遊子を一人にしたくなねえからな…。また、俺に死神になるようにお前たち死神が、言いに来るなら、おれの知り合いが全員死んだとき、もう一度来てくれ…。その時までに、答えは用意しとく。』

…だ。だから約束どおりに、私は迎えに来たのだ！」

「そりだつたんだ…。」

井上がつぶやいた。

「…黒崎。お前、そんなこと言つてたのか。」

石田が一護に聞いた。

(…。俺、そんなこと言つたか?)

一護は心の中で自分に問い合わせていた。

一護は真剣に、今ルキアに聞かれたことを、考えていた。

「…い…。お…。黒崎!おい。黒崎!。」

考へにふつけていたのか。一護は石田の声を聞き取るのに時間がか

かつた。

「ン。なんだ、石田。人の耳元で。」

「君が僕の質問を無視したからだ。」

「んだよ。そんぐらいで。てか、お前いつ俺に質問した?。」

「さつきださつきーもう一度言つてやろうか?。」

「ああ。頼む。」

「…。お前、そんなこと言つたのか?。」

「そんなこと?。」

「さつき朽木さんが言つてたことだ。」

(さつき?ああ。あのことか。)

「うん。言つたぜ。」

「そうか。」

「それで。」

「それでつて?。」

たつき、に声をかけられ、ふりかえりながら一護は答えた。

「だから、あんたが死神になることについて。」

「ああ。それか。なるぜ死神に。お前らもなるんだろう?。」

「なれるなら、なりたいけど。でも一護は、もともと死神代行だから、学校に行かなくていいんじゃないの?。」

たつきが聞いた。

「ン? そうかもな。どうなんだルキア。」

「ん。確かにお前なら、学校に行かなくてはいいかもしけないが、お前、鬼道ができるだろ?。」

「ああ。」

「だから、多分だが、その点に関しては、学校に行けと言われると思つが…。」

「だ、そうだ。たつき。」

「ふーん。で?。」

「で？って何が？」

「結局あんたは、死神の学校に行くの？行かないの？」

「うーんそうだな。俺的には行きたいけど。行つてもいいのか、ルキア？」

「ああ。総隊長は『本人の意思を尊重する』とおっしゃっていたからな。」

「じゃあ。俺、行くわ学校。」

「ちょっと。一兄そんなんに簡単に決めていいのかよ？」

夏梨が、「待った」と言いながら、聞いてきた。

「ああ。だつて俺の好きなようにしていいんだる。だつたら俺は学校に行くよ。といふか行つてみたいんだよ。死神の学校に。」

「そつ、そつかあ。じゃあいいよ。」

「……。話は、まとまつたか？」

話の区切りがついたのを、見てルキアが聞いた。

「ああ。」

一護が答えた。

「じゃあいくぞ。」

「……。行くつてどこに？」

石田が、聞いた。

「決まつてあるだろ。」

「…………はあ？」

全員が聞いた。

「瀧靈廷だ。」

瀬靈廷へ（後書き）

どうですか？ついに一護たちは、瀬靈廷へ出発します。

ちなみに、なぜ一護がルキアの存在に気づいたかは、次回でわかります。

一心の出番少ないですね。多分、次回でしばらくは出番がありません。

誤文字の修正掲載等の報告、感想、などなどお待ちしています。

滝靈廷へ、出発だ（前書き）

ルキアたちは、ついに滝靈廷へ出発です。

4話目スタート！

滝靈廷、出発だ

旅立つときは 仲間とともに

新たな場所に 足を踏み入れる

*

*

*

「…………」「滝靈廷？！」

これからどうに行くのかを、ルキアに聞き、帰ってきた答えが、皆を驚かせた。

「うむむ……そんなに驚かなくていいものを。」

「おこおこ。ルキア。なんでいきなり滝靈廷なんだよ？」

「ほかに行ける場所があるとでもいうのか？」

ルキアは一護の問いに、逆に聞いた。

「そりや。お前。俺たちが、行けるといふの——つか、——う……。」

「いや。なにぞ黒崎。そんなところが。」

石田が、きっぱりと言った。

「そんなきっぱり言つなよ……。」

「ほーらな、一護。」

「……。」

「あつそうだ。黒崎元隊長。」

「ん。なんだ？。」

今まで出番が少なすぎ、隅っこで落ち込んでた、一心が、顔を擧げた。

二
三
え

一一一

遊子、夏梨、一護、の3人は、驚いてものすごい、声を上げた。

「お、親父。隊長だったのか？」

「ああ。」

「そうか。俺は、7番隊元隊長だ。

『 』

卷之三

「ここにいる、皆が驚愕した声を上げた。

「貴様いかづるそこぞ！」

卷之三

(なんとかなんやう思ひ物があつたといふ。)

石田に心の中で思つた

「黒崎元隊長。」「なんだ。」「ちょっと。」

と、言いながらルキアは、手で招くよしなしぐさをした。

۱۰

「耳を

卷之三

「…。それはほんとか?ルキアちゃん。」

「はい。……。あとそのルキアちゃんといい

すが…。」

「えつ。なんで?。」

「そんなの決まってるだろ。」

今レギュラーマンの歴史(前編)――

「お前、今う呼ばれるのが、十三イからだらう。

お前はそう呼ばれるのが
キモイからだよひけ

(おいおい。夏梨。お前、親父に対する態度は変わらないんだな
…。)

一護は、思った。

「うひそ ん！」

「とてもいいづらいのですが…。その通りです。」

「ガビ ン。ひどいよー。ルキ「いいから。黒崎元隊長、早く
行ってください！」

「はーい。」

一心は、瞬歩でその場から消えた。

「おい。ルキア。親父はどこに行つたんだ？」

「一護は、まだ知らなくていい。」

「はあ？ それ、どういう「ああ、早く、瀬靈廷に行くぞ。」

「おい。ルキア。無視すんな！」

「だまれ！ 行くぞ！」

「行くのはいいけど。朽木さん。どうやつて行くのさ。」

石田が、さつきから疑問だったことをルキアにぶつけた。

「それは、これだ！」

ルキアはそう言いながら、馬を指さした。

「「「「「「馬あ？」」「」「」「」「」

「ああ。」

「てつ、まさかと思うけど、馬に乗つてトコトコ瀬靈廷に行く。
とかいうんじゃないよね、ルキ姉？」

夏梨が、疑いの目でルキアを見た。

「そんなわけなかろう。この馬は少し特殊でな。技術開発局に、頼
んで特別に作つてもらつたんだ。」

ルキアが自慢そうに言った。

「そこお前が自慢するといじやねえだろ。」

一護が、突つ込んだ。

「五月蠅い！黙つて聞け！」

「はーい。」

「で何が特殊なの。その馬。」

夏梨が、脱線した話を元に戻した。

「よく聞いた。この馬は、靈力があるやつでしか乗れないんだ。しかも、もともと死神だった者は、死神の姿に戻れる。」

「えつ。それって。つまり……。」

井上がつぶやいた。

「その馬に乗れば、黒崎は……。」

石田が井上の跡を継いだ。

「…………死神に戻れる？！」「…………」

「それほんとか！ルキア！！！」

一護がうれしそうな声を上げた。

「ああ。それでは、説明終わりだ。さあみんな、馬へ乗れ！。」

「ああ。」

みんな自分の前に来た、馬に、またがつた。

「どうだ。一護、死神に戻ったか？」

ルキアが一護に問いかけた。

「…。まだみた」

いだ。一護は最後まで言えなかつた。体が急に光だしたからだ。

「おい！ルキア、どうなつてんだ！？」

一護が素つ頓狂な声を出した。

「私にもわからん。なんせ、この馬は、だれにも試したことがないからな。」

「はあ？！俺は実験体かよ！」

「ああそんなところだ。

「お」

一、ベーシック

「護が、突っ込みを入れた。

一獲が急に大吉

一語不漏

急いで一讀のことを見た ルギア 石田 井上 チャト たつき 啓吾、水色、遊子、夏梨は、言葉を失つた。

一護が乗ってる馬、そして一護自身が、思わず目をつ

そして、すごい衝撃波とともに、一護の死神としての靈圧が、ルキアたちを襲った。

みんなは一瞬、
気を失つた。

「つ。技術開発局の奴ら目…。もつとましには作れぬのか…。」

最初に、口を開いたのは、ルキアだ。

「ほんとだよ」

石田カルギアに同意した。

「たく。一兄は、自分の靈圧くらい操作すればいいのに。
『靈圧』二兄は、『靈圧三』三弟は、『靈圧四』四弟は、

悪がこなな
靈圧操作が下手で！」

「い」
一兄
。」

「ぐ、黒崎…。」

「黒崎君。」

「一護…。」

「…一護。」

「一護。」

「い、一護。」

「お兄ちゃん…。」

上から、夏梨、石田、井上、チャド、路見、水色、たつき、遊子の順だ。

「い、一護！ その姿…。」

一護は、死神代行時、また死神がいつも着ている、死霸装を着て、背中には、一護の斬魄刀。斬月が、あつた。

「ん。ああ。なんか、俺、死神に戻ったみたいだな…。」

「…。『戻ったみたいだな。』じゃ、ないわ戯け！！。」

「んだよ、ルキア。なーにが、『戯け！！』だ。もともと、この馬は、俺が死神に戻るための馬だろ？」

「まあな。」

少し違うが…。ルキアは思った。

「じゃあ俺が、死神にもつどつたから良いんじゃねえか。」「そうだな。」

「ねえ。朽木さん。本当に、瀧靈廷に行くの？」

「ああ。」

「じゃあ早く行こうよ。」

「なんでだ？。」

「あついや。あ、のね。なんか私たちが乗っている、馬。機嫌、悪くなつたみたいで…。」

「…。」

「はあ？。」

ルキアは、驚いた。そして井上に促されるままに、井上たちが乗つている、馬を見た。

「ブルルウ。」

ほんとだ。技術開発局に奴ら曰。妙なところに、こだわりよつて。ルキアは、こぶしを握りながら、思った。

「まあいい。皆、それでは、これより瀧靈廷に出発だ！！」

瀧靈廷、出発だ（後書き）

瀧靈廷になかなか出発しませ
ん！ 次話には、出発できるか
な？

ついに、一心がいなくなりました。（笑）
なんで、一心がいなくなつたのかは、秘密です。

今回の話、なんか短いです。すいません。

誤文字の指摘、感想等、お待ちしています。

瀧靈廷への道のつ（繪畫版）

やつと、ルキアたちは、瀧靈廷へ出発です。

5話四スターーー。

瀧靈廷への道のり

仲間とともに 歩みを進め

仲間とともに 強くなれ

*

*

*

*

「おいルキア。俺どうすれば、いいんだ？」

「なにがだ。」

「いやあ。やつさ、俺が死神になつたとき、なぜかわからないが、馬が消えたんだ。」

「で？」

「いや。だから、俺はどうすれば、いいのかって聞いてるんだけど……。」

「そんなもの。瞬歩で来ればよかる。」

「いや。そうしたら。馬に乗つてる、ここいらはどつするんだ？ 瞬歩の速さに、ついてこれるのか？」

「当たり前だ。この馬をなんだと、思つてるんだ？」

「……俺を死神にするための馬。」

「馬鹿者！ そんなわけないだろ。この馬は、少しであるが、死神の力使えるのだ。ただし、この馬に乗つてる者の、靈圧により、多少の差は出るがな。」

「へえ。そうなの。じゃ、俺は瞬歩で行くわ。」

「ああ。そうしてくれ。す

ルキアは、空気を吸つた。

「それでは、皆、瀧靈廷へ行くぞ……。」

「…………おお

「 」「 」

*

*

*

*

ところ変わつて、瀧靈廷内。十二番隊隊舎

「来るかなあー？」護君は。

「来るでしょ。あの一護君なら。」

ルキアが、いなくなつてすぐ倒れた、浮竹は八番隊隊長と話をしていた。

「てゆうかさあ。浮竹、もう起き上がつて大丈夫なの？」

「ん。ああ、大丈夫、大丈夫。さつきは、目眩がただけだからね。

「いや、その目眩、普通の人に、とつてはものすんごいだつて……。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られる
からねえ。」

京楽は、思った。

「京楽は、心配性だなあ。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られる
からねえ。」

「あははは。そうだな。」

ドタ ドタ ドタ ドタ ドタ

ガラ

急に障子が開いた。

「報告します。朽木ルキア副隊長が、元死神代行、黒崎一護を死神
に戻すことに成功。また、本人は死神の学校、真央靈術院しんおうれいじゅついんに、行き

たいと、言つてる模様です。」

小椿が、ルキアからの報告を浮竹に話した。

「ちょっと……それ私が言おうと思つてたのよ……勝手に言わないでくれる?。」

清音が、障子の向こうから、顔を出した。

「そんなの、しらねーよ! 大体、地獄蝶が、俺のところに飛んできただから、俺が報告するのが、普通だろ!!。」

「あなたの、ところに飛んできたんじやなくて、たまたま、あんたがいたところに飛んできたんでしょ!! 勝手に、自分のところに飛んできたなんて思わないで!!。」

「な、何お……!。」

「何よ……私が何か間違えてるとしても言いたいの?。」

「ああー! そうだよ!。」

「じゃあ、言つてみなさいよ!。」

「はあ。また始まつたよ。」

「始まつちやつたね~。」

浮竹、京楽はあきれ顔で言つた。

「は～～い! ストッパー。」

京楽は、大声をだし、二人を制した。

「……。」

「それで?。」

「それで? といわれますと。」

小椿が、不思議そうに言つた。

「朽木は今、どこにいるの?。」

「はい。それでしたら、今は瀞靈廷に向かってるやつです。」

小椿の横から、清音が口を挟んだ。

「そうか。」

浮竹、ほつとしたような声を上げた。

*

*

*

*

「よしみんな。馬に瞬歩、させや。」

「てつ。黒崎！馬にどうやって瞬歩させるんだ！」

「さあどうやるんだうつな。」

「おい。」

石田が突っ込んだ。

「お　　い。ルキ　ア　　！石田達が、どうやって馬に瞬歩させるか聞いてんぞ！」

一護は、家の屋根に乗ってる、ルキアに呼びかけた。

「分かつた。ちょっと待ってる。今報告中だ。」

「へーい。」

「まつたく、一護は。：。報告します。」

ルキアは地獄蝶に向かつて、報告した。

「元死神代行、黒崎一護を死神の姿に戻すことに、成功。また本人は、真央靈術院に行きたいとのことです。報告、終わります。」

*

*

*

*

「馬に、瞬歩させるのは、実はすごく簡単なことだ。馬に乗つて『瞬歩したい』と思つ、といふか、念じるだけだ。」

「ホントー？」

夏梨が、訝しげに聞いた。

ルキアは、無言で頷いた。

「　「　「　「　「　「　……。」「　「　「　「　「

みんな、馬を瞬歩をせよ」と、念じた。

その時。

シヨン

2～4匹の馬が一きなり遠くに移動した。
瞬歩した、馬に乗っていたのは、

石田、井上、チャド、そして夏梨だ。

「つむ。石田達は、予想道理じやな。
ルキア、一護の後ろで急に声がした。

「よ、夜一さん。」

「夜一殿!。」

猫の姿の、夜一が、一人の後ろに座っていた。

「ふむ。夏梨が来るとわな。これは、予想外じや。
「てつー何でここにいるんすか!夜一さん!。」「
「なんじや。わしが此処にいてはいけないよう、元気になれるが。
「いや。やうは、言つてないけど。」

シヨン

また何匹か、瞬歩した。

今度は、水色、たつきだ。

「夏梨ひやーん、じつせりへやつたの?。」

「念じるだけだよ！遊子！」

卷之二

シユン

「わーいできた!。

一
せ
た
ね
遊
子
！

パチン!
ふたりは、ハイタッチした。

遊子が瞬歩した。

「おい！早く来いよ。置いてくぞ！」
「えー。ちょっと待つてよ。」

シユン

「え？ どうした。」

「ああ、お前はお前でいい。」

「え！ ちょっと、待つてよー。」護たちば、啓吾を置いて、600mぐらい進む。

「早く来いよ…。てつ、夜一さんーなに、何気に俺の方に乗つてる

「良いではないか。良いではないか。」

「はい。もういいです。」

*

*

*

*

「で、ルキア。いつ瀧靈廷につくんだ？」

「もう少しだ。」

「さつきからずっとその答えだぞ！」

「黙つてついてここ。もつすぐだからな。」

「わあ。」

「どうした井上？」

井上が、急に大声を出した。

「なんか私の馬と、私自身を守るよつて、オレンジ色の膜が出てきたんだけど…。」

「ほんとだなあ。」

一護はそう言いながら、チヨンと、さわつみた。

ジン

この感覚前にもあつたような…

一護は井上を守つてる物をさわりながら思つた。

何だつけなあ。なんか、井上の、能力だつけなあ。…。

一護はこれが何かを思い出した。

「おい、井上。」

「何？」

「お前のまわりあるオレンジのもの。それ、…。」

「盾舜六花じやないか？。」

「ほえ？。」

「ほえ？じゃなくて。そのオレンジのものは、お前の能力の、盾舜

六花の、三天結盾じゃないかっていつてんだ。

「たしかに。そういうわれるとそつかも。」

井上は、オレンジのものと睨めっこしながら言った。

「だろ。」

「…。ああそういうえば、言い忘れていたが、」

ルキアが急に口を挟んできた。

「この馬は、乗ってる者の靈圧によつてころころ変化する「じし」。

つまり、斬魄刀の能力と同じ。」

「…。ということは、私の斬魄刀の能力は、盾舞六花つてこと?。」
「そもそも言い切れない。この馬の変化は、乗ってる者の靈圧によつて変わるも…。井上は現世で才能を開花させてるから、単純にその時の名残で、馬の変化が、三天結盾だったといふこともある。」

「そうなんだあ。」

「なんか僕と、茶渡君も変化してきた。」

「ム。」

「石田の変化ってどんなんだ?。」

一護が石田のほうへ瞬歩した。

「そんなに変化はしてない。といって言えば、こいつの腹に、クインシークロスが出てきたことか。」

と言いながら、石田は馬の腹を指差した。

「ふーん。チャドは?。」

「ん。」

と言いながらチャドは、馬の腕を指差した。

「おつ。チャドの馬の腕、お前の戦つときの腕になつてるじゃん。」

一護は、

まあ、予想はしてたけどな。

とつぶやきながら、瞬歩した。

「うそつけえ。絶対おぬしは予想して、無かつたろ？」「

「五月蠅いすつよー。夜一せん。あと予想はしてました！！。」

「ほんとかのー？。」

一護はもう、無視した。

「あつあの、」

「ン？ どうした。遊子。」

「アッ！ お兄ちゃん。あのね私の馬もね、変化したの！」

「どう、変化したんだ？。」

「あのね！ 馬が、全体的に濡れてきたの。これって変化の一部？。」

「どうなんだ？ ルキア。」

「ああ。多分遊子は、流水系だな。」

「だつてよ、遊子。良かつたな！。」

「うん！。」

「ほほー。遊子は流水系か。」

「なんすか夜一さん。いちいち出てきて。」

「なんじや。出できりやダメなのか？。」

「。。」

一護はまた無視した。

「ねえ、一兄。あたしも変化したよー。」

「おっ。夏梨はどう、変化したんだ？。」

「あたしは、なんか」いつらがこう、電気が流れてるみたいに、ビ

リッと。」

「ん。夏梨は、鬼道系だな。」

「ふーん。」

感心なしか。夏梨は。。。。

一護は思った。

「流水系に鬼道系。しかも電氣ときたか。なかなかいい、組み合わ
せじやな。」

「また夜一が出てきた。一護は、最初から無視した。

「なんじや。つかかつてこんのかさみしいの。」

一護はまた無視した。

「なあいーちー」

「五月蠅いつすよー夜一さん……黙つててくださこ……。」

「はい。」

瀧靈廷への道のり（後書き）

なんか中途半端なところで終わりましたね。（汗）

今回は、なんとなくみんなの斬魄刀の能力を少し公開です！

残りの、たつき、路路、水色は次回で。

そういうえ、なぜ一護はルキアが来たのか分かったのか、…。書いてなかつた…。

次回、絶対書きます！

誤文字の指摘、感想等などなど、お待ちしています。

滌靈廷に到着ー（前書き）

ついに滌靈廷です。

6話スタートーーー！

瀧靈廷に到着！

新たな力 新たな能力

*

*

*

*

「いいなあ。」

たつきがつぶやいた。

「なんで私はでないのかなあ。変化。」

そう言いながら自分が乗ってる、馬を見た。

「わあ！」

それを見た瞬間、たつきは大声を上げた。

「どうした。たつき。」

一護が瞬歩で飛んできた。

「ついにきたよ。」

たつきは自分の馬を見るような形で止まつてた。

「な、何がきたんだ？」

一護は、なんか変だなと思いつつ、たつきに聞き返した。

「変化！」

「ほんとか。良かったな。」

「えつ。たつき姉もきたの。変化。」

「

「ほんとたつきちゃん! どんな変化なの?」

「よくぞ聞いた。織姫! 私の馬の此処、よ／＼見てござりん。」

「「「…。」「」」

一護、夏梨、織姫はたつきが指差した馬のおなかあたりを見た。

なんか色が変わってるなあ。最初は黒だた氣がする。あつ、また変わった。

一護は見ながら思つた。

「おーい。ルキア。馬の色が変わるのは何系だ。」

「色が変わるかあ。それは、鬼道系か? 夜一殿はどう思いますか?。」

「うむ。」

「おい、ルキア。なんで夜一さんに聞いてんだよ。」

シユン

ルキアが瞬歩して、一護の隣に來た。

「貴様には、関係ないだろ。黙つて聞いていとけ。」

「…。」

一護は無視した。

「おーい。言つてもよいか?。」

夜一が、一護の肩の上で伸びていた。

「はい。」

「色が変わるのは、鬼道系じゃううな。」

夜一は、すばり、という感じに言つた。

「そうですか。やはり鬼道系。」

「そうなのか。」

一護が会話に割り込んだ。

「なんだ一護。聞いておったのか。」

「聞きたくなくても聞いちゃうんですよ。夜一さん。」

「ああそーかいそーかい。」

夜一は受け流した。

一護は軽く無視した。

「で。たつきは、鬼道系つてことで間違いないんだな。」

「ああ。」

夜一の代わりに、ルキアが答えた。

「そうか。」

一護はそう言い、瞬歩でたつきのもとへ行つた。

「おーい。たつき。」

「何、一護。」

「お前の能力分かったぞ。完璧に信用していいのかはわからないけどな。」

「で！。」

たつきの顔は期待で輝いてる。

「お前は、やっぱし鬼道だとよ。」

「やっぱし。」

「やっぱし、てことは、予想してたんだな。」

「うんまあね。」

「そうか。」

一護はそう言つてから、瞬歩でルキアのところに移動した。

「ところで一護。」

瞬歩した瞬間に、ルキアが話しかけた。

「何故、あの時私の存在に気付いたのだ？」

ルキアが、悔しそうな眼をしていた。

「あの時つて？。」

一護はルキアが、言つてることが理解できなかつた。

「あの時だ、あ・の・と・き！私が、お前が住んでる家の後ろに隠れてた時だ！。なぜ、お前は私の存在に気付いたのかを聞いておるのだ！」

「…。ああ。あれか
一護は、理解した。

「そのことか。見えたんだよ、お前の姿が。」

「！。ほんとか。」

「ああ。」

「そうか、」

ルキアは、そつけなく答えた。
一護の答えが意外だつたようだ。

「いーちー。俺反応出ないよー。」

「反応じやなくて、変化でしょ啓吾。」

ルキアとの話が終わつた瞬間、啓吾と水色が話しかけてきた。

「僕は一応出たよ。変化。」

「オー！なんで、俺はいつも最後なのーー。」

啓吾が嘆いてるのをよそに、一護は水色に聞いた。

「で、どんな変化だ？」

「なんか馬が、急に暖かくなつてきたんだ。」

「それは、炎熱系だな。」

「ルキア！急に割り込んでくるな。」

「貴様はいつもやつておるだろう。」

そう言いルキアはキツと一護を睨んだ。

「はいはい。」

「ふーん僕は炎熱系か。ほかにも統系つてあるの？。」

水色がルキアに聞いた。

ルキアは、頷きながら言った。

「ああ。お前が持つてゐる炎熱系のほかに、氷雪系、遊子が持つてゐる、流水系。夏梨、たつきが持つてゐる鬼道系。そして、一護が持つてゐる、斬月は直接攻撃系だ。ちなみに私の「袖白雪」は、氷雪系だ。

「ふーん。」

水色は、あつさり返事をした。

「おーい。いーちー！。」

突然後ろで声がした。振り返つたら啓吾がいた。

「なんだよ。啓吾。」

「俺変化でないんですけど！」

「へー。もしかしてお前、死神の才能ないかもな。」

「ガビーン！」

「そう、気を落とすな。啓吾。」

ルキアが声をかけた。

「ルキアちゃん！」

「馬に変化が出ないのは、一護と同じ、直接攻撃系か馬に変化がない、鬼道系か本当に才能がないのかのどちらかだ。」

「えつなにそれ。」

「ほら着いたぞ！。」

ルキアは啓吾を無視しながら、言った。

「ついたつてどこに？。」

一護はルキアに聞いた。

みんなが瞬歩して、一護の隣に並んだ。

「わあ。」

「久しぶりだな。」

「ム。」

「誰かいるかな?。」

「…ここが。」

「ワーオ。」

「ヘーエ。」

上から、一番最初に一護の隣についた、夏梨。そして、石田、チャド、井上、たつき、啓吾、水色の順だ。

「何言つてるのだ一護。」

「何つて…。」

「下を見てみる。」

「えつ。あ…。」

一護は言葉を失つた。

「…」

「瀧靈廷だ。」

瀬靈廷に到着ー（後書き）

ついでに、瀬靈廷につきました！

この話で、なぜ、一護はルキアの存在に気付いたのか、お分かりいたしましたか？

分かつていただければ幸いです。

あと、余談なんですがルキアが現れて、どに行くのか一護が聞いたてルキアが答えたセリフと、上の最後のセリフが同じということに気付きました。

まあいいです。

「A new adventure and bonds」の、番外編始めました！

「A new adventure and bonds」^{番外}」
という題名です。

良かつたら、読んでみてください。

また、この番外編は皆様からのリクエスト話や、私が思いついたコメディ話、本編では触れられないルキアの昇進の由などを書いていく予定です。

何か、リクエストがありましたら、下の「一言」というところに書いてください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしています。

一 番隊隊舎（前書き）

特にあります。

7話目でいへん！

心は

誰かを大切に想うため

誰かを愛しく想うため

誰かを尊く想うため

誰かを護りたいと想うために

「やつと着いたか。」

夜一さんが、一番最初に口を開いた。

「なんすか。夜一さん。まるで何年かぶりに来たみたいな言い方して。」

「ほんとに何年かぶりに来たんじや。」

「時々来てたんじやないんすか。瀬靈廷に。」

「来てないの。かれこれ3~40年ぐらいい。」

「そつなのか、ルキア。」

「ああ。」

ルキアは頷きながら言った。

「そつなのか。」

「それよつさあ。黒崎君。」

井上が目を輝かせて、聞いてきた。

「なんだよ井上。」

「…………早く、瀧靈廷に行けよーお兄ちやん、一兄。」「

「ム。」

チヤド以外のみんなが、俺に向かつて叫んだ。

「分かつた、分かつたから、もうすぐ行くから。お前ら少しは落ち着けつて。」

とか何とか言つてる本人が一番行きたそうなんだけどな……。

石田は一護を見て思つた。

「おー、ルキア。早く瀧靈廷に行け。」

「ああ。みんなついてこ。」

「ビート。」

俺は聞いた。

「？丹坊のところだ。」

「？丹坊か。元氣してるかな、あいつ。」

俺は、そう言つて瞬歩で消えた。

みんな俺にならって、瞬歩で消えた。

*

*

*

*

「よつ久しぶりだな。？丹坊。」

俺は、？丹坊に会いそのままの勢いで話していた。

「お。久しぶりだな。一護。」

「ああ。ちよっとそこ通してくれないか？」

「一護の頼みならいいぞ。」

そう言い、？丹坊は自分の後ろにある大きな扉を開けた。

「 「 「 「 「 わーお。」 」 」 」

夏梨、遊子。そして、啓吾、水色、たつきが感嘆の声を上げた。

「 ょーく、見ろよ。」 じこが滌靈廷だ。」

一護は、感嘆の声を上げた五人に向かい、言った。

「 なんで、一護が言つてあるのだ。そこは、私が夜一殿のセリフではないか!。」

「 そんな固い」と氣にするなつて。ほら、もつみんな行つちまつたぞ。」

「 おい。お前ら、勝手に行くな。」

ルキアが、先の5人を追いかけて行つた。

「 ほれ。一護もはよ行かんか。置いてきぼりを食いつか。」

「 はいはい。井上たちは?。」

「 前じや。」

ほんとに置いてきぼりを食いつか。」

俺は思った。

*

*

*

*

「よつと。」

俺は、やつとルキアたちに追いついた。

「ちょい待てよ。ルキア。」

「なんだ。あとからくるお前が悪いのであつて！」

「こいつ、副隊長になつてから切れやすくなつたか？」

怒っている、ルキアを見て俺は思つた。

「ひらひらとひ、あいつらを追いかけるのに大変なのだ。夏梨はいつの間にかいなくなるし。遊子は、夏梨についていくし。啓吾はギャーギャーわめくし。まともなのは、水色とたつきだけか！」

「いや、そんなこと、俺に言われても。」

「お前の妹たちが迷子になつてゐるんだぞ！」

「遊子たちは迷子になつたのか？つか、もし迷子になつたとしてその馬には、探知機能とかついてないのか？」

「ついてんじやねえか。早くそれで探せよ。」「うう…。それは、ついてたような気がする。」

「誰を探すつて、一兄。」

後ろで声がした。

俺は振り返った。

「なんだ夏梨いたのか。遊子は?。」

「ん。」

夏梨は後ろを指差した。

「なんだよルキア。遊子も夏梨もいるじゃねえかよ。」

「ん。…。まあいい。これで全員そろつたか?。」

「ああ。た、ぶんな。」

俺はみんなを見渡しながら言つた。

「それじゃ。護挺十三隊の一一番隊隊舎に行くぞ。」

ルキアが言つた。

「ねえ、一兄それつて何?。」

夏梨が聞いてきた。

「ん。そうだなあ。死神の総本山といったところか。」

「ふーん。」

「じゃあ行くぞ。」

ルキアが言った。

シコン

ルキアは瞬歩でその場から消え、先ほどから見えていた大きな建物のところに立っていた。

あいつ、瞬歩できる距離が伸びたな。

俺は、ルキアを見ながら思つた。

そしてみんな、その建物に瞬歩した。

*

*

*

*

「ルイ、どう？」

たつきが聞いた。

「だから、これが一番隊舎。」

俺は答えた。

「それで私たち、この中に入るの？」

「ああ。まあそんなところだ。」

「そんなところだ。じゃないだろうが。私たちはこれからここに入つて、総隊長殿に会い死神の学校に通うのだろう。」

「えつ。ルキアも通うのか?」

「馬鹿か。私は通わない。副隊長の仕事があるからな。時々顔を見せに行くぞ。」

「はいはい。」

「ねえ。一兄。あたしたちなんか見られてる気がするんだけど……。」

「私も。」

「私も。」

「俺も。」

「僕も。」

上から、遊子、たつき、啓吾、水色の順。

「まあそりゃうな。俺たちここでは有名人だから。」

「えつそりゃうなの?ー。」

夏梨が驚いた声を上げた。

「まあな。あれ、言つてなかつたか?。」

「うん。」

「じゃあ。「ストップ。そこまでだ一講。^{しんおう} 言つとくがお前らのこと
は死神の学校、^{しんおう} 真央靈術院^{しんおうれいじゅついん}に十分といつ程授業に出る。あこつらに
教えるのはそれからでも遅くながりつ。」

「そうだな。じゃ、夏梨それまで我慢しどけ。」

「一兄たちどんないことしたの。あーもひ。早く知りたい!」

「あはは。まあいい。早く、総隊長に会いに行け!」ゼルキア。

「そうだな。」

ルキアは、そう言い一番隊舎の扉を開けた。

一 番隊隊舎（後書き）

フ 。 やつと、やつと瀧靈廷の一 番隊舎にておもつたね。

なんか、長くありませんでした？

今回ば、一 護視点で書いてみました。

良くかけてましたか？

番外編のほつも、宜しくお願ひします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしことに「リクエスト」などなどお待ちしています。

— 番隊にて（前書き）

総隊長登場です。

では、第8話どういへん—

一番隊にて

私は 世界のすべてを愛し

彼は 世界のすべてを恨む

「おい、ルキア。まだか。」

「まだだ。」

「長くねえか。」

「ああ。長いな。」

「もう二十分ぐらい歩いてるや。」

「あと一〇分くらい、歩くんや。」

「えー。」

私の後ろで、誰かが叫んだ。

まあしようがないだらう。最初に会つた時から休みなしで動いているからな。

一護たちは大丈夫だらう。が、啓吾や遊子たちにはきついだらうな。

実際、あいつらだけ馬に乗つてゐるのに少しペースが遅い。

私は思った。

「おい。まだか。」

また一護か。

お前は疲れてないだろ？

私は振り返った。

そしたら驚いた。一護は、遊子を背負つていた。

どうやら疲労で倒れたらしい。

そういえば、あの五人の中で遊子が一番靈圧が低かった。

なるほど。

私は理解した。

わざわざから、一護がしつこく「まだか。」と聞いてくる訳を。

遊子を休ましてあげたいのだ。

あの馬は、乗つてるだけで靈力を消耗する。

一護はそれをわかつて、遊子を馬から降ろしたのだろうか？

そんなことを考えると、田畠の部屋についた。

「一護、ついたぞ。」

私は、一番最初に一護に手をかけた。

早く遊子を休ましてあげたいだろう。

私なりの気遣いだ。

「お、わりいな。」

一護は、私が言いたいことを理解したよつだ。

「あつがとつ。」

こんなことで、お礼を言われる筋合にはない。

私はそう思った。

「総隊長。黒崎一護、またその同伴を連れてきました。」

私は、総隊長に報告した。

「つむ。馬はやの柱につなごどけ。といひで、」

私は、総隊長が仰ったように柱に馬を全部つないだ。

「はー。なんでじょうか。」

「あの、黒崎一護の姿が見えないが。」

「あー。一護はたぶん、遊子を寝かしてるとかと。」

「誰を寝かせてるって?。」

「一護の妹が倒れてしまつたので布団に寝かせてるかと。」

「そりが。まあ良一。早く、黒崎一護を！」^{ハラハラ}

「はー。」

私は、一護が遊子を寝かしている部屋の隅に行つた。

「おー、一護。総隊長が呼んでいる。」

「ん。そりが。じゃあ、遊子のこと頼むわ。夏梨。」

「うん。」

一護は、私の呼びかけにすぐに応じた。

「じゃあ。行くか、ルキア。」

「ああ。」

*

*

*

*

「黒崎一護。久しぶりだな。」

「そうですね。」

「妹は、良いのか?。」

「あー。まあみんなが、見てくれますから。」

「そうか。」

「はい。それで、」

「うむ。これから一週間後。おぬしらを、死神の学校「真央靈術院」の、編入入学を許可する。それまでの時間は自由に動いていいぞ。一週間後に一番隊隊舎に集合。お主も会たい奴があるじやろ?。」

「はい。ありがとうございます。」

「失礼します。」

「うむ。」

*

*

*

*

「おい、夏梨。遊子は大丈夫か?。」

「アツ、一兄。うん。遊子は大丈夫。とにかく話は?。」

「終わった。おい、皆。」

一護は、皆に向かって言った。

「学校への入学は、一週間後。それまでは自由行動だそうだ。けどここに来たことのない、遊子、夏梨。啓吾、水色、たつきは、ここに来たことのある、井上、石田、チャドか俺と一緒に行動するよ！」

私は、驚いた。

一護の言い分が、意外と筋が通つてたからだ。

「分かった。」

代表として、たつきが答えた。

「じゃあ、皆自由行動な。俺、行きたいところあるんだ。」

「遊子と夏梨は俺と来い。啓吾たちは、お好きなようだ。」

「じゃあ。」

シウン

一護は、遊子、夏梨と手をつないで瞬歩で消えた。

一 番隊にて（後書き）

短い！

自分でも驚きました。

今回は、ルキア視点で書いてみました。
なんかルキア視点で書いてると、話が暗い気がします。
どう思いますか？

今日は、休みなのでどんどん更新しちゃいますよー！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつ、リクエスト
などなど、お待ちしております。

十番隊（前書き）

今日、3話目の投稿です。

第9話スタート！

十番隊

人は 人と書き 「天使」 と読み
人は 人と書き 「悪魔」 と読む

「とりあえず、此処か。」

俺は十番隊舎の前で止まった。

「よし。田あけていいぞ。遊子、夏梨。」

「ん。」

遊子と夏梨が目を開けた。

「アッ!!」

「なんだ夏梨。ここがどこかわかるのか?。」

「うん。ここ、冬獅郎のところでしょう。」

「ああ。なんだ知り合いか?。」

「まあそんなど!。」

「ねーね、夏梨ちゃん。何の話?。」

「うん。それはね‥。」

夏梨は、話出した。

「あのね、あたしたちがまだ5年の頃。」

「おい、夏梨、入るぞ。話なら、歩きながら言え。」

「分かった。」

「夏梨ちゃん続き・続き。」

「うん。その時あたしたちは、サッカーをしようとしてね。」

「入るぞー。」

俺は堂々と、扉を開けた。

*

*

*

*

「松本

――。」「

「オッ、やつてるやつてる。」

「何が、やつてるのー兄。」「

「「」の声聞こえるか?。」

俺は夏梨に聞いた。

「 いじら 松本 一逃げるな ！」

冬獅郎が叫んでる。

夏梨は、笑った。

「 聞こえる、聞こえる。 」

「 ！」の声が聞こえる方向に行くと、冬獅郎がいるつてわけよ。」

「 なーる。でも一兄。なんか声が近づいてきてない？」

「 あー。言われると、そつかも。 」

*

*

*

「 松本逃げるな！。 」

ゴン ガン

冬獅郎が、氷輪丸を振り回した。

「 わー。タイチヨー！隊舎壊しちゃいけませんよ！。 」

「 お前が大人しくつかまってくれるな…。 」

らな。冬獅郎は言葉を途中で切った。

「ん。どうしたんですか？隊『黒崎、松本を捕まえろー。』

「はあ？。」

乱菊は急いで前を見た。だが時すでに遅し。

*

*

*

俺は、反射的にこっちに走つてくる人を捕まえた。

死霸装の、襟元を。

冬獅郎は、松本って言つてたから、乱菊さんか。

また仕事サボつたのか？

「ふー。助かつたぜ黒崎。ていうか、お前いつこじて来たんだ？」

「やだー。隊長！忘れちゃつたんですか？さつき、地獄蝶が来て言つてたじゃないですか。『黒崎一護が来た。』って。」

乱菊さんが、俺の手につかまつたまま、話した。

綺麗な髪が揺れた。

「お前のせいで聞き損ねたんだろうが、松本

「..」

「す、すこませんでした。」

乱菊さんは、そう言つて逃げるそぶりを見せたが、失敗。

冬獅郎につかまつた。

「まあいい。来い、黒崎。」

「一兄だけじゃないんだけど。」

急に後ろから声がした。

冬獅郎の肩が、「ピクッ」と動いたよつた気がした。気のせいかな?

「か、夏梨。」

冬獅郎は振り返りながら言つた。

「大当たり。」

「お前らも來てたのか。ん。後ろにいるやつは?」

「あたしの双子のお姉ちゃんの遊子。」

「あ、あの。初めまして。黒崎遊子といいます。」

「うわー。十番隊隊長、田番谷 冬獅郎だ。」

「小さな隊長さんだね。」

「余計な御世話だ。」

確かに

俺は思つた。

50年もたつてこののに冬獅郎の背は、10?程度しか伸びてなかつた。

「じゃあ、宜しく。田畠谷君。」

「田畠谷隊長だ。」

たく。この兄弟はそろつていつなのか?

冬獅郎は思つた。

「…。まあいい。来い。」

「「「ハーヴ。」「」」

一譲、遊子、夏梨は、そろつて返事をした。

ソロ
リ。

乱菊さんが、逃げようとしていた。

「ひ、松本!逃げるなーお前は別だ。とりあえず来い。」

「…。はー。」

最後のチャンスだと思ったの。』

乱菊は思った。

*

*

*

*

「で、お前はなんでここに来たんだ。」

カリカリ

「ん。暇つぶしだよ、暇つぶし。俺たち、一週間後に、えーと…。
ああそうだ。真央靈術院に行くんだ。で、それまでいろんなことを
わろかなーて。」

カリカリ

「それで、最初に来たのがここってわけか。」

カリカリ

「ま、そんなとこだ。」

「おい。松本、それが終わったらこっちな。」

「はい。」

乱菊さんはさつき、冬獅郎につかまつてから今まで貯めてた分を全部やらされている。

「おー寝ろ寝ろー。今日はいいお泊まり。」
「おー寝ろ寝ろー。今日はいいお泊まり。」

どれだけ貯めてたんだ。

俺は、思った。

「ねーえ冬獅郎。」

夏梨が、冬獅郎に話しかけた。

「田畠谷隊長だ。」

「なんかないの?」

「なんかってなんだ。」

「なんかだよ。」

「俺は仕事で忙しだ。用がないなら早く、出て行ってくれ。」

「やだー。」

「お兄ちゃん。私、ちよつと寝るわ。」

遊子が、俺に話しかけてきた。

「おー、勝手に決めるな。」

「良いだろ、別に。俺たち泊まるところねえんだよ。」

「そんなの、朽木のところ泊まればいいだろ。」

「ルキアのところは最後。」

「…。ほかに泊まるところでも考へてんのか?。」

「まあな。明日は、恋次のところ。明後日も恋次のところで、なんかい
いとこあつたら、そつちに泊まろうかなーなんて。そういえば、恋
次つて昇格したのか?。」

「ん。ああ。そうだな。」

冬獅郎は、書類への手をとめないで答えた。

「何に昇格したんだ?。」

「三番隊隊長だ。」

「へー。恋次が隊長ねー。えつ。…。恋次が隊長だつて
ーーー。」

「ああ。そうだ。聞いてなかつたのか?。」

「ま、あな。」

「阿散井は隊長だ。三番隊のな。」

「マジか。」

「マジだ。」

恋次が、あの恋次が隊長か。なんか嫌だな。

俺は思った。

「更木のところに泊まるつて何のはどうだ？」

冬獅郎が、話を戻した。

「剣八のところなんて、俺殺す気か？」

「やつだな。とこつか、お前本当に此処に泊まるのか？」

冬獅郎は、なんか嫌そつた顔をして言った。

なんか、何気に酷いな。

俺は思った。

「ああ。ほかに泊まるところがねえつて言つてんだろ。」

「やついい。泊まるならとまれ。そのかわり、明日こま、いなくなれ。」

「酷いことやつだな。じゃあ、お言葉に甘えて今日は泊まることにする。」

「勝手にしてくれ。」

十番隊（後書き）

またまた、短い！

すいません。

初めて、本編で、冬獅郎登場です！
また、乱菊さんを叱ります。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしています。

十番隊　？（前書き）

夏梨と冬獅郎です。

第10話スタート！

十番隊 ?

己の為に 命を守り

仲間の為に 命を捨てる

「ん

」。

あたしは田を覚ました。

「此処は……。」

そうだ。昨日は冬獅郎の所に泊まつたんだっけ。

にしても冬獅郎ってケチ。

部屋がないから、執務室で寝ろなんて。

しきりがないから、冬獅郎の部屋から布団を二枚持つてきたけど。

今何時だらう。

あたしは時計を見た。

時間は……

「六時四十一分。」

ちよつと早いな。

あたしは隣を見た。

遊子はまだ寝てるし。一兄もまだ寝てる。

一兄が起きてないから瞬歩で違つところに連れて行つてもうえない
し。

あたしが、瞬歩使えたらよかつたのに。

その時。

ガン キン

裏庭で音がした。

何だろ？

あたしはそう思い駆け出した。

*

*

*

*

裏庭についた。

ガン

まだ、音はなつている。

あたしは、音が鳴つてるとこに行つた。

「と、冬獅郎…。」

そこには、冬獅郎が斬魄刀を持っている格好で立つていた。

「夏梨か。早いな。何してんの?」

冬獅郎はあたしに気付き話しかけてきた。

「それは、いつのセリフ。冬獅郎に向つてんの?..」

「見りやわかるだろ。剣の修業だ。」

「なんで、冬獅郎は隊長なのに修行してんの?..」

「お前には関係ないだろ。」

「わうだけど…。でも冬獅郎今ままで十分強じじゃないー。」

「…。わづか、かもな。でも俺はまだまだ未熟だ。」

そうこうつ、冬獅郎の顔はどうかみしげに見えた。

「言つたくないならこゝよ。そこまで問い合わせないし。」

「…。そつか。じゃあ、お前はなんでここのるんだ?」

「…。あれ、なにしようとしたんだっけ?」

なんであたし、此処にいるの？

「俺に聞くな。」

「やうだね。…。そりだ冬獅郎！あたしに瞬歩教えてくんない？」

「今度学校に行くんだる。そん時教えてもらひえ。」

「でもあたし、瞬歩してみたいんだよ。ね、この通り。」

あたしは頭を下げる。

「だめだ。第一俺は今修行中だ。瞬歩なんて学校に行つてからでも習つし、そんなに習いたいならお前の兄貴に教えてもらひえ。」

冬獅郎はやう言つて、修行を再開した。

「え

あたしは驚愕した。

わざわざあたしが頭を下げるの。

「五月蠅い。」

「なんだよケチ！」

「ケチで結構。」

「ベ

ー！」

あたしは、恨みを込めて言ひそのまま執務室に向かった。

「なんだ、あいつ。大人になつてもあんなことやつてんのか。子供か？」

後ろで、冬獅郎がつぶやいてるのが聞こえた。

なんかムカついてきた。

「子供で悪かつたですね！」

あたしは、叫んだ。

「なんだ、聞こえたのか。」

また冬獅郎がつぶやいてる。

あたしは、無視した。

*

*

*

*

なんだよ、冬獅郎の奴。

ほんとにケチ！

ガラ

あたしは力任せに、扉を開けた。

なんか、いい匂い!

あたしは、思つた。

「あつ。夏梨ちゃん! どこ行つてたの?」

「ん。
裏庭。」

遊子。起きたのか。

なんかわからぬけど、あたしの怒りは冷めて行つた。

「一兄は？」

「お兄ちゃんならソフアーダよ。」

遊子が答えた。

卷之三

おはよう。一兄、どちらで今何時?」

あたしの怒りは、完全に冷めた。

なんでだろう？

まいいや。

「今。今は八時四十三分だな。」

…。一時間も。あたしは、一時間もあそびこいたんだ。

時間がたつのは、早いな。

あたしは、思った。

「やつか。ところで、この匂い何?」

わざから漂つてくるこの匂いが疑問になつた。

「これ。」

遊子はやつ言い机を指差した。

机なんてあつたか?

よく見ると、布団はなくなつていた。

それで、机が出てきたつてわけか。

乱菊さんの特等席が。

あたしはそう思いながら、机に近づいた。

机の上には、肉まんが乗つっていた。

「此處つて肉まんあつたんだ。」

肉まんを見たときのあたしの第一声。

「なんだ、反応つすいな。」

一兄は、驚いたような声を上げた。

「これ、食べていいの？」

あたしは一兄に聞いた。

「さあな。わからんねえから冬獅郎を待ってるんだ。」

「そう。」

冬獅郎。聞いたらまた怒りが復活するかと思ったけど、あたしは全然怒っていなかつた。

「それ、食つていいぞ。」

冬獅郎だ。

いつの間にか入ってきたのか。

冬獅郎は壁に寄りかかっていた。

「そつか。じゃあ、「「いただきまーす!」」

あたし、遊子、一兄は、同時に肉まんにかぶりついた。

「そのかわり、それ食つたら、早く出でけ。」

「はーい。」

一兄が代表して答えた。

やつぱしケチだ。

あたしは思った。

*

*

*

「「「」」馳走様 ー」「」

「んじや、出でけ。」

カリカリ

「なんだよ冬獅郎。つめへーな。」

カリカリ

「五月蠅い。」

「くいくい。出でこまますよ。れよひなひ。乱菊さん仕事がんばつ
てくだせーねー。」

乱菊さんは、まだ終わっていない昨日の仕事をしていた。

「はーい。」

乱菊さんは、すこし小さい声で答えた。

あたしにはもう、怒りがなかつた。

なんだろ。

ま、いいや。

「じゃ、冬獅郎。また今度な。」

「わい。」

そういう、一兄はあたしと遊子の手を取り瞬歩した。

引っ張つてもうひ瞬歩つて、周りの風景がすんじゃ速ですぎていくから気持ち悪くなるんだよな。

あたしは、そう思って周りの風景が目にへらないよひて、目を閉じた。

十番隊　？（後書き）

今回は夏梨田線です。

どうでしょつか？

夏梨田線って結構書きやすいです。

あんまり、一護の出番ありませんでしたね…。

次回も出番はないと思います。

次回は、自由行動になった、啓吾たちのお話です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。などなどお待ちしています。

忙しい一週間 ?

己の為に 刃を 振るつな

仲間の為に 刃を 振るえ

時は少々遡る。

一護がみんなにこれからは自由時間だといい遊子と夏梨を連れて消えた。

「行っちゃった。」

略語がつぶやいた。

「あーあ。これで僕らは朽木さんか石田君たちと一緒に行動しなきゃいけないんだね。」

水色が言った。

「なんだい。まるで僕たちとは行動したくないみたいな言い方。」

「だつてそうだもん！」

啓吾が叫んだ。

「俺は、一護と行きたかったんだも

ん！」

みんなは、啓吾を無視した。

「じゃあ、井上と有沢は私と来い。瀬靈廷を案内してやる。ああ。
井上は知ってるか。」

「うん！途中で十番隊によりたいナビにい？」

「いいが、なんでだ？」

「乱菊さんには会いたいからー。」

「そうか。いいぞ！」

「ありがとう！朽木さん。」

「よろしくね。朽木さん、織姫。」

「まつかせとこでー。」

「あらうわ。」

「茶渡君。僕は、ちよつと行きたかったことがあるから。あと直しへ。」

「む。」

「アッ！石田、この、ビルに行へんだ

ー」

「君には関係ない。浅野君。」

そういって、石田は飛廉脚で消えた。

「あいつ、瞬歩使えたのか。」

啓吾がつぶやいた。

「違う。あれは瞬歩でなく飛廉脚ひれんきゃくだ。クイーンシー滅却師が使える。死神シテイで言いへ、瞬歩だ。」

チャドが説明した。

「へー。やうなんだ。」

水色がつぶやいた。

「ヒロド、僕たち置いてきぱりだけ。」

また、水色が言った。

「あつ。ほんとだ。」

さつきまで、そこにいたルキアたちはいなくなつて、一護もいない。そして、石田もいなくなつた。

「これからどうする？』

「どうかれて眞われても……。俺たち知り合い、いないし。」

「俺はこゝだ。」

「……よかつた。チャドはどうに知り合いがいるんだ？」

路路が安堵したような声を漏らした。

「9番隊。」

「9番隊って遠いか？」

「わあな、」

「わあなつてなんなの?ねーなんなの?..」

「とつあべず、行こひ。」

そつまつてチャド、路路、水色の三人は、出発したのであった。

*

*

*

*

「チャドまだー?」

「まだだ。」

「…。ついたぞ。」

「おひ。じいが、9番隊か。」

啓吾が言った。

「ここで、一週間過ごすの?」

水色がチャドに聞いた。

「ム。」

「「そり。」」

□□□

「誰だ。」

顔に、「69」と書いてある人が出た。

「俺だ。」

チャドは、言葉数少なく答えた。

「…。チャドか!久しづりだな!」

「久しづり。」

「「……。」」

会話が終わってしまった。

「えっと…。なんでここにいるんだ?」

「ちょっと、止めてもらおうかと思つたからだ。」

「そ、そうか。ま、とりあえず中に入つてくれ。」

檜佐木は、チャドたちを中へ促した。

*

*

*

*

「で、だ。話をまとめると。」

「お前らは、黒崎に「死神にならないか」と言われ、死神になることを決意。ここまでは、あつてるな。」

三人は無言でうなづいた。

「そして、そこに十三番隊副隊長朽木ルキアがきた。」

「ん。」

「それで、瀧靈廷に向かつた。その時に、技術開発局の作った妙な馬のおかげで黒崎は死神に戻つた。」

「はい。」

水色が答えた。

「そして今日の朝。瀬靈廷につき、そのまま一番隊へ。そこで總隊長に「これから一週間は、自由行動とする」といわれ、どこに泊まるかと迷っていたとき。チャドが俺のことを思い出し、此処に来たってわけか。あつてるか？」

「はい。」

またもや、水色が答えた。

「せうか。…。まあいい、泊まるならとまれ。その代り、いろいろ手伝つてもうづばー。」

檜佐木が言った。

「「はい。」

「む。」

「せうか、せうか。これから一週間よろしく頼むぜ。チャドに、えーと…。」

「水色です。で、じつちが路西。」

「よろしくな。水色、路西。」

「「はー。」

じつして、この三人のドタバタな一週間が幕を開けた。

ほしー一週間　？（後書き）

どうでしたか？

なんか短くありません？

略語、水色、チャドのお話です。

後、1～2話は続きます。

ルキアたちも読んでいけばわかります。

誤文字の指摘、感想こんな話を書いてほしーとこうコクエスト。
などなどお待ちしています。

忙しい一週間 ?

限りがある 命には

時間には

「ほら、早くや」に運べ！」

「はい！」

「次はそれだ！」

「はい！」

「ほら、早く！みんな待ってるぞ！」

「はい！」

ここは、9番隊隊舎内。

ただいま、半年に一回の大掃除中。

「いやー。助かったよ。ちょうど人手が足りなかつたんだ。」

「いやいや。」

疲れ切った啓吾はとりあえず返事をした。

「じゃ、次は！」。」

と、9番隊の死神が指差した部屋を見て啓吾は驚愕した。

「此処何ですか？」

「ん。何の部屋だったかな？忘れたよ。でも一応掃除は全部屋やる
つてことだから。じゃ、頼んだよ。」

「…。」

この部屋の瓜やに驚愕した啓吾はもじりやべれなかつた。

「すう
…。
！」

啓吾の叫びはむなしくとも広い部屋に消えて行つた。

「おい、チャド。その箱はそこへ運んでくれ。」

「ム。」

ドスン

物凄い音がした。

いつたいその箱には、何が入ってるんだろう？

近くで見た僕は、そう思った。

「サンキューな。チャド。今度はこっちの箱を運んでくれ。」

檜佐木さんが言った。

「ム。」

僕は自分の仕事を始めた。

仕事と言つても内容は、啓吾と同じ。

掃除する部屋の大きさが違うだけで。

サツ サツ サツ サツ

箋で掃いて。

塵取りにごみを入れ。

ごみ箱に捨てるだけ。

これが、啓吾と僕に割り当てられた掃除。

そしてチャドは、大きな荷物をごみ置き場まで運ぶなどの重労働。

本人は慣れた手つきでやつっていく。

高校の時のバイトで工事現場をやっていたからなのかな？

僕は思った。

此処に来てもう四日。

来てからずっと掃除ばかりだ。

もう一回加減飽きてくる。

まあ、泊めさせてもう一つから文句は言えない。

でも、あと何日掃除すればいいのだろうか。

もしかして、僕たちが真央靈術院に行くまでやるのではないかと思つてしまつ。

…。もうすぐこの部屋の掃除が終わる。終わつたら、皆のところ手伝いに行こうかな。

「おー、水色。」

そんなことを考えていると、檜佐木さんが声をかけてきた。

「此処の掃除はもういいから、皆のところでも行つて掃除手伝つてやれ。」

隊長命令では、逆らえない。

僕は思った。

なるべく僕は自分の気持ちを顔に出さないよう心しているが、今回
はさつき思ったことが顔に出てしまったようだ。

「隊長命令だからってことで行かなくていいぜ。行くのがめんどく
さいなら行かなくてもいいけどな。」

「いえ。最初から行こうと思つておたので。行きますよ。」

僕はそう言い、啓吾がいる部屋の場所を聞いてから駆け出した。

「こりゃー隊舎の中で走るなー！」

後ろで、檜佐木さんの声が聞こえた。

「すいません。」

僕は小声で謝った。

檜佐木修兵。

彼は、この50年で元解を取得し隊長に上り詰めた。

副隊長は、子日並大樹ひぶなみだいき

斬魄刀は炎熱系らしい。詳しい情報は知らない。

まあ。この隊の紹介は置いといて。

とにかく僕ら三人は、ずっと掃除をさせられてるところ始末。

もう、飽きた。

掃除はあと何日で終わるのだろうか？

たつた一週間だったのにすりへ剥く感じ。

啓吾が掃除してるところを見ついた。

何だこれは。

これが部屋を見たときの第一印象だ。

いくらなんでも広すぎだ。

「啓吾　！」

僕は啓吾を呼んでみた。

「はーー。」

奥からぐぐもつた声が聞こえた。

「どうしてこの人のへ手伝いに来たよ。」

僕は大きな声を出しながら前へ進んでいった。

「ううううう。」

僕は啓吾を見つけた。

部屋の奥から掃除をしていたようだ。

「よ。僕は、あっちから掃除するからこゝ宜しく。」

「ああ。」

啓吾は、安堵した声を出した。

さすがにこの部屋を一人では、一日ではできなそうだ。

ふたりで分担すれば何とかなりそうだ。

3時間後。

部屋の掃除が終わり、僕たちは隊の食堂に行つた。

その時、檜佐木さんに声をかけられた。

「よし！掃除は終わったか？」

「はい。」「

僕たちは、同時に答えた。

「そうか。今日で隊の大掃除は終わったからこれからは少し戻魂界についての基本的な知識をつける。勉強はうちの隊の図書室を使え。誰かに教えてもらいたいなら、俺に言え。」

「「はい。」

また僕たちは同時に答えた。

そういう、僕たちは真央靈術院に向かつて準備を始めた。

そして三日後。

あの日から、一週間。

僕たちは、一番隊舎に集まつた。

忙しい一週間　？（後書き）

これで、皆様たちのお話は終わりです。

今度はまた一護たちの話に戻ります。

ちなみに田線は、水色です。

子曰並大樹は、オリキャラです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちしています。

恋次の地獄？　？

仲間と 歩みを進める

けれど 一時だけ歩みを止めろ

後ろを振り返る

過去を受け入れ 前へ進め

「おー、ついたぞ。遊子、夏梨。」

俺は、瞬歩してる間、田をつぶつてた2人に声をかけた。

「ビーム？」

「ルルは、三番隊。」

「お兄ちゃん。なんで三番隊にきたの？」

「まあ、行けばわかるつて。お前らは知らないけどな。」

やつ言い、俺は隊舎の扉を開けた。

*

*

*

*

「お　　い。れ　　んじ　　ー。」

「…。一兄何してんの?」

「俺の友達の恋次つていつやつを捜してんだ。」

「あつやつ。」

俺の隣に、死神が通つた。

「あの、すいません。ちょっとといいでですか?」

俺は、今通りかかった死神に話しかけた。

「はー、いいですけ…ど…。」

「ハフ…吉良さんじやないすか!」

「やつぱつーー護君!」

俺は驚いた。

「阿散井君に会いに来たのかい?けよつと今執務室に朽木副隊長たちも来てるよ。」

「えつ。ルキアたちも来てんのか。」

「ああ。」

セツム「吉良さんは俺たちを執務室に案内した。

*

*

*

*

「久しぶりだな！ 恋次！」

「黒崎君…まさか「んなと」のやつなんてね～！」

「一護ー！」の人なんなの？なんかわざから一護みたいなこと言つてるよ。」

「つ。それ、どうこいつ意味だ？」

「そのままの意味ですよー。」

「ねえ、一兄。一兄が捜してん人つて、じつ？」

「じつになーそー。」

「良いではないか恋次。ほんとにその通りなんだから。」

「何が言いてえんだ、てめえはー。」

「ほつほつほ。愉快じゃのー。」

「夜ーさんー」んなどにいたんすか。」

「お兄ちゅやん」れ…。」

「アハハ…。」

俺たちがきたときも、もつなんか言葉で言えない様だった。

「お前ら、何してんだ？」

俺は、ルキアたちに聞いた。

「向つて。たつきに恋次を紹介してるのだ。」

「そうか。あつそつだ、恋次ー。俺たちをこじまじめく泊めてくれないか？」

「さつ。なんでお前たちまで泊めなくちやいけないんだ。」

「俺達までついて、どうこうの意味だ？」

「こいつらも泊まるんだとよ。いい。いい。」

「良こじやねえか。別に。つこでに俺達まで泊めてくれよー。」

「ンンン

「どう。」

「十番隊隊長。田番谷冬獅郎だ。」

「とひじりーーー。」

俺は叫んだ。

「田畠谷隊長。またなんで隊長が直々に。」

「いいだら、暇だから。」

「お前の隊、暇なのか！」

「正確に言えば、松本が書類をためたせいで仕事の効率が悪くなつてるだけだ。」

「あいつ。」

「ていうか、なんで！」元黒崎たちがいるんだ！

「たまたまだよ、冬獅郎。」

「せうだ！田畠谷隊長からも言つてしまつてやつてください。」

恋次がすがるみつこ、冬獅郎に言つた。

「何をだ。」

「ここから全員、此処に泊まつとこいるんすよー。どうかして追い返せませんか？」

「朽木たちは、朽木邸に泊めればいいだらつ。だが、黒崎たちはだめだな。」

「なんで、すか？」

「あいつらは昨日俺のところに泊まつたんだ。しかもこいつら、追い返しても勝手に人の部屋から布団を持っていくから、みねえんだ。」

「おー、一護。そうなのか？」

恋次が聞いてきた。

「違う違う。俺たちはちゃんと冬獅郎に許可を取つたぜ。な、冬獅郎。」

俺は、冬獅郎がいた場所に顔を向けた。

「もういないぞ。一護。日番谷ななつつき瞬歩で逃げたわ。」

「ほんとですか！夜一さん！」

「ああ。」

「逃げやがつたな。あいつ。」

俺はつぶやいた。

「まあ、良いではないか一護。にしてもそのアイデア良いな。」

「良いって何が？」

俺は夜一さんに聞いた。

「勝手に人の部屋から布団を取つてくるつとこ、つやつじや。」

「何言つてんすか。夜一さん。まあ、俺たちはそいつするけどな。」

「おい、一護！ 勝手に俺の部屋から布団を取つてこに腰座わつてか！」

「ああ。」

「ああ。じゃねーよー。こに腰座るなー。その辺で野宿してろー。」

「ワ　　！　この人ケチだね夏梨ちゃん。」

遊子が微妙に恋次に聞こえるか聞こえないかぐらーいの声で恋次を侮辱し始めた。

「そうだな遊子。冬獅郎よりケチだ。」

夏梨が同意した。

「この人が隊長なんて嫌だね。」

「せうだな、遊子。こいつが隊長なんて嫌だぜ。」

俺も、同意した。

「あー、一兄もそいつ思つ？』

「もちろん。」

「おい、そこ。陰で人を侮辱するな！」

恋次が突つかかってきた。

「たった六人泊めるだけなのんな～。」

「あと儂も。」

「夜一さんは、2番隊に泊まつてください。」

「でも阿散井君ケチだね。」

「オッ井上もそう思うか。」

「うん。だって昨日は朽木邸に泊まつたんだけじ白哉さんは、快く良くなれてくれたよ。」

「そりそり。でも驚いたなー。朽木さんが4大貴族なんて。」

たつきが言った。

「ルキアは、養子だよな。」

俺が言った。

「えつそつなの？」

「違う。兄様が結婚された方が私の姉上だから私は義理の妹であつて養子ではない。」

「そ、そうだけ。」

「さうだー護。忘れるな。」

最初こそは、恋次が泊めてくれないからビーの「ーの言つてたのに、なぜか話はルキアが貴族ということになつていた。

「おい、俺も混ぜろよ！」

恋次が言つてきた。

俺たちは言い返した。思いつきり嫌味を込めて。

「「「「「此處に泊めてくれなきや、話に混ぜませ

ん。

「へへ。」

恋次がそつづぶや言つたのが聞こえた。

まあ、俺たちは無視して話を続けた。

「さういえば、夜一さんも4大貴族だよな。」

「さうじや。」

「「「えつー夜一さんて、まさか人間?ー。」

「さうじや。…。言つてなかつたかの?」

「うん。 言つてなかつた。」

「やうか。 わしは人間じや。」

「　　へ、へ　　……。」「」

衝撃の事実を知つた三人は返事しかできなかつた。

「…。あ　　もう、分かつたよ…。泊めりや　良いんだろ。泊めりや　!!。」

ついに、しびれを切らしたのか。 恋次が叫んだ。

「おっ。 おい、皆恋次から。 く出たぞ!。」

「ほんとか! — 讓。」

「おうよー。」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「　　「　　「　　「　　「　　お邪魔しま
す」「　　」「　　」「　　」「　　」

「はいはい。」

「うわ、阿散井君大変そつ…。」

吉良はやつ思つた。

「うして、恋次の地獄(?)の日々が始まつた。」

恋次の地獄？　？（後書き）

どうですか？

またまたシリーズものです。

ルキアたちは、朽木邸に泊まつてたんです。

目線は一護です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしています。

恋次の地獄？　？　吉良の巻（前書き）

最初に書くことのネタが尽きてしまったので、尸魂界の死神の名前
詞を書きます。

恋次の地獄？　？　吉良の巻

戦いには　　命を守る戦いと　　誇りを守り戦いがある。

by 浮竹

「おい恋次。飯まだか？」

「そんなの食堂に行つて食え。」

「食堂はどこにあるんだ？」

「そこ」の角を左に曲がって、突き当つたら右に曲がる。んで次の角を左に曲がって、そうして…。

「言葉で言われてもわかんないよ。恋次。」

「夏梨ちゃんの言つとおり…案内してよ恋次。」

「やうじゅ。案内せんか。恋次。」

「夜一 やんは黙つててください。ていつかそ」ー何気に俺を呼び捨てで呼ぶな。」

「良いじゃん。別に。ねえ遊子。」

「うん。」

「阿散井く ん。私もおなか減った。」

「あつ、あたしもあたしもー。」

「だから食堂に行つて食えつての。」

「だからその食堂がどこにあるのかが、わからないのだ。」

「白邊げに言つな、ルキア。」

「おい、恋次。この書類全部お前が書くのか?」

「ああ、そうだけど。」

「意外とす」いな。

「意外とつてなんだ。意外とつて。」

「ま、気にするな。」

「…。オツ良い所に来たじやねえか、吉良。」

「ハあ?」

たつた今執務室に入つた僕は驚いた。

何せ此処はもう黒崎君たちに占領されてたからだ。

「いや……。吉良ちひなと……。」

阿散井君はそう言つて、手招きした。

「ちょっとこいつらを食堂に連れて行ってくれねえか？さつきから、腹減つたってうるさいんだよ。」

「ん、うん。別にいいけど。」

なるほど。やつきの会話はこういつ意味だったのか。

まあ、会話の内容からしてわかるけど。

取りあえず、だれが何を言つてゐるのかを整理しよう。

上から、黒崎君	阿散井君	黒崎君	阿散井君	夏梨君
遊子君	人間姿に戻つてゐる夜一さん		阿散井君	夏梨君
遊子君	井上君	たつき君	阿散井君	朽木君
井君	黒崎君	阿散井君	黒崎君	阿散
阿散井君	阿散井君	阿散井君	黒崎君	

阿散井君という順番。

うわっ。阿散井君出番多ー！

そんなことを考えていると、阿散井君が声をかけてきた。

「やつかーじゃあ、早速だけど頼むわ。」

「わ、わかった。」

阿散井君……。君、今の自分の表情見て、いらっしゃん。

あんまり喜んでる阿散井君を見て僕は思った。

*

*

*

*

「はい。着いたよ食堂に。食べるものは自分で選んでね。今日のメニューは、かつ丼定食と、サバの味噌煮定食の一いつだよ。」

そう僕が言つが早いが。

七人は、早速定食を取りに行つた。

てこゝか、夜一さん…。こゝで瞬歩使わないでください！

あとで注意しとかないと…。

こゝで、あの七人は戻ってきた。

いへりなんでも早すぎなんじや…。

みんなの定食は…。

黒崎君　かつ丼。夏梨君　かつ丼。遊子君　サバの味噌煮。

朽木君　サバの味噌煮。井上君　かつ丼。たつき君　かつ丼。夜一さん　サバの味噌に。

なんかみんな予想通り。

夜一さんは、猫だから魚にしたのか？

「サンキュー。吉良わふ。」

黒崎君が、代表としてお礼を言った。

「いやいや。それじゃ、僕はこれで。」

「おひ。ありがとうな、ほんと。恋次とは大違いだな。」

「アハハ…。それじゃ。」

「おひ。」

黒崎君。何気こううの隊長を侮辱してゐるような気が…。

そう想いながら、僕は食堂から出て行つた。

*

*

*

僕は執務室に戻つていつも通り仕事をした。

隊長の阿散井君も仕事をしている。

嵐のような七人は今食堂にいるので執務室はとっても静かだ。

「静かだね。阿散井君。」

「そうだな。」

僕はつぶやいた。

阿散井君は書類を見直しながら言った。

昨日、日番谷隊長にもらったものだ。

「よし。できた。」

阿散井君が言った。

どいつもから書類はできたよ'つだ。

「おい、吉良。」の書類。一番隊だよな。」

「うん。 そうだよ。」

「よし。ちょっと新人呼んでくる。」

そう言い、阿散井君は出ていった。

しばらくして、一人の死神を連れてきた。

茶色い髪の毛。細身の体。

名前は確か、かんぱるあすか 柏春梓沙

彼女は、細身の割に戦闘においては、新人の中でも抜けている。

新人、20人の中でもう一つ始解を会得している。

彼女はさすがに隊長相手なのでわたわたしていた。

「これ、6番隊に届けてくれ。」

「はい。」

「じゅ。」

会話 短い！

そんなことを思つてゐる僕をよそに、柑春君は書類を届けに6番隊に行つた。

「じゅ、じゅ。俺はこの書類を一番隊に届けてくるわ。」

ガラ

ドアを閉める音が聞こえた。

そのあとに阿散井君のぎょっとした声が聞こえた。

ガラ

ドアが開く音がした。

阿散井君はもう帰ってきたのか？

僕はそう思って書類から顔を上げた。

えつ。

黒崎君…。

そういえばいたんだっけ。

「おひす。吉良さん。ところで質問なんだけど…。」

この一言から、黒崎君たちのおしゃべりが始まった。

これからは、鍵かっこに隣に誰が言ったのかを乗せてもらひ。

「トイレビ」だっけ？」 黒崎君

「馬鹿。トイレははすゞでしょ。昨日教えてもらひたのにもう忘れたの？」 たつき君

「ああ。忘れた。」 黒崎君

「わあ。驚いた。」 たつき君

「一兄、トイレに行きたいんじゃないの？」 夏梨君

「あ、そうだった。」 黒崎君

「早く行つてこんか。」 枯木君

ガラ

扉を開ける音がして

ガラ

扉を閉める音がした。

「にしても。一護つてホント忘れっぽいよね。」たつき君

「うんうん。一兄はあたしたちが生きてた時からそうだったよ。ねえ、遊子。」夏梨君

「ほんとほんと。」れ買つてきて、って言つたら絶対忘れてくるもん。まあちゃんと買つてきたときもあつたけどね。」遊子君

「ふーん。あとさ、一護つて人の名前とか覚えるの苦手だよね。」たつき君

「あつそつそつ。石田君の名前とか全然覚えてなかつたよ。」井上君

「そつなのかな。それは知らなかつた。」朽木君

「そつなんだよ朽木さん。あれ、黒崎君、朽木さんの名前はすぐ覚えたのかな?」井上君

「私の名前はすぐに覚えたな。名前だけな。」朽木君

「名前だけってどういう意味?ルキ姉。」夏梨君

「尸魂界とか死神とか虚とかはまったく覚えていなかつた。」

朽

木君

「そりなんだ。」 夏梨君

このおしゃべりいつまで続くんだろう。

僕は、そう思いながら書類を書いていた。

約束の日まで残り五日。

恋次の地獄？　？　吉良の巻（後書き）

今回は、吉良田線で書いてみました。

どうでしたか？

苦臭つてどんな感じかわからぬいんにキャラが崩壊してゐる感がします。（汗）

柑春梓沙は、オリキャラです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。などなどお待ちしています。

恋次の地獄？　？　三番隊ヒカル

：貴様の問題だ　深い　深い問題だ　私はそれを訊く術を持たぬ。

貴様の心に　泥をつけず　その深きにまで踏み込んで

それを訊く上手い術を私は持たぬ。

だから待つ。

いつか貴様が話したくなつた時　話してもいいと思った時に…

話してくれ

それまで待つよ

私は

by ルキア

グランドフィッシャー編より

俺たちが三番隊舎に来てからもつ、三日立つた。

＝（イコール）約束の日まあと一日。

最初の一曰は、初日見たく大騒ぎだつたけど三番隊の隊舎にも慣れて、なんなく

「そろそろここ出ようかな。」

とか思つていたルキアが

「靈術院に向けて勉強したりひつだ。」

と言われたので俺たちは一昨日から真央靈術院に向かつて三番隊舎で、勉強を始めた。

「おい、ルキア　これどういづ意味だ？」

俺は聞いた。

「どういづってそのままの意味だ。」

「これ俺たちがここに来た時のものだよな。なんか事実と違くねえか？」

「何が違うのだ。」

「うーん。」

「ういい、俺は文章に指を立てた。

「えーと。『藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の三人は罪人朽木ルキ

アの体内にあつた「崩玉」を手にし「虚圈」^{ウハコムソド}へ逃走。その後、朽木ルキアの罪は解かれその際、侵入した旅禍^{リョウカ}

「黒崎一護」を、死神代行として認めた。『…。どこが間違つておるのだ。』

「違う違う。井上^{カワガムハナ}が虚圈^{ウハコムソド}に連れ去られたとき。」

「はあ？『朽木ルキア救出の際、黒崎一護死神代行とともに侵入した旅禍、井上織姫^{アランカル}が藍染の手先「破面」^{ハラフマツヅ}とともに「虚圈」^{ウハコムソド}に。』…。どこが間違つてるか？」

「いじことだつたか？」

「井上に聞けばよかぬ。」

「わっしきからじやうじにしてただけど。井上はどうしてるんだ？」

「ああな。」

「まあ、いいや。で、なんで俺は歴史の勉強をしてるんだ。」

「お前の『魂界の知識があまりにえじいからだ。』

「それは、俺だけじゃねえだらう。」

「まあな。だが、井上も歴史の勉強をして、たつき、遊子、夏梨は靈圧上昇・解放の訓練をしてるのだ。」

「…。俺は鬼道の練習をすればいいんじゃねえか？」

「よく気付いたな。これから鬼道の練習をするのだ。」

「はあ？ 今から…？」

「今からだ。その藍染の戦い以降、魂界には、大きな事件はなかつたからな。」

「そうか。」

「では、外に出る。」

*

*

*

「おい、吉良。なんか庭が騒がしくねえか。」

「そうだね。なんか、物が壊れている音が聞こえるような。」

「ちょっと見てくるわ。」

「行ってらっしゃい。」

*

*

*

*

「「ひだ一護。破道の一衝。」

そういう、ルキアは指先を木に向けて言った。

その後、指先から、弱い光線が出た。

「さつき詠唱は教えただろ？。」

「そうだけどよ。」

「ならばやらないか。」

ルキアにそういわれ、俺はさつき教わった詠唱を唱え言つた。

「破道の一 衝！」

結果は失敗。

弱い光線どころか、何も出なかつた。

「何故出来ぬのだお前は！」

「そんなこと俺に言われてしらねーよ！」

「もう一度言つてみるー恋次でさえできたのだぞー！」

「嘘だーあの恋次にできるわけねーだろー！」

「それが出来ちゃうんだなー。これが。」

俺とルキアが言い争つてるとき、突然後ろで声がした。

声の主は… 恋次だ。

「わっ！脅かすなよ恋次！」

「別に脅かしてなんかいないぜ。それより一護。お前破道の一もできねえのか！」

「で、できるやー今からやつてやるから、黙つてみてひ。あつそつだ、ルキア。」

「なんだ。」

「詠唱破棄でもいいか？」

「できるならな。」

「よし。じゃ。すう。」

俺は呼吸を整えた。

詠唱破棄にしたのは、そつちのまつが出来そつだと思つたからだ。

つまり勘。

「破道の一 衝！」

俺は言った。

そしたら、ルキアの光線よりもはるかにでかい光線が指先から出た。

「どうだ、恋次。ルキア。」

「…。いや、まさか詠唱破棄で、できるとわな。」

俺は、恋次に聞いたのになぜかルキアが先に答えた。

「まったくだぜ。しかもルキアよりでかいな。」

「…。」

ルキアは無表情だ。

内心は、すんごい悔しんだるうな。

俺は思った。

「しゃあつーー！」

俺は、歓喜の声を上げた。

この調子で、破道は詠唱破棄で三十一番台までいった。

「よし、次は赤火砲だ。」

「どうやるんだ？」

俺は聞いた。

「撃つ対象物に向かい、唱えるのだ。波道の三十一

赤火砲！」

ルキアはそう言い、木に向かつて火魂を打った。

「「」からは、恋次も練習だ。」

「なんでだ！」

俺は驚いた声を上げた。

「あれから、五十年もたつてゐに出来ぬからだ。」

ルキアが淡々と答えた。

「あれから五十年もたつて、しかも隊長なのにできねーのか。」

俺は言った。

「う、うるせー！悪かつたなできなくて。」

「どうあえず、やつてみる。まずは、恋次から。お前は詠唱ありで。」

「

「おつー！君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一赤火砲！」

そう言い、恋次の手からよくわからない赤い物体が出てきた。

「失敗だな。」

ルキアが言った。

「う、うるせー！」

「じゃあ、次一護。」

ルキアは、赤火砲を連續して撃つてゐる恋次をよそに俺に向つた。

「おひ。波道の三十一 赤火砲！」

俺の手のひらから、ルキアよりでかい赤い火魂が出てきた。

「俺は成功だ！がんばれ恋次。そりゃあお前隊長の仕事はいいのか？」

「あ ! ! ! ! 忘れてた！」

「おい、忘れんなよ…。」

俺は、叫んでる恋次を呆れ顔で見た。

「じゃ、俺は戻る！…！」

「おひ。じゃあ、ルキア続々。」

「うむ。」

「お い、 いちに い！」

「おにしちや ん！」

「一護 ！」

「黒崎く

ん！」

急に、声が聞こえた。

そこに、遊子、夏梨。たつき、井上が現れた。

「何やつてるの兄ちゃん？」

「鬼道の練習だぜ。遊子。」

「ふ ん。」

夏梨が答えた。

「お前らも練習すつか？」

「「うん……。」

遊子と夏梨が同時に言った。

「お前らは？」

「えつ。私?..」

「ああ、そうだ。」

「やつていいのかな?たつきちゃん。」

「良いんじゃないの?」

「じゃあ、私たちもやるー。」

「良いよナルキア。」

俺は一応ルキアに確認を取つた。

なんだか、全部おれが決めてるみたいだと思つたからだ。

「ああ、もちろん。」

ルキアは答えた。

「サンキュウ。」

俺は答えた。

そうしてみんなで、鬼道の練習を始めた。

井上は、うまくできた。

予想通り。

意外と遊子、夏梨、たつきも鬼道がうまく出来ていた。

そして今日は、みんな破道、五十番台までやり一日が終わった。

そして次の日も、鬼道の練習、勉強。

そして、約束の日がやってきた。

恋次の地獄？　？　三番隧ヒヤウツナリ（後書き）

“えり”でしたか？

ついに次回から、真央靈術院篇に突入です。

この話“えり”したら終わるんだろ？…。

いや、ちゃんとあらすじつてこいつがどうこいつに話を持つてこきたいかは決めてるんです。

なんか長引きたれますが…。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。などなどお待ちしています。

立場の整理（オリキャラ多數）（前書き）

すいません。

次回から新章とか言つましたが、その前に、皆の立場の整理をします。

オリキャラ多數です。

本編には、いつか出でくると思います。

立場の整理（オリキャラ多数）

一番隊

総隊長 山本 元柳斎

副隊長 雀部 長次郎

二番隊

隊長 碎蜂

副隊長 大前田 希千代

三番隊

隊長 阿散井 恋次

副隊長 吉良 イズル

新人

柑春 梓沙

四番隊

隊長 卵ノ花 烈

副隊長 虎徹 勇音

第三席

伊江村 八千和

第四席

山田 花太郎

五番隊

隊長 新洋芽衣

副隊長 雛森 桃

六番隊

隊長 朽木 白哉

副隊長 神谷 紗衣

七番隊

隊長 狩村 左陣

副隊長 射場 鉄左衛門

八番隊

隊長 京樂 春水

副隊長 伊勢 七緒

九番隊

隊長 檜佐木 修兵

副隊長 子日並 こひなみ 大樹 だいき

十番隊

隊長 日番谷 冬獅郎

副隊長 松本 亂菊

十一番隊

隊長 更木 剣八

副隊長 草鹿 やちる

第三席

班目 一角

第五席

綾瀬川 弓親

十一番隊

隊長 涩 マユリ

副隊長 涩 ネム

十三番隊

隊長 浮竹 十四郎

副隊長 枇木 ルキア

第三席

小椿 仙太郎

虎徹 清音

三番隊

柑春 梓沙

五番隊

新洋 芽衣

六番隊

神谷
かんだに
羚
れい

九番隊

子日並
こひなみ
大樹
だいき

は、オリキャラです。

立場の整理（オリキャラ多數）（後書き）

これが、今の『護廷十三隊』です。

今回は、本編と関係ないので次話はできれば、今日中に更新したい
と思います。

真央靈術院に向かい（前書き）

遂に新章突入です。
真央靈術院編です。

では、楽しんでください！

真央靈術院に向かい

兄貴つてのが、どうして一番最初に生まれてくるか知ってるか……？

後から生まれてくる、弟や妹を守るためだ……！

兄貴が妹に向かつて、殺してやる、なんて……

死んでもいいんだよ……！

b y - 護 井上の兄貴が虚になつた時より

あの日から、一週間たつた。

俺を含めて、遊子、夏梨、井上、たつき、ルキアは今日の朝に二番隊舎を出た。

そして直ぐに一番隊舎についた。

しばらく待つと、チャド、啓吾、水色がきた。

今まで九番隊にいたようだ。

そして、10分くらい待つと総隊長とともに石田が出てきた。

「お前がうつして、そこから出てきたんだよ。」

俺は驚いて聞いた。

「君たちより早く着すぎたせいで僕は一番隊にいたんだ。」

「そ、そうか。なんかわりいな。」

そして全員そろつた。

「これから、おぬしたちは『真央靈術院』の生徒じや。死神、尸魂界などの勉強に励むこと。」

総隊長が口を開いた。

「…………はいー(ム。)…………」

俺たちは返事をした。

「では、朽木副隊長。真央靈術院への案内。頼んだぞ。」

「はい。」

「では、散!」

総隊長がそう言い、ルキアが瞬歩した。

俺たちは、ルキアに瞬歩でついて行つた。

真央靈術院に向かい（後書き）

短いです！

本当にすいません！

次話はすぐに投稿します！

明日は休みなので、いっぱい更新するかもです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

寮（前書き）

今回は、長く書きます！！

では、第18話スタート！

同じなんだよ　死んだやつも　残されたやつも

どっちも同じだけ淋しいんだ…！

b a - 護　井上の兄貴が虚になつた時より

「よつヒ。」

あたしたちは、ついに靈術院についた。

やつと、皆を護れる力が手に入る。

一兄も。

遊子も。

そして、この世のすべての人を護れる力が…。

あたしは期待に満ちた眼で、学校を見た。

絶対に、死神になつてやる。

あたしは心中で誓つた。

「朽木ルキアだ。」

ルキ姉が、扉に向かっていった。

よくよく考えると、あたしたちの編入って時期がずれてるんだよね。

確か今日は、2062年の七月の初め。

ちゃんとした、日付も分からなくなってきた。

ま、いいや。

そんなことを考えていると、扉があきルキ姉が言った。

「お前たちの編入は、かなり特別だ。これからお前たちがこれから寝起きする寮、そしてお前たちがこれから通う学校、クラスについて説明する。貴様らが通うのは明後日からだ。明日は、制服や学校の校則などを説明する。分かったか？」

「おひー。」

一兄が答えた。

「よし。とつあえずついてこい。最初は寮からだ。」

そしてあたしたちは、靈術院へ足を踏み入れた。

*

*

*

*

「……だ。」

ルキ姉が急に止まつた。

「これが……。」

あたしはつぶやいた。

此処が、これからあたしたちが住む寮か……。

見た目は、焦げ茶色の細長い隊舎。

寮は一つあって、一つ一つの寮の間は200メートルぐらい離れていて靈術院までの距離は約1キロメートル。瞬歩、3~4回ぐらいでつくかな?

一兄だつたら、2回も有るか、無いか。

これで、寮の見た目の説明は終わり。

ルキ姉が話しだした。

「ここは、見ての通り寮だ。右が女子寮、左が男子寮だ。そして、寮にもその寮の花、つまり、『寮花』がある。これは、必ず覚えておけ。」

「分かつた。」

あたしが答えた。

「女子寮は、ラベンダー。花言葉は許しあう心。男子寮は、スノーフレーク。花言葉は、純潔、けがれ無き心だ。覚えたか？」

「ちょい待てルキア。それって覚えなきやいけないのか？」

一兄が聞いた。

「せつめいしただらう。」

「そうだな、大丈夫だと思ひセ。多分…。」

おこおい一兄。このぐらこちやんと覚えりよ。

これから覚えなきやいけな」「となんていろこりあるのこ。

「そしてまず女子寮から、紹介する。ちなみに女子寮には女子のみ。男子寮には男子しか入れない」となつてゐる。勝手に入つたら、…。いや、この先は言わないのでおこい。

「…………ちよつと待つた……。」「…………」

あたし、一兄、遊子、たつき姉、織姫ちゃん、啓吾、石田が突つ込んだ。

「なんだよ、ルキア。そこで切るなよー先が気になるじゃねえかー。」

「いや、これは絶対に明日分かる。その位我慢しや。」

いやいや、我慢しないでルキ姉。一兄はそんなの無理だつて知ってるでしょ。

「今教えろよー!」

ほら来た。一兄の反逆。そういうのが子供なんだよ。

「断る。今教えたつてお前に理解できまい。」

ルキ姉。…。そんなにすこお仕置きなんか?

「そんなにすこい罰なのか?」

わつ。一兄があたしと同じく罰つくる。

「やつだ。」

ルキ姉無表情。ほんとかどうかわかんないじやん。

「 もういい。」

一兄はあきらめたみたい。

「どうあえず、女子寮だ。遊子、夏梨、井上、たつき。つこてこ。

」

そう言へ、あたしたちはこれから住む女子寮に向かった。

* * *

寮の中は、案外綺麗だった。

一部屋、4人で2段ベッドが2つある。

あたしたちの部屋は、玄関から最初の角を左、その次の角を右に曲がったところにあった。

部屋には、それぞれ名前がありあたしたちが住む部屋は「桔梗の間」。

ルキ姉から聞いたんだけど、桔梗^{ききょう}は、「気品」っていう意味があるらしい。

遊子とか織姫^{おりひめ}ならわかるけど、あたしと、たつきちゃんは気品のかけらなんてこれっぽっちもないと思んだけど……。

あつ、たつきちゃんに失礼か……。

それで、食堂はあたしたちの部屋から廊下を出て左に曲がりそのまま、まっすぐ進んだところ。

食堂の中は、まるでどいかのカフHのような匂いを漂わしていくながら、なんとなく和風な感じもする。

あたしの口では言えないような感じだ。

取りあえず一言でこいつ、ひとつもおしゃれだ。

そしてお風呂は、部屋に一つとあたしたちの部屋から左に曲がり食堂を通り過ぎ次の角を左のところにある。

銭湯並みの広さ、でもお風呂の「トザインはなんとなく古」。

江戸時代の五右衛門風呂みたいだ。

「。」のぐらいで、女子寮の説明は終わった。

あたしたちは、外に出た。

そこには、一兄たちが待っていた。

隣には、なぜか恋次がいた。

「おう、ルキア。そつちは終わつたか?」

「つむ。後は頼んだぞ恋次。」

パチン

ふたりは、ハイタッチをした。

そういうば、女子寮には女子しか、男子寮には男子しかいれなかつたんだつけ。

そして、一兄たちは、男子寮に入つていつた。

*

*

*

*

一兄たちが出てきた。

あたしは一兄に男子寮はどんなかを聞いた。

「ああ、そうだな。まず俺たちの部屋が玄関を上がって最初の角を右そして次の角を左に曲がったところにある。で、部屋には一つ一つ名前がついてあって俺たちの部屋の名前は『朝顔の間』。確か、花言葉は……。あー、そうだ。花言葉は、固い約束か、結束みたいだ。んで、食堂があつて、俺たちの部屋を出て突き当たりを右、で、玄関と反対方向にまつすぐ進んで次の角を左に曲がったとこにある。で、食堂はカフェみたいな感じだ。で、最後に風呂。部屋に一つと、食堂を出てというか、玄関からまつすぐ進んで突き当たりを左に曲がつたとこにあって広さは銭湯で見た日は五右衛門風呂か。まあ、そんなどこだな男子寮は。そつちはどうだつたんだ?」

あたしが一兄に聞いてるのに逆に聞かれた。

「ン。女子寮もそんな感じ。一応いうけどあたしたちの部屋の名前は『桔梗の間』。花言葉は気品だつてさ。あたしからす『』いかけ離れてると思わない?」

「そうだな。お彼らの部屋は一部屋何人だ?」

「んと、よ「4人だよ、お兄ちゃん!――!」

突然遊子が割り込んできた。

遊子のことだから、さつきから一兄と話してゐたしを見つけて自

分も話したいとか思つたんだろうな。

遊子はまだまだお兄ちゃんっ子か。

「そりゃ。俺たちは一部屋五人だ。」

「ふーん。」

「お兄ちゃん！お兄ちゃんはどうだったの？」

遊子が一兄に聞いた。

一兄はせつをあたしにした説明と同じ」とを言つた。

一兄も大変だねー。

あたしはそつ思いながら、今度は靈術院の本校舎に足を踏み入れた。

寮（後書き）

どうでしたか？

夏梨田線で書きました。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといったリクエスト。
などなどお待ちしています。

クラス（前書き）

クラス発表です。

19話スタート！

クラス

「うして生まれてきたんだよ！」

自由に生きて　自由に死ぬ権利ぐらいあるハズじゃねえかー！」

虫だらーが　人間だらーが…

オレたちだつて…　同じだ…

だからオレは殺さねえ…

何も…　殺さえんだ…！

by・コン 改造魂魄編より

「よし、これからお前たちが明後日から通う学校を案内する。」

「とつ。その前にお前らのクラスを発表する。」

「まず、一護、石田、井上、チャド。」

「お前らは、六年生に編入だ。クラスは、六年一組に、一護と井上。一組に、石田、チャドだ。」

「次に、遊子、夏梨、たつき、啓吾、水色。」

「遊子・夏梨・たつき・啓吾・水色は四年に編入だ。クラスは、遊子・夏梨・たつきが一組。」

「啓吾・水色は一組だ。」

「分かつたか？」

ルキアと恋次が交互に言った。

俺は、井上と同じクラスか。

といつかいきなり六年か。

「因みに言つと一組が、特進クラスだ。」

「ちょっと待つた。それじゃあ、僕は黒崎より先つてゐるといつのか！」

「…。そういうことになるな。」

ルキアは、石田に淡々と答えた。

俺が石田より上なんてなかなかいい気分だ。

「何故だ！黒崎は靈圧コントロールが下手だろー。」

「一護は、鬼道ができるようになつたぞ。」

「はあ！？あの黒崎に鬼道ができるー。？」

「おこ、あのひじりのひつ意味だ、石田一。」

「お前は、鬼道が出来なかつたはずだと云つてゐるんだ。」

「俺は言つとくが、鬼道が使えるよつになつただ一。見せてやるつか
なつよ。」

「やつだよ、一兄。」

「やめてよ、お兄ちやん。」

「黒崎君の鬼道は朽木さとよつす」かへり、やめてよ。」

「せつだ一護。お前が本氣を出したらこへら私でも止められん！…」

俺が、石田に向かつて鬼道を使おつとしたら、たつき・夏梨・遊子・
井上・ルキアの順で止めてきた。

石田は、意味がよくわかつてないよつだ。

俺がルキアよつすじいができる。

「こや、止めるな。黒崎。そんなこすじになら見せてくれ。」

「こや、止めるな。黒崎。そんなこすじになら見せてくれ。」

「良いぜー。」

石田なんだよ。開き直つたのか？

俺は、石田に向かつて何をしようか考えた。

「おい、石田。何をやってほしい？」

「そんなこと聞くのか…。そうだな…。じゃあ、朽木さんがよく使つてる、赤火砲とか、蒼火墜とかか。」

「分かった。」

「どうにじょうかな。」

じゃあ、蒼火墜で。

「行くぜ石田！破道の三十三 蒼火墜！」

そう言い、俺の手のひらからはバスケットボール並みの大きな蒼い爆火が出た。

「わあー。」

「どうだー。」

石田はさつ言い、飛廉脚で俺の隣に移動した。

俺は、石田に言った。

「まさか……。」

なんだよ、こいつ。人を褒めるってことを知らないのか？

まあこいつに褒められてもあんまし嬉くねえが。

「もつといいか？」

恋次が聞いた。

「ああ。」

俺が答えた。

「それじゃあ、これから校舎を案内する。皆しつかりつっこひこよ
！」

恋次がそう言い校舎に入つていった。

俺たちは後について行つた。

* * *

「ここは、四年の校舎だ。遊子・夏梨・たつき・啓吾・水色はよく
覚えておけ。」

ルキアが言った。

「このクラスが一組。隣が二組だ。一組の責任者は、」

「責任者って何?」

遊子が聞いた。

「責任者とは、そのクラスの先生のことだ。課題によって担任は変わるのがおもに授業をするのが責任者といつ。」

「ふーん。」

「で、その責任者って誰?」

夏梨が聞いた。

「このクラスの責任者は、淫大任海いんだいとうみだ。明後日会つだらう。聞きたいことはその時、詳しく聞け。」

ルキアは質問しようと口を開き始めたたつきを遮った。

「次に二組だ。この責任者は梨路なしじろ紅衣くいだ。分かったか?」

「うん。」「

啓吾と水色が答えた。

「次は、六年生だ。」

ルキアはそう言い、階段を上つて行つた。

*

*

*

*

「リリが、六年生がいる校舎だ。」

「ふーん。」

案外普通なんだな。

俺はそう思いながらルキアの後をついて行った。

ドン

俺は誰かにぶつかった。

「つーこつこーな！」

そう言い、前を見た。

俺とぶつかったのは、全体的に小柄な男だった。

此処にこるってことは、六年生か？

「いた
！あ、す、すいません！」

「良いって。前を見てなかつた俺にも非はあるし。」

「いや、すいません！」

「だからいこつて。」

俺はあきれながら言った。

「あ、あの。」

「なんだ？」

急に、小柄な奴が声をかけてきた。

「さつき、学校の前でとてつもない蒼火墜を撃つてた人ですよね。」

こいつは、遠慮がちに聞いてきた。

学校の前でつてことは石田に向かつて撃つたやつだな。

「ああ。そうだぜ。」

俺は答えた。

「やつぱり！あの、僕、津ノ井 遼といいます。あなたは？」

「ん。俺か。俺は、黒崎一護だ。宜しくな。」

ピキン

時間が固まつたような音がした。

どうやら、ほかの六年生も教室の窓から俺たちのことを見ているみたいだ。

遼も、その六年生もみんな固まつた。

「…。嘘うそしたんだ？」

「言つただろ？！」ではお前たちは有名人だと。

「…………。やういえば。

「ええええええええ

「…………」

遼は、鼓膜が破れるほどの声を出した。

「あ、君。いや、黒崎さん。あなたは、あの黒崎さん？」

「あ、ああ。やう、だけど。」

あのつて言われてもわかんないけど、ルキアを見たらとつあえずそ
ういつとけみたいな視線が返ってきたのでそいつた。

「…………。」

遼は、口をパクパクさせていた。

酸素を吸おうとしているのか。

それとも、驚きすぎて声が出ないのか。

その時窓から見ていた、六年生がつぶやいた。

「本物だ…。オレンジ色の髪。身の丈ほどの斬魄刀。そして何より、

後ろにいる死神のメンツ。三番隊隊長、阿散井恋次。当時は、六番隊副隊長。そして、十三番隊副隊長朽木ルキア。黒崎一護に、死神の力を明け渡した張本人。当時は十三番隊の席官にもなっていない。

「

そいつは、教科書をぺらぺらめぐりながら言った。

「本物…」

遼がつぶやいた。

「えっと、い、いろいろ聞きたいんですけど…。」

「良いけど。」

俺は、六年生の一人に聞かれ、答えた。

その瞬間、此処にいる皆がいつきに俺に質問した。

「本当に、あの藍染を倒したんですか！」

「一度、死神の力を失ったというのは本当ですか？」

「なんでここにいるんですか？」

「何歳なんですか？」

「斬魄刀は斬月というんですか？」

「あなたのお父さんが死神だというのは本当ですか？」

「朽木副隊長・阿散井隊長は黒崎一護と同じく、何の関係ですか？」

「セレーナのは、妹さんですか？」

「アーニーの、井上さんと茶渡さんと滅却師の石田さんですか？」

俺は耳を抑えた。すいせい声だ。

まさか質問の矛先が遊子たちや、石田達に向へとは思わなかつた。

「すう
！　！　！」
。スト
ツプ！　！

恋次が叫んだ。

そりゃそうだろ？

俺は思つた。

「質問は、順番にだ。」

おいおい、お前。

何言つてゐるんだ。

とこつか、俺たちのクラス紹介は既ひつたんだよ。

俺は思つた。

クラス（後書き）

何か微妙ですね。

今日は、一護目線です。

やつと、遊子たちの教室が紹介です。

クラスメイト等は、もう少し先になりそうです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといフリクエスト。
などなどお待ちしています。

クラス　？（前書き）

今回は、六年生です。

第20話スタート！

クラス？

そうだ、いりしねえかチャード。

オマエは今まで通り自分の為に誰かを殴つたりしなくていい。

そのがわり、俺のために殴つてくれ。

俺はオマエのために殴つてやる。

オマエが命をかけて護りたいモンなら、俺も命をかけて護つてやる。

b y - 護 チャドとの約束

「あの藍染を倒したって本当ですか？」

「本当だ。次！」

「一度死神の力を失つたといつのは本当ですか？」

「本当だ。次！」

「なんで」「ここのんですか？」

「明後日から俺たちはここに通つからだ。次！」

「何歳なんですか？」

「それは俺が死んだときのを聞いてるのか？それとも今の年齢を聞いてるのか？」

「どうちもです。」

「俺が死んだときの年齢は……確か24～5歳か。今は……70ぐらいか？」

「いや、私に聞かれても……。」

「まあいい。次！」

「斬魄刀は斬月というんですか？」

「そうだ。次！」

「あなたのお父さんが死神といつのは本当ですか？」

「そうだ。次！」

「あなたは、朽木副隊長・阿散井隊長などいろいろ関係ですか？」

「仲間だ。次！」

「そこにいるのは、妹さんですか？」

「そうだ。次！」

「ナリ」こののは、井上さんと茶渡さんと滅却師の石田さんですか
？」

「やつだ。次！」

「…。一兄。今まで最後。」

あたしは、やつから質問攻めにあつて、一兄に當った。

「ほんとか、夏梨。」

「うふ。」

「は
あ。」

一兄は疲れ切つた声を出した。

「なんで恋次あんな」と言つてんだよ。質問攻めにあつのは俺じゃ
ねえか。」

「まさかあんなことになるとば、思わなかつたんだよ。わつーな。」

「わつー。」

「ねえ、朽木さん。私たちの教室はどいつ。」

織姫ちゃんが周つをあくわく見ながら囁つた。

「ナリだ。」

ルキ姉が指を指した。

そこ教室は、遼がいる教室だった。

てつ、遼。何気に特進クラスだったのか。

一兄も驚いた顔をした。

「マジか。」

一兄がつぶやいた。

*

*

*

*

「此処が明後日からお前らが通う教室だ。」

ルキ姉が言った。

ルキ姉は堂々と入つていったが一兄たちは入り口で止まってる。

まあ、さつきあんな目にあつたからしょうがない氣がするけど。

というか、ルキ姉。周り見てみなよ。

なんか皆ひそひそ話してゐるよ。

内容は多分、

明後日から一兄たちがこの学校にしかもこの教室に来る事だね。

皆、一兄が死霸装を着てあたしたちが普通の流魂街の服を着てることに気が付いてんのかな？

そんなこと関係ないけどさ。

「で、このクラスの責任者は伊士日凪いしふちひなぎだ。覚えたか、一護。」

「ああ。多分…。」

一兄の答えがあつたことだと思つのはあたしだけかな。

一兄は、遠慮がちに教室に入つていった。

「遼、お前のクラスだったのか。」

「うふ。じゃなくて、はい。そうです。」

「なんでお前敬語なんだ？」

「いや、有名人ですから…。」

「敬語なんて使うなよ。これからはクラスメイトだからな。」

「そり、かな。」

「そりだ。宜しくな遼。」

「いい、宜しく。黒崎さん。」

「一護でここよ一護で。」

「じゃ、じゃあ一護。」

「せうせう。」

「一ツ質問していい?」

「なんだ?」

「なんで一護は、死神の姿なのにここに来てるの?」

「俺は、此処に鬼道と、歴史だけ留いに来たんだ。それ以外は。
だからな。」

「ふーん。そうなんだ。」

なんか、始まっちゃったよ。一兄の血口紹介。

そんなの明後日やれって。

その時、ルキ姉が一兄に声をかけた。

「おい、一護。次行くぞ。」

「おひ。じゃな、遼。また明後日。」

「うん。じゃあね。一護。」

「兄はそう言こ、」
「うちにも来た。」

そして、ルキ姉が一組のことを話し出した。

「一組の隣が一組だ。一組の責任者は、久仁丘杏だ。分かつたか？」

「ああ。」

「ム。」

石田とチャド兄が言った。

ああ。やつと、責任者の説明、終わつたよ。

なんか長く感じた。

なんか他に、説明つてあつたかな？

「次は、真央靈術院についてだ。」

まだあんのか。

「はーあ。」

あたしは、だれにも聞こえない程度の大きさで溜息をついた。

「これが最後だ。そう溜息をつくな夏梨。」

ありや。ルキ姉に聞こえたみたい。

今の言葉は、あたしの耳元で言ってくれたから一兄たちには聞こえなかつたはず。

これで最後！

あたしはそう思いながら、あたしに一言声をかけていつの間にか前を歩いているルキ姉にあたしたちはついて行つた。

クラス　？（後書き）

短いですね…。

今日は、夏梨目線です。

は　あ。早くみんなを靈術院に通わせたいです。

まだまだか。

それとももう少しか。

後者ですかね。

番外編のほうもよろしくです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。
などなどお待ちしています。

「残念なことに 受けた恩を忘れて ヘラヘラしてられるほどクズで
もねえんだよ！」

by 一護 第2話より

「『JJK』、『真央靈術院』は、二千年以上の歴史を持ち、未来の鬼道衆・隠密機動・護廷十三隊を作る若者を育成するための学院。課程は6年。飛び級や、院を経由せずに十三隊への入隊もある。かつては死神統学院と呼ばれ、死神のみを育成する機関だったが、組織の巨大化に伴い現在の呼称になっている。学級によってランク分けがあり、試験に於いて最も優秀な成績を認められた者達が集められた「特進学級」もある。」

一護たちは、寮でゆうつう男女が共に過ぐせる『共室』にいた。

そこにつくや否や、ルキアは『JJK真央靈術院について説明を始めた。

もううんみんなの頭では、ルキアの言っていることが理解できず……。

ルキアに質問ばかりをしてくる。

その中にはなぜか隊長の恋次もいた。

オマエなんで隊長のくせに此処にいるんだよ。

仕事は止めた。仕事は。

などなど。私は心の中で思っていた。

「何か質問はあるか?」

「はーい。結局のところ俺たちは、靈術院で勉強をすればいいってことだろ。」

一護が聞いた。

「まあ、やつこいつ」とくなる。確かに質問は?

「あります ん。」

代表してたつきが答えた。

周りのみんなはもう疲れ果てている。

遊子なんて半分寝てこるようなものだ。

「そうか。じゃあ、今日はこれで終わります。今日まではこう疲れたからな。」

ほんとだぜ。

一護がやつこいつをやった。

「それじゃあ、各自寮に戻りよくなれ」と。明日は校則やら規則やら

「頭に叩き込まなきゃいけないものがたくさんある。みな、よく寝ておくよ。それでは、散。」

そう締めくくり、ルキアは十二番隊舎に瞬歩で戻つていった。

恋次も、瞬歩で二番隊へ。

一護たちはみんな思つた。

「此處で瞬歩使っていいのかよ！」

ルキアたちが使つていたんだからおれたちも使っていいはず。

そつ思いみんなは瞬歩で自分の部屋に戻つた。

*

*

*

「は 。 疲れた。」

たつきが言った。

「ほんとだよね～。たつきちゃん。まさか朽木さんがこんな時間まで講習会をやるなんてね。」

「ほんとだよ。でも内容は難しいからあんまし入つてないんだけどね。」

べえ

夏梨はひゅうひゅう息を出しながら叫んだ。

「咲遊子。起きて。」

夏梨は、半分寝ている遊子を起こした。

夏梨は遊子をおぶつて瞬歩して、「桔梗の間」まで連れてきたのだ。

「ん…う ん。あれ、夏梨ちゃんおはよー。今何時?」

「今は、十一時一十六分。真夜中のね。」

「真夜中の…。」

遊子は一息にすべてを想い出したようだ。

「あ……かへ、講習会終わっちゃった?」

「うん。」

「疲れたね~。早く寝よ!」

遊子が言った。

あんた今まで眠つてたでしょ。

夏梨は思つた。

「だから今から寝るの。でも、あたしはシャワーを浴びるナビな。」

「えつ。エリカハシヤワーあるの。」

「なかつたでしょ。遊子。あたしはお湯を浴びるつていつたの。」

ポン ポン

なぜか、わかつた時に出る音が一回聞こえた。

どうやら織姫ちゃんも遊子と回じーと帰えていたようだ。

この一人は、気品じやなくて天然か。

夏梨はそつ思につつ部屋につっこむお風呂に向かった。

*

*

*

「今日は、疲れたぜ。」

一護がバタンと布団の上に倒れた。

「ほんとだね。一護。まさか朽木さんが。」

「あんな熱心だとは思もわなかつた…か。」

「あたり。」

一護は、水色の言葉を引き継いだ。

「もう俺は寝る！お休み。」

「お休み一護。」

「お休み。俺ももう寝るわ。」

୪

一 僕は風呂に入る

そう言い、石田は風呂に向かった。

「なんだよあいつ。これからあいつと同じ部屋で一年間過ごすなんて嫌だな。」

— 譲の「」の一言でみんなの今の心中を語つた。

六

六

*

*

次の日

「起きたー！」

ルキアが威勢よく遊子たちがいる部屋に入ってきた。

時間は八時ジャスト。

「 もう起きてるよ。」

そう言い、夏梨は起き上がった。

ほんとは、ルキアが来る一時間ぐらい前から起きていたのだ。

変な夢にうなされて。

「ん　　。おはよ。ルキアちゃん夏梨ちゃん。」

「おはよ。遊子。」

夏梨の次に遊子が起きた。

その次にたつや。

最後に織姫。

「わあ、今日もみんなでいじり合ひやねー!」

ルキアが元気よく言つた。

色々つて何?

皆はこの言葉を聞いたとき、いつ思つたのだ。

*

*

*

*

「起きる~。」

男子寮にも女子寮にルキアがきたのと全く同じタイミングで、黒い

死霸装をまとったの上には白い羽織を羽織った赤い髪の毛のつるつ
ん頭がきた。

「う、うるせー。」

一護が言った。

「あと五分だけ~。」

啓吾が言った。

「もう起きてるよ。」

水色が言った。

「なんだい君たち。はやく起きないか。」

石田が洗面所から叫んだ。

石田の声にむかついたのか一護は飛び起きた。

「黙つてろ。」

一護はつぶやいた。

「うやら今の声は聞こえなかつたようだ。」

「ああ。今日は制服と教科書と校則だ。みんな頑張れ。」

恋次がそう言い残し瞬歩で消えた。

今日は隊長の仕事をするのか。

一護たちは思つた。

*

*

*

*

「今日は、まず最初に制服を配る。着るのは明日だぞ。」

ルキアはそう言い、自分の後ろにある大きな袋の一つに手を付けた。

ああ。死霸装も今日で終わりか。

一護は配られてくる、制服を見ながら思つた。

学校の制服なんて何年振りだろうな。

制服を手に取りながら、思つた。

「すぐにその制服はしちゃう」と。ほら、早くしまえ。

ルキアが言った。

「へいへい。」

「あと、教科書も配るだ。これはすぐ元名前をかけ。」

「ペンがないよ。ルキアちゃん。」

遊子が言った。

「儂が渡す。」

ルキアの後ろで声が聞こえた。

夜一 わん…。今日は猫の姿だ。ほんと、ビリビリでもこるな。

皆は心の中で思つた。

「ほれ、ほれ、」

夜一はそんなことお構いなしにローブペンを加え皆の机の上に配つていつた。

そしてすべての教科書を、配り終え名前を書き制服とともにしまって校則などの説明を聞いた。

校則は「廊下で鬼道を使つてはならない。」とか

「勝手に寮に帰らない。」とか。

普通だつた。

そして、今日が終わりみんなの学校生活がスタートした。

明日（後書き）

遂に次回から学校生活スタートです！

楽しみにしてください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといったリクエスト。
などなどお待ちしております。

クラス part? 四年一組

敗北が恐ろしければ強くなればいい！

仲間を護れぬことが恐ろしいければ！ 強くなつて必ず護ると誓え
ばいい！

内なる虚が恐ろしければ それすら口を瀆すまで強くなればいい！

ほかの誰が信じなくとも ただ胸を張つてそつ叫べ！

私の心にいる貴様はそういう男だー護ー！

by ルキア アニメ 115話より

「おっ。やつと起きたね夏梨ちゃん。大丈夫？なんかうなされてみたいだけど。」

あたしは起きてすぐにたつきちゃんに声をかけられた。

「ん。大丈夫だよたつきちゃん。心配してくれてありがと。」

嘘だ。ほんとのところ最近、変な夢にうなされていた。

『私の名前は だ。聞こえるか。夏梨。私の名前は だ。』

夢では必ず「いやつて誰かが話しかけてくる。

あたしは

『何、言つてんの? よく聞こえない。あなたの名前は何?』

あたしがいつ聞くと声の主は

『まだ聞こえぬのか。夏梨。』

といい、悲しそうな声を出す。

そして消える。

たつた、この動作だけなのに時間はずしくたつている。

びりやかにひるみの風呂つなをれてこるのはあたしだけではないわつだ。

遊子も最近つなされてしまうに見える。

口には出でなこが、遊子もうなされていいのだ。ひいだつ。

あたしと回じよつて。

「や、今日からあたしたちは靈術院の生徒だよ! 60年以上上ぶりの学校生活をエンジョイしよう!」

たつきあやさんが元気な声を出した。

そうだ。あたしたちはこれから力を手に入れるためのある意味の修業に入るんだ。

皆を護る力を。

もう、一兄にひけはとらない。

もう誰にも護つてもらわない。

あたしが護つてやるんだ。

あたしはそう思い拳に力を入れた。

「さあ、早く制服に着替えよ。夏梨ちゃん。」

わざわざからうつむいているあたしに向かって遊子が声をかけてきた。

「うん……。」

あたしは、元気いっぱいに答えた。

そんなあたしの声に肝を抜かれたのか。

遊子は少し驚いた表情をしたが、またいつも顔に戻り、

「じゃ、着替えよ……。」

そう言い、あたしたち四人は新しい制服に腕を通した。

*

*

*

*

「夏梨ちゃん……」
「あいあいあい……」

「待つてよ遊子。」

「落ち着けって。」

「落ち着けなんて言わないでよ……せつと、皆を譲れる力が手に入るんだよ……お兄ちゃん!。」

「やうだな。」

遊子は、さしあげられはじめていた。

あたしたち四人は寮の前で一兄たちと会流した。

遊子は一兄を見つけるとすぐに駆け出し、一兄に抱き着いた。

そして、たつきちゃん、織姫ちゃん、あたしの順で一兄に駆け寄った。

もちろん一兄の後ろには、啓吾、水色君、石田、チャド兄がいた。

「お前ら、準備できたか?」

「もう。早く行こう!一兄!……」

一兄の問い合わせにあたしが答えた。

「そうだな。」

そして、一兄は歩きだした。

そして今の現状に戻る。

やつぱし遊子もあたしと同じ考えなんだ…。

あたしは、遊子を見ながら思つた。

「 そうだよね、遊子ちゃん。あたしたちがこれからみんなを護るために勉強しに行くと思うとなんか体がゾクゾクしちゃうよね。」

織姫ちゃんが遊子に同意した。

あたしも早く学校に行きたい!

「早々行こよ一兒!! セニ」瞬歩で行こせやおほよ!!

あたしは一兎たちの前に回り込んで言つた。

早く行きたい。

そう思いあたしは提案したのだ。

「いいのか。」
「瞬歩使つても。」

一兄が聞いてきた。

そんなこと答え決まつてんじやん。

「一昨日、ルキ姉に恋次が使つてたじやん。」

「やうか。」

「校則第24条・無断で瞬歩を使つたことを禁ずる。」

急に石田が声を発した。

そつこえばルキ姉がそんなこと言つてたよつな。
言つてなかつた
よつな……。

「それなんだよ石田。」

「昨日朽木さんが言つてた校則だ。」

「そんなこと言つてたか？」

「言つてたんだ。」

まじめだな。

あたしは思った。

「だ、そうだ。夏梨。残念ながら「」では瞬歩は使えないだよ。」

「チニッ。」

あたしは言った。

「ほら、 もうそろだよ夏梨ちゃん。」

あたしの今の不満の気持ちを読みとつたのか。

たつきちゃんが言った。

本当に校舎はすぐ近くに迫っていた。

ああ。 もう少しど…。

あたし今回これを考えたんだ。

あたしは思った。

*

*

*

「此處でお前たちとはよならだな。じゃ、 勉強頑張れよ。遊子、

夏梨。たつき、 啓吾、 水色。」

「うん。 お兄ちゃんこそ勉強頑張ってねー。」

「ねー。」

やっと教室についた。

確か此処のクラスの責任者は淫大 任海だつたかな?

あたしたちは教室の扉を開けた。

「あら、あなたたちが今日から編入してくる子たち?」

急に声が聞こえた。

聞いていて心地の良い声だつた。

声の主は、淫大 任海さん。

彼女は、薄いピンクの花が描かれた純白のワンピースに身を包んでいた。

瞳の色は、深緑。髪の毛は横で束ねている。見た感じ下したときは、背中の中間ぐらいなんだろう。

「はい。そうです。」

たつきちゃんが代表して答えた。

「さあ。中に入つて。あなたたちを紹介するわ。」

あたしたちは言われるままに動いた。

何をどうすればいいかわからないからだ。

「そう緊張しないで。あなた達名前は?」

「あたしは、有沢竜貴です。」

「私は、黒崎遊子です。」

「あたしは、黒崎夏梨です。」

あたしたちは順番にクラスメイトに向かつて自己紹介をした。

「黒崎つてあの黒崎一護の、兄弟か何か？」

淫大 任海さんが聞いてきた。

「はい。妹です。」

遊子が答えた。

急に教室がざわついた。

「兄…。いったい何をしたの？」

あたしは思った。

「そう。歯やわづくのをやめて。後でお兄さんのお話を聞かせてもらつてもいいかしら？」

淫大さんの一言で教室がまた静かになった。

「はい。いいですよ。」

あたしが答えた。

「ありがとう。じゃあ、あなたたちが座る席は…。」

そう言つと、^{いんだい}淫大さんは教室内を見渡した。

それにつられあたしも見渡した。

よく見ると、教室の中に生徒がたくさんいてきつと前を見て段々となつている机にある椅子に座つている。

さすが特進。監視つちつしてゐる。

だけどあたしもこれからはいいで過ぐれなくちゃならないんだ。

そつ思つとなんか不安になつてきた。

「あなた達は、あそこに座つてもいいのかしら。」

急に淫大さんが声をかけてきた。

「はい。」

たつきちゃんが答えた。

あたしたちが座る席は、一番上の右から数えて三番目とのり。

あたしたちはそこの向かつて歩き出した。

机の前につくと二人で一つの机に座ることが分かった。

そして、あたし、遊子、たつきちゃんの順で席に座った。

「よひしへ。」

あたしの隣で声が聞こえた。

通路を挟んだ隣の子だ。

見た目は、髪の毛を下していくて色は黒。目の色は綺麗な群青色のかわいらしい女の子。

「よひしへ。」

あたしは答えた。

そうして今日が
が始まった。
あしたちの第一の人生とも呼べる日常

クラス part? 四年一組（後書き）

どうでしょ'か。

今回は夏梨田線です。

ほんとは一護田線にしようと思つたんですが、此処は4年から行く
ということにしました。

次回は、水色たちのクラスです。
また朝から始めますよ！

少しハシヨリますがね（笑）

責任者の名前覚えてますか？

覚えていただいてれば、幸いです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいとこうリクエスト。
などなどお待ちしております。

クラス part? 四年一組(前書き)

今回は、水色田線です。
畠畠田線は書いません。

とにかく、書けません。

番外編を投稿しました。

皆の死んだ日を詳しく書いていこうかと思っています。
第1弾は一護と遊子の死んだ日です。
題名は「ありがとう」です。

良かったら読んでみてください。

では、第23話スタート!!

クラス part? 四年一組

思い出したんだ、

俺がどうしてこんなにもお前を助けたかったのか。

ありがと、ルキアお陰でやっと雨は止みそうだ。

by - 護 ルキアへのお礼

『水色。僕の姿が見える?』

急に声が聞こえた。

『誰?』

『僕の姿見えないの?』

『どうしたんだ。君、誰?』

『さうか。まだ僕は見えないのか?』

そう言い、声の主は消えた。

僕は考えた。

今は、いつたい。

パチ

目が覚めた。

ところとは今のは夢か。

それでも鮮明な夢だった。

周りは、見渡す限り草原でどんな時に行つてもそこは晴れている。
だが暖かさはあまり感じない。

あんなに太陽が出てるのに。そして、いつも何かがある。川だったり、花だったり、鳥だったり。

いつも違つ。最近の僕の夢はずつとこれだ。

そこにこると急に声が聞こえる。

『僕の姿見える?』

といふ、どいか幼そうな声が。

もちろん見えない。

ただ、その声が聞こえるときに限つて僕がいる草原に霧が出てくる。
この夢はなんなのか。

一護が目覚ましたら聞いてみよ。

そう想い布団を出た。

時間は、朝の5時38分。

早い。これじゃ、誰も起きてないか…。

取りあえず布団をたたんで、階より一歩先に制服に腕を通した。

*

*

*

僕は散歩していた。

寮のまわつをぐるりと。散歩といつかは疑問だが。

だけどやつぱし暇なので寮に戻った。

なるべくゆっくり。時間稼ぎをしながら。

一護もう起きてるかな？

やつ思いながら、僕は部屋をのぞいた。

アッ起きてる。

驚いた」と一護はすでに起きていた。

しかも制服を着ていた。

時間は6時5分。

まだまだ十分早い。

何で起きたんだろう？

「！。おっ、水色か。今までどこに行つてたんだ？」

「ちよつと散歩。」

一護は僕に気付くと話しかけてきた。

もぢろん小声で。

「ふーん。」

「あつそつだ、一護。僕最近変な夢を見ただけど。」

「どんな夢だ？」

「こう。見渡す限り草原しか無くてどこまでも晴れてる。でもあまり暖かくないんだけど。」

「それで。」

「夢で見るたんびに何か別の中のあるんだ。川だったり、花だったり、鳥だったり。色々。」

「…。」

一護は真剣なまなざしで聞いていた。

「そこに座つていると声が聞こえんだ。『僕が見える?』って。でも、僕は見えないんだ。それに…。」

「それ?」

「その声が聞こえてくるとその草原に何の前振りもなく霧が出てくるんだ。だんだん濃くなつて。」

「…。」

「これ何かわかる? 一護。」

「まあ、わかるつかやわかるけど。まさか水色がこんな早くな。」

「何?」

「それはお前の精神世界だ。」

「精神世界?」

「ああ。これは、誰でも一つは存在している。もちろん、俺の中にもある。精神世界は主に斬魄刀との対話とかだ。まあ、そんなもんだ。精神世界が見れたらもう少しで斬魄刀の名前が聞き出せるかもな。あとは、きっかけだけだ。」

「ふーん。」

「どうかみんなを起しちゃ。そろそろ準備してられないと困る。
」

「どうかみんなを起しちゃ。あれは僕は斬魄刀の名前が聞ける
のか。

「心配には及ばないよ黒崎。

「オッ石田。起きたのか。」

「君の声を聞けばだれでも起きると想つが。」

「ム。」

「でも、啓吾は起きてないぜ。」

「…。」

そして僕たちはいろいろ準備して寮を出た。

*

*

*

「あっ。お兄ちゃん…。」

寮を出たら遊子たちが待っていた。

「おはよう。遊子。」

遊子がやんたちは「ひに點け出しだ。

「お前ら準備できたか？」

「もち。早く行こう！一兄ーー！」

一護の問いに夏梨ちゃんが答えた。

氣のせいだろ？

なんか、夏梨ちゃんの顔が少しばかり元気がないように見える。

まあいいか。

僕がこんなことを考へてゐるといつゝ間にか校舎につき、教室の前に來てた。

「……お前らとはサヨナラだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨。たつき、啓吾、水色。」

「うん。お兄ちゃんこそ勉強頑張ってね！」

「ウルフ」

遊子ちゃんと一緒に護の短い会話を耳にしながら僕と啓吾は教室に向か
つた。

「此処の責任者覚えてるか？水色。」

卷之二

「そうか。名前なんて言つんだっけ。」

「梨路 紅衣さんでしょ。」

「やつだーじゃあ、ドア開けるぞー。」

「どうぞ。」

僕は、開いた扉から中をのぞいた。

「君たちが今日からここに編入する生徒さん?..」

中から、きつとした感じの女性の声が聞こえてきた。

「はー。」

僕が答えた。

「やつ。さあ、中に入つて。あなたたちを紹介するわ。」

僕たちは促されるままに動いた。

「血口紹介。宜しくね。」

声の主の女性は、〇〇さんみたいな恰好をしていた。

瞳の色は、董色。

「初めまして。僕は小島水色です。」

「僕は、浅野啓吾です。」

「はい。皆一水色君と啓吾君が新しくこのクラスに入つてきました。このクラスのことを教えてあげてね！」

「はい。」

クラスメイトの一人が答えた。

「返事ありがとうございます。水色君たちが座る席は…。」

梨路 紅衣さんがクラスを見渡した。

机の並び方が、試験会場みたいでなんとなく緊張してきた。

「あそこ。」

そう言い、梨路さんは上から2段目。左から数えて3番目の席を指差した。

「あそこがあいてるわ。あなたたちあそこ座つてくれる?」

「はい。」

僕は答えた。

僕たちがその席に落ち着いたときに隣から声が聞こえた。

「よろしく。水色君。私の名前は犀川 美紀。」

髪の毛は漆黒を思わせるほどの黒で、ポーテイルにしている。

瞳の色は、栗色。

「うふふ。美紀でいいよ。」

「やつ。じゅ、美紀。」

「そ、う、そ、う。これから楽しくなりそうね！」

「そうだね。

「わあ！水色！！もう友達できたの！俺にも紹介ギヤー！！」

美紀が啓吾の腹を殴つた。

一 水色。何このキモイの。」

「さあ、なんだろ？うね僕にもわからんない。」

たつきみたいだ

僕は、美紀を見て思つた。

こうして、僕の四年生と毎日に幕が開いた。

クラス part? 四年一組（後書き）

四年生シリーズが終わりました。次は一護のクラスです。

遂に、水色が精神世界のことを聞きます。

今のところ一番、斬魄刀に近いのは夏梨、遊子、水色ですかね。

いつかは、夏梨と遊子の精神世界も書きたいと思っています。

あと、四年一組の机の並び方は一組と全く同じです。
といふか、全学年の並び順です。

書いていると、話がどんどん違う方向に行っている気がします。

面白いんですかね。」のお話。と思いつとも色々あります。

こんなことですが「これからもよろしくお願いします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいなどいろいろエスト。
などなどお待ちしております。

クラス part? 六年一組（前書き）

今回は一護のクラスです。

また朝からなんですよ！

ちよいちよいハシリながらやつていきたいと思います。

では、第24話スタート！！

クラス part? 六年一組

恐怖を捨てろ

前を見る

進め

決して立ち止まるな

退けば老いるぞ

臆せば死ぬぞ

叫べ！

我が名は！

『斬月！』

by 斬月

戸 魂界編より

俺は日が覚めた。

「ん。」

時間は5時50分。

早いな。まだ誰も起きていないだろ？

そつ思つて周りを見渡したら、水色がいないことに気が付いた。

早いな。あいつ。

そつ思つて俺は名残惜しいが死霸装を脱いで制服を着た。

*

*

*

「こつち、こ。さん、し。」

俺はなんとなく体操を始めた。

その時、俺たちの部屋を開ける音が聞こえた。

「ー。お、水色か。今までビに行つてたんだ？」

「ちよつと散歩。」

素つ氣ねーな。考え方。

「ふーん。」

「あつそつだ、一護。僕最近変な夢を見ただけビ。」

「どんな夢だ？」

俺は聞いた。

「うーん。見渡す限り草原しか無くてビームでも晴れてる。でもあんまり暖かくないんだけど。」

「それで。」

「夢で見るたんびに何か別のものがあるんだ。川だつたり、花だつたり、鳥だつたり。色々。」

「…。」

俺は真剣に聞いた。

もしかしたら…。

「そこに座つていると声が聞こえんだ。『僕が見える?』って。でも、僕は見えないんだ。それに…。」

「それ?」

「その声が聞こえてくるとその草原に向の前振りもなく霧が出てくるんだ。だんだん濃くなつて。」

「…。」

「これ何かわかる? — 護。」

それつて…。もしかしたら…。

水色の精神世界！？

もしかしなくても絶対そうだな。

一応ルキアに聞いとくか。

「まあ、わかるつぢやわかるけど。まさか水色がこんな卑くな。

「何？」

俺は少し間をおいてから答えた。

「それはお前の精神世界だ。」

「精神世界？」

「ああ。これは、誰でも一つは存在している。もちろん、俺の中にもある。精神世界は主に斬魄刀との対話とかだ。まあ、そんなもんだ。精神世界が見れたらもう少しで斬魄刀の名前が聞き出せるかもな。あとは、きっかけだけだ。」

「ふーん。」

きっかけだけ。

確かにそうだ。

俺の時もそうだったから。

「とにかくみんなを起しちゃうや。そろそろ準備してられないと思ふ。

1

「心配には及ばないよ黒崎。」

「オッ石田。起きたのか。」

「君の声を聞けばだれでも起きると思つが。」

۱۴۰

「でも、皆起きていなければ。」

10

そして俺たちはいろいろ準備して寮を出た。

*

「あつ。お兄ちゃん！」

寮を出たら遊子たちが待つていた。

「遊子。」

遊子たちはじつに翻弄して来た。

「お前ら準備できたか？」

「 もう。早く行こう! 一兄! ！」

俺の問いに夏梨ちゃんが答えた。

なんか夏梨の顔が…。

俺は思つたことを考へないよひこした。

まさか、な。

そして校舎につき四年の教室の前に來た。

「 ハハお前らとはサヨナラだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨、たつき、啓吾、水色。」

「 うん。お兄ちゃんこそ勉強頑張つてね! 」

「 むうー。」

俺は元気な返事をして、六年の教室に向かつた。

*

*

*

*

「 ジヤ、お前らはそつちだなチャド。田口。」

「 ム。」

「 せいぜい頑張るんだな特進クラスで。」

「へいへい。おい、井上行くぞ！」

「うん……」

そんなこんなで俺たちは六年の教室の前にいて扉を開けた。

「失礼しまー」「イエヌヌヌヌ　イ！……！」

俺は最後まで言えなかつた。

俺たちが扉を開けた瞬間に六年一組のみんなが物凄い声を上げただ。

「ほら皆落ち着け。当の本人たちが驚きのあまり固まつてゐるぞ！」

一人の男性の声がした。

あの人気がここの責任者か。

名前は確か伊土　日凪。

あいつが責任者だと分かつたのはあいつの一言でこの教室が静まり返つたからだ。

「ゴホン。」めんな驚かせて。さあ、こちにこい。

伊土さんは俺たちを手招きした。

この人の第一印象は、まあいい人。髪型が俺みたいだけど色は黒。顔はあれだ。特に特徴がない。

服装はジャージ。

「これからお前たちが勉強をする場所だ。自己紹介は？」

「あ、私は井上穂姫です。」

「黒崎一護です。」

シ
ン。

皆は言葉を失つた。

多分、俺たちの名前が絶対に教科書に載つていたからだ。

「やつか。宜しくな。お前らの席はあそじだ。」

そつ言い、伊士さんが指差したといふせなんとまあ。

教室のど真ん中。

なんで俺たちはあそこなんだ。

そんなことを思いながら、俺は席に座つた。

「おはよ。一護。」

隣で声が聞こえた。

「の壇は…。

「遼！！」

「えつ。遼君！..」

井上も来た。

「初めまして。津ノ井 遼です。」

「知ってるよ。あたしのことは呼び捨てでいいからね。」

「はあ。」

とまあ、一人が軽くあいさつしたところで俺、いや俺たちに向かって質問の波が襲ってきた。

「どうしたんですか？」

「なにが？」

「どうして一人はこのクラスに来たんですか？」

「『魂界の勉強に。』

「なんで遼この人と知り合いなんだよ！..！」

「いや、ちょっと。」

俺はなんとなく受け流していた。

井上は、じこつらに驚いていた。

「お前ら。少し静かにしてくれねえか？質問なら休み時間に答えてやるから。」

「本当にですか……？」

「ああ。」

俺がそつぱつと、じこつらは静まつた。

「それじゃあ、授業を始める。今日は鬼道の80番台についてだ。」

伊十ちゃんがそつぱつとみんなは氣を引き締めた。

鬼道の80番台か。

余裕でできるな。

俺はそう思って井上と顔を見合せた。

「意外と簡単かもな。」

「そうだね。」

そして俺たちの波乱の予感たっぷりな日常が始まった。

クラス part? 六年一組（後書き）

…まあ、こんな感じで。

どうでしたか？

やつぱり一護は、質問の波に襲われるわけです。

次回は、石田達です。

また朝から書いたほうがいいですかね？

そういうのもトの一言とこいつにこじて書いていただければ嬉しいです。

あと、明日はあまり更新できないと思します。
すいません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいところリクエスト。
などなどお待ちしております。

クラス part? 六年一組（前書き）

累計5、00000アクセス突破！！！！！

ありがとうございます！！！！！

何か記念にしましょうかね。

また朝からです。

第25話スタート！！！

クラス part? 六年一組

戦いに死ぬと決めた奴なら

自分を殺す奴の名ぐらい

知つて死にてえ筈だからな

更木隊第三席 斑目一角だ

てめえは名乗る必要はねえ

俺の名だけよく憶えときな

てめえを殺す 男の名だ

by 一角 アニメ20話より

「それはお前の精神世界だ。」

「精神世界？」

「ああ。これは、誰でも一つは存在している。もちろん、俺の中に
もある。精神世界は主に斬魄刀との対話とかだ。まあ、そんなもん
だ。精神世界が見れたらもう少しで斬魄刀の名前が聞き出せるかも
な。あとは、きっかけだけだ。」

「ふーん。」

遠くで黒崎が言つてゐることが聞こえる。

そこで僕は目が覚めた。

変な夢だつたな。

周りは夜で月が一つだけ出でている。

僕は高い塔の上に立つてその世界を見渡している。

だがその世界には何もなく。

僕一人しかいない。

建物も僕がたつてゐるやつ以外何もない。

その時僕がいつの間にか持つていた銀嶺弧雀ぎんれいごくじゃくが光りだした。

『もうすぐ会いに行くぞ』

この言葉を残して、いつも消える。

さつと黒崎が言つてたことを踏まえるとあれは僕の精神世界か。

隣で「じじ」という音がした。

「茶渡君起きたのか。」

「ム。」

僕の耳には、黒崎の言葉が飛んできた。

「というかみんなを起しそうぜ。そろそろ準備してくれないと困る。

」

はあ。

黒崎の声が僕の頭に響いた。

のつそりと立ち上がり、黒崎のもとへ行つた。

茶渡君もついてきた。

「心配には及ばないよ黒崎。」

「オッ石田。起きたのか。」

「君の声を聞けばだれでも起きると想つが。」

「ム。」

「でも、啓吾は起きてないぜ。」

「…。」

浅野君は少し特殊なんだな。

僕は思いながら、洗面所に顔を洗いに行つた。

*

*

*

*

寮の外に行くと遊子ちゃん達が待っていた。

僕たちは合流して、本校舎に向かつた。

四年の教室の前にいた。

「いいでお前らとはサヨナラだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨。たつき、啓吾、水色。」

「うそ。お兄ちゃんこそ勉強頑張ってね！」

「おー！」

黒崎が返事をしたのを確認すると、僕たちは六年の教室に向かつた。

*

*

*

*

「じゃ、お前らはやつちだなチャド。石田。」

「ム。」

僕は嫌味を込めて言った。

「せいぜい頑張るんだな特進クラスで。」

やつぱり、僕が黒崎に会っているなんて思いたくない。

「へいへい。おい、井上行くぞ!」

「うん!...」

そう言って、黒崎と井上さんは六年一組の扉を開けた。

「失礼しまー」イエヌエヌエヌエヌ イ!...!...!

「すゞい歓声だな。」

「ム。」

「僕たちも入るか。」

「ム。」

茶渡君がムとしか言わない。

そつ思いながら、僕は一組の扉を開けた。

「失礼します。」

シン

音があるのかと思うぐらい静かだ。

「あなた達。このクラスに今日、編入する子達かしら?」

教室の中で、澄んでいる声が聞こえた。

あの人、久仁丘杏か。

この人は、赤いズボンに黄色いTシャツの上に白い白衣を着ている。

髪の毛は上で一つの団子にして、瞳の色ははねみ色。

眼鏡をかけている。

「はい。」

「さう、中に入つて。血口紹介をしてください。」

「…。」

僕たちは黙つて言われる通りにした。

なんとなくだが、この人に逆らつてはいけないような気がしたからだ。

「石田兩竜です。」

「茶渡泰虎だ。」

「はい。あなた達は、あそこに座つてね。」

そう言い、指が差されたのは2段目の中の列の右から四番目。

「はい。」

僕たちは、そこの机に向かい座った。

「隣の桜花さん。おつかそこの一人にこのクラスのことを教えてあげてくれださいね。」

「はい。」

桜花と呼ばれた彼女は、僕たちのほうを向き直った。

「休み時間に、教える。」

彼女は下している髪の毛を耳にかけながら言った。

瞳の色は、紺青。

「さあ、皆さん。歴史の教科書47ページを開いてください。」

久仁丘さんにそう言われ僕たちは急いで教科書を開いた。

そのページの題名はこうだ。

『藍染の略策と五人の旅禍と一匹』

これ完全に僕たちじゃないか。

僕はそう思いながら、授業を聞いていた。

クラス part? 六年一組（後書き）

今日は短いですね。

紺青色は青です。分からなかつたら調べてみてください。

遂にみんなのクラスシリーズが終わりました。

次回は、時がたち一ヶ月後のお話です。

そろそろみんなの精神世界を描いていきます。
楽しみにしてください。

精神世界が出ているのは、水色、石田、一護のみですね。
夏梨、遊子も見ていますが、書いていません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。
などなどお待ちしております。

テスト（前書き）

総合評価100pt突破!!!!!!

いやー。累計500000アクセス突破に総合評価100pt突破とは、めでたいことが続きます。

記念として、番外編にゆ様からのリクエスト。

田舎のepisodeを書きます。

（出来れば今日中に。）

良かつたら読んでみてください。

第26話スタート!!!!

テスト

…「チヤ、「チヤ恼み過ぎなんだよテメーは。…昔つからな

誰もテメーが思つほど、テメーを悪く思つちやいねえよ…

自分ばっか責めてんじやねえ…何でもかんでも背負つて立てるほ
ど

テメーは頑丈じゃねえだろ？が…

分ける。俺の肩にも…一護の肩に。アイツのカタ ちよつとずつ乗つけて…

ちよつとずつ立ちやいい…

…その為に、俺達は強くなつたんだ…

…アイツを、信じてやれ…ルキア

by 恋次 尸魂界救出編より

初めてこのクラスに来てから一か月たつた。

勉強にも慣れてきて、もうすぐテストが行われる。

これで90点以上を取れば、飛び級で一気に六年生だぞ。

頑張んなきやな。

でもあたしは、勉強に集中したくても夜がきらんと眠れない。

毎回のよひに変な夢を見るから。

あたしは、いつも窓の上にいる。

つまり浮いているところなんだ。

そこは見渡す限り空と、あたしの足元には大きな海がある。

そして声が聞こえるんだ。

『私の名前は、　　だ。夏梨。私の名前は　　だ。』

つて。でもあたしはまだ名前が聞こえない。

その声は直接あたしの頭に響いてくる。

声は聞こえる。名前が聞こえない。

話せる。姿が見えない。

いつもあたしの夢を見る。

何か知りたい。

でも今は、そんなことよりもテストに集中しなければならない。

このテストでいい点ひとつ、一兄たちのクラスに編入するんだ。

多分あたしたち、3人は余裕でテストに受かると思つ。

なんせ、ここに来る前に勉強していたことはすべて六年生レベルの問題だつたから。

そしてテスト当日がきた。

「みなさん。テスト用紙をもらいましたか？」

皆は声をそろえて言ひ。

「はい。」

「それではテスト開始！！」

先生の掛け声でテストが始まった。

あたしは、名前を書いてから問題を見た。

《問1》

赤火砲の詠唱を書きなさい。

《問2》

この学校の創設者の名前を書きなさい。

『問3』

蒼火墜の詠唱を書きなさい。

とまあ、こんな感じ。

めちゃくちゃ簡単！！！！！！

あたしは、残り時間を20分も残してこのテストを終えた。

*

*

*

「テストどうだつた？」

「バツチリ。」

「私も。」

あたしたちはテスト終わりに話していた。

あたしたちから見ればどーってことないが、このクラスにとつては
とつても難しいテストらしい。

なんで分かつたって。隣の人のセリフがそれを物語っていたから。

あたしの席の隣の人 阿那賀詩織 は、

あながき
阿那賀
しおり

「今回のテスト全然わからなかつた！！」

と、詩織の隣の人 藤志輝に言っていた。

彼女、詩織はこのクラスでも頭脳はトップの地位。

なかなか頭がいい子なのに、このテストが出来ないとは。

あたしたちの結果が楽しみだ。

そして、テストが返された。

*

*

*

*

「有沢たつきさん。」

「はい。」

たつきちゃんが呼ばれた。

そして帰ってきた。

「何点だった?」

あたしが聞くとたつきちゃんは得意げに答えた。

「満点!」

「ワーオ。さすが。

「たつきちゃん、次の週末から六年だね。」

「うん。」

「黒崎夏梨さん。」

「アツはい。」

あたしが呼ばれた。

テストが返された。点数は、

「100点。」

やつた

!!!!

これであたしも次の週末から六年だ。

そう思いながら席に戻ると、入れ違いに遊子がきた。

「どうだつた?」

「バツチリ。」

あたしたちは短い会話を交わすと、あたしは席に、遊子は先生のもとに行つた。

そして帰つてきた。

「どう?遊子。」

「満点……」

「じゃ、三人で来週の週末から一護たちのクラスだね……」

「ううん……」

あたしたちは、いろいろ話していくと隣で声が聞こえた。

「えつ。三人とも来週から六年……」

詩織だ。

皆は詩織の声に驚き振り向いた。

ああ。みんなに知られたくないかったのに。

「うう。まあ、そうだけど……。」

「うそ……まさか、あなたたちがそんなに頭がよかつたなんて知らなかつたな。」

「あははは。そうだね。」

あたしは、あまり詩織が好きではない。

「ううう性格だからだ。」

「なんで、満点取れたの?」

「ちやんと勉強したからかな。」

「ちひなの。やつぱしお兄ちゃんに負けたくないから。」

「まあ、やうだね。」

「勉強って今まで何年生レベルのしてたの?」

「六年生。」

「ううそ？」

に

「本当？」

「これだ。」このいちいち取るリアクションが鬱陶しい。

「やう。」

あたしの冷めた態度になんか気分を壊したよつだ。

「じゃ、あたし達これから先生とこうこう話す時間だから。じゃあね。」

「うん。バイバイ。」

そう言こと、あたし、遊子、たつきちやんは先生のといひに駆け出しそのまま教室を出て行つた。

遂に来週からあたしたちは六年になるんだ。

あたしは期待に胸がいっぱいになつた。

皆が死神になるまで、あと7カ月。

テスト（後書き）

どうでしたか？

遂に、夏梨たちは六年生になってしまいます。

本当はこの一話に夏梨と水色と一緒に雨竜の「う巣を書いたと思つてたんだでしたが、意外と夏梨のクラスの話が長くなつてしまつて（汗）。

ま、いいですが。

カウントダウンを始めました。

皆が死神になるまでのです。

因みにこの話は、夏休み明けです。

つまり、九月の初めといつわけです。

あんまり、季節感が出てませんが。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。などなどお待ちしております。

テスト part? (前書き)

どーも!!

番外編を投稿しました。良かつたら読んでみてください。

第27話スタート!!!!!!

テスト part?

…しつかり生きりよー護

しつかり生きて しつかり年喰つて しつかりハゲて

そんで俺より後に死ね

そんで、出来れば笑つて死ね

でなきや、俺が真咲に合わせる顔がねえ

ウジウジじてんなよ

悲しみなんてカツコいいモノを背負つたらや、オマーはまだ若すぎん
のよ

by - 心 グランドフィッシュヤー編

「おーす！啓吾、水色！」

「おっす。貴仁^{ケイジン}！」

「お早う。貴仁！。今日は早いね。」

「そうかー？ そうでもないだろ。」

「お、おはよー。水色。」

「お早う。美紀。なんかあつた?」

僕は今走ってきたであろう美紀に話しかけた。

「今日、テスト、やるつて！」

二ノ丸

「ん！」

美紀は、啓吾に鋭い視線をぶつけた。

相変わらず、嫌われてるね。啓吾。

「で、このテストで合格。つまり、90点以上を取つたら六年に飛び級だつて！－！」

「…………」

僕、啓吾、貴仁斗は声をそろえて言った。

「頑張つてみんなで90点以上とる！！」

「うん」

貴仁斗が言った。

テストか。多分僕と啓吾は余裕だ。なんせ今までやつてきた勉強
ここに来る前の は、すべて六年生レベルだったから。

問題はこの二人。二人はクラスでは頭がとつてもいい人たちだ。

頑張れば受かるだろ？

引っかかるのは、90点以上で六年に飛び級とこうこと。

それほどまでに難しいのならば、この二人が受かることはできるだ
るつか？

ガラ

扉が開いた。

「おはようござります。みなさん、席についてください。」

がやがやしていた教室が一瞬で静かになつた。
さすが。

「突然ですが、ここでテストを行います。」

「え……？」

「聞いてないですよー。」

皆が反対した。しかし先生の次の言葉で皆の顔が一瞬にして変わっ

た。

「このテストで90点以上とれた人は次の週末から六年生です。ちなみに、四年一組が昨日テストを行いすぐに丸付けをしテストを返しました。ここで、テストが90点以上いや満点の人人が三人いました。

啓吾君と水色君は知っているはずよ。」

僕と、啓吾が知っている。しかも三人。この単語から導き出される考えは…。

「黒崎遊子、黒崎夏梨、有沢竜貴さんの三名だけだったそうです。」

やつぱり…。あの三人は受かったのか。それじゃあ、僕たちも頑張んなきゃいけないじやん。

「みなさんも六年生になれるように頑張ってください。それではテストを始めます。」

先生は、そういうのはテスト用紙を配り始めた。

「それでは、開始！」

僕は名前をきちんと書いた。名前を書かなきや0点になるかも知れないから。

問題はこうだ。

赤火砲の詠唱を書きなさい。

《問2》

この学校の創設者の名前を書きなさい。

《問3》

蒼火墜の詠唱を書きなさい。

こんな程度か。これなら僕と啓吾、そして、美紀と貴仁斗にもできるだろ。

そう思い僕はテストに取り組んだ。

*

*

*

*

「終了。鉛筆をおいてください。」

テストが終わつた。

「啓吾どうだった?」

僕は聞いた。

「まあまあ。そういう水色はどうだ?」

「完璧。」

「み・ず・い・ろー・テス・ト、どつだつた?」

美紀だ。

「完璧。」

僕は啓吾に言つたのと同じよつて答えた。

「美紀は?」

「大体かけた。と、思つ。」

「ふーん。貴仁[斗は?]」

「俺か。俺は大丈夫だ。多分…。」

「そんなに、心配になるようなことあつたか?」

「あつたじやない!! 最後の問題! 『問20』が!!」

「あれそんなに難しかつたか?」

「十分難しかつただろうつー!」

「そりかなあ?」

「水色までーーーそんなに簡単だつたか?」

「最後の問題でしょ。《問20》「藍染は何の目的で崩玉を持ち去つたのか。また、その藍染に終止符を打つた黒崎一護元死神代行の技名を述べよ。」ってやつでしょ。」

「うそ。」

「簡単じゃない。」

「「ビ」がーー。」

美紀と貴仁斗は声をそろえて言った。

「だつて、藍染は戸隠界、世界の秩序をなくすために靈王がビの「」うのでしょ。」

「や、そうね。」

「で、藍染を倒した技は一護の 最後の月牙天衝 でしょ。細かく言つと 無月。」

「そうだな。」

「ほり簡単ジャン。」

「お前。」

貴仁斗は最後まで言えなかつた。先生が丸付けを終え教室に入ってきたからだ。

「それでは、皆さんのテスト用紙を返します。今回、90点以上の

人が4人です。そのうち一人が満点です。」

四人。そう聞いたとき僕は確信を持った。

僕たちのことだな、と。

「浅野啓吾さん。」

啓吾が呼ばれた。

「どうだつた?」

僕は帰つてきた啓吾に聞いた。

「満点! ! ! ! !

啓吾は興奮を抑えているような声で答えた。

「おめでと。」

「小島水色さん」

「はい。」

そしてテスト用紙が返つてきた。

点数は満点だ。

「おめでとう。水色君。」

「あつがとひー」^{アツガトヒ}こます。」

僕はそう言ひ自分の席に戻つた。

「水色どひだつた?」

「どひ?」

「じりせ満点だろ。」

上から、啓吾、美紀、貴仁斗の順。

「あたり。」

「やつぱしぃな。」

「さじかわ
犀川美紀さん。」

「はー。」

「どひ?」

「おひこー。」

「おめでとひー。」

「あつがと、水色ーー。」

美紀が呼ばれて、なんか先生と会話をして戻つてきた。

美紀は満面の笑顔で答えた。

「かみやまきじと
神山貴仁斗さん。」

「おっ。俺だ。」

そう言い、貴仁斗が行つた。

美紀の時と同じようなことをしてから戻つてきた。

「どうだつた?」

美紀が聞いた。

「ふつふつふつ。知りたいか。」

「当たり前よ……」

「それでは教えて差し上げよう。俺の点数はズバリ97点……」

「つ。ま、負けた……」

「わおー!じゃあ、来週から四人そろって六年だね!……」

僕が言つと、貴仁斗はうれしそうな声を上げた。

「おっ!……」

そして今日が終わった。

来週から六年。僕は、期待と不安の気持ちを五分五分に持ちながら思つた。

大丈夫かな。と。

皆が死神になるまで、あと7か月

テスト part? (後書き)

皆が死神になるまであと二ヶ月ですか。

長いですね。

次回は、ここから一週間後。遊子たちが一護のクラスに行つたところを書きます。

石田達はそのまま次です。

といふか、話を早く進めたいでこれから（一護と石田の話以降）からは、六年一組の様子を一護、織姫、遊子、夏梨、たつきの順で一組は石田のみの日記形式にしてよいかと思ひます。一話につき一ヶ月です。

つまり…

上手くいけばあと一〇話くらいで終わらせそうです。

そつしたら、皆の死神姿を描き 何かしら事件が起り 解決される。

といつ私が思い描いている物語が出来そつです。

(ああ……なんかちやつかり物語の構成がばれた…………(・_・))

デンマーク?

なんかすいません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといリクエスト。
などなどお待ちしております。

飛び級生（前書き）

さて、27話から一週間後のお話です。

第28話スタート！！

飛び級生

俺は……結局朽木隊長に……一度も勝てねえままだ……

ルキアがいなくなつてからずつと……毎日死ぬ氣で鍛錬したが、それでもダメだった……

あの人は遠すぎる……

力づくりでルキアを取り戻すなんて……俺には出来なかつたんだ……！

黒崎……恥を承知でてめえに頼む……！……

……ルキアを……ルキアを助けてくれ……！……

by 恋次 戸 魂界救出編

今日の朝。俺たちは普通に靈術院に登校して、普通に授業を受けるいつもの変わらない何の刺激もない学校生活を送ると思つていた。だが、少しだけ引っかかることがある。

啓吾と水色の態度。

なんかつせつめしてゐる態度を振りまいてゐる皆君は、今日は珍しく早起きた。

そして水色も顔には出していないが何かを楽しみにしているようだつた。

そんなことを考えながら、一護は自分の席に座つていた。右には織姫。左には遼がいる。

「ねえ、一護。今日飛び級生が来るらしいよ。」

「へー。何人くらいが来るんだ？」

「いっぱいだつて。確かに大まかな人数は7～8人。全員、元4・1か4・2なんだつて。」

「ふーん。」

4・1と4・2・1のクラスには遊子たちと啓吾たちがいたな。

まさか、此処(6・1)に来るのは、あいつらだ。なんて言わねよな。

「ねえ、それってたつきちゃんたちじゃないの？」

「何言つてゐんだよ井上。まあ、確かに今日の水色たちの態度に、引っかかることは何個があるけど。」

「あたしもだよ。なんか今日起きたらたつきちゃんたちなんか皆そわそわしちゃつてさ。『どうしたの』って聞いたら『後でわかる』

なんていうの。絶対ここに来るのは、たつきちゃんたちでしょ。」

「そりなんだ。ま、もう先生が来る時間だからもうすぐ答えはわかるけどね。」

「そだね。」

ガラ

遼が言った通り先生 伊士日凪 がきた。

「今日は飛び級生を紹介する。ほら、入って入って。」

そう言いながら、日凪は手招きをした。

その顔触れを見て、一護と織姫は驚愕した。

あいつらじやねえか。でも一人知らない子がいる。

「此処にいる七人がこれからお前たちが一緒に勉強する場所だ。自己紹介は?」

「黒崎遊子です。」

「黒崎夏梨です。」

「有沢竜貴です。」

「浅野啓吾です。」

「小島水色です。」

「犀川美紀です。」

「神山貴仁斗です。」

右から順番に自己紹介をして行つた。

「七人も座れるところが無いな。おい、皆座るといひを作つてくれ!...」

田凧が言つた瞬間皆は右にと左にとそれた。

つか、一番後ろがあいてるけど。

皆、同じことを考えていた。

「よし。おつよく見ると一番後ろがあいてるじゃないか。今、一番後ろの席に座つてるやつはもう一つずれてそいつらの前に座つてやつもすれ。」

なんで、俺、僕、私たちが移動しなきやならないのよ!...

「サンキュー。じゃ、お前はあそこの席に座れ。」

「はー。」

代表してたつきが答えた。

そうして、さつさまで前に立っていた7人は一護、織姫、遼がいる

一列後ろの席に落ち着いた。

「あつ。一兄！それに織姫ちゃん！」

「お兄ちゃん！-織姫ちゃん！-」

「織姫つ！一護！」

「いつか」
―――! また一緒に勉強ブギヤ!

1

「だ・ま・れ！・！」

美紀とたつきが同時に啓吾のおなかを殴った。

「ありやま。息ぴつたり。」

貴仁斗は、あきれ顔でこの光景を眺めていた。

「アーチャー」。——井上也ん。

「えつ。お前らこの一人と知り合い！つか、今夏梨と遊子お兄ちゃんつて言ってなかつたか？」

貴仁斗は、もしかしてと云ふ風に声を潜めた。

『スルガノミチ』

美紀も気付いたらしい。

「まあか、そーにゃるのつて…。へ 黒崎一護おおお
…………」

「そ、そりだけど。」

またか。このリアクション。いい加減慣れてきたよ。

「おい、セニ。少し静かに。」

「はーー。」

一護が答えた。

「んじや、始めるだ。今日ほー田中鬼道をやるだーー。」

「はー。」

「復習も兼ねてるがお前らの実力も見たい。とりあえず、外に出る。」

「

田舎の声でみんなは外へと移動した。

*

*

*

「まづは、破道の30番台だ。できるやつは詠唱破棄で。」

「並べーー。」

皆は、縦3列。横7列に並んだ。

「撃て！！！」

「破道の三十一 赤火砲！！」

詠唱破棄の者いれば

「『君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ』 破道の三十一 赤
火砲！！」

と、詠唱する者いる。

皆の、赤火砲の威力はテニスボールくらい。

これでも十分すごい。

「次！！」

一護、織姫、遼がいる列の順番がきた。

「『破道の三十一 赤火砲！！』」

三人は、息ぴつたりに言った。

威力は一護がバスケットボール。

織姫が、マリ程度。

そして遼はテニスボールよりも少し大きいがまりよりかは小さい。

「つ！！また負けた！！」

一俺に勝とうなんて100年早いぜ遼。

「いつか、絶対に勝つ！！！！！」

一せいせい頑張んな

卷之三

一次！！

そして全員終わってた。

さすが一護だね
あんなの撃二なんて

ほんと
的なんて跡形もなく消えてたよ

俺たちも元気になさ

てが
一
別
三
加
添
て
の
知
り
な
い
か
な
」

知りがい一覧

卷之三

卷之三

「ほれ。早く打たんか！」

「よ、夜一さん…どうぞ…」。

「暇じやから来たのじや。喜助のところにいても全然楽しくないのでな。」

「あ、そうすか。」

「スゲー。あの”瞬神 夜一”と対等に話してん。」

「やつぱり。あれよ。黒崎一護はとにかくすげのよ。」

「お前ら…早く打て…！」

「……………………」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！」

「破道の三十一 赤火砲！」

「破道の三十一 赤火砲！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！」

「破道の三十一 赤火砲！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！！」

上から、たつき、遊子、夏梨、啓吾、水色、美紀、貴仁斗。

皆は、手のひらから六年生 一護、織姫、遼を抜いた と全く
同じ大きさの赤火砲を撃つた。

一番大きいのは、夏梨。

遼よりやや小さいが周りの六年よりはでかい赤火砲を撃つた。

「さすがだな。次は、四十番台だ。」

「つして、鬼道の練習をして今日は終わった。

皆が死神なるまで、あと7カ月を切った。

飛び級生（後書き）

はい。どうでしたか？

遊子達が六年にきました。

今度は石田達のクラスですね。

それが終わつたら卒業までまつ しぐらです。

なんか長くなりそうですが最後まで宜しくお願ひします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。
などなどお待ちしております。

石田の反応（前書き）

第29話スタート――――――

かわすのなら“斬らせない”！

誰かを護るなら“死なせない”！

攻撃するなら……“斬る”！

by 一護・浦原

「えつ！それは本当かい茶渡君！？」

「ム。」

「そつか。たまには顔を見せに行くか。」

「ム。」

ガラ

教室の扉があいた。

「みんな席に着いてください。授業を始めます。」

「はい。」

「今日は、鬼道をやります。縛道の80番台です。」

「はい。」

「それでは詠唱を教えます。しつかり覚えてください。」

「はい。」

此処にいる人々は、詠唱を覚えた。

「それでは、外に行きます。」

「はい。」

*

*

*

*

「では、並んで下さい。」

皆は並んだ。縦3列。横7列で。

「それでは、はい！－」

「縛道の八十だんくう一 断空！－」

一列目の人人が叫んだ。

先生が打つた、赤火砲を防いだ。

「次！」

「はい！縛道の八十ー 断空ー。」

「次！」

これはクラス皆が終わるまで続けられた。

*

*

*

「やつと休み時間だ。そつだ茶渡君！」

「ム。」

「一組に行かないか？」

「いいぞ。」

「じゃあ、行こう。」

石田は動いた。後ろからチャドもついてきた。

* * *

「入つてもいいですか？」

石田が扉に向かつて聞いた。

「いいぞ！」

伊士の声らしきものが返ってきた。

「失礼します。」

「ム。」

「あつ！一兄！あれ…。」

「な、んだよ。か、りん！…。あつだ
らどけ！！！前が見えない！」

も
…お前

「ごめんねーー護ー！」

「あわわ！ーだ、大丈夫？」

「大丈夫だ。多分。」

そう言い、さつき夏梨が見た方向を見た。

「あつ。おーい。石田にチャドじやねえか！ー」

ピタ

クラスの時が止まった。

またか…。

「何してんだお前らそこで。」

「僕たちを見たときの第一声がそれか黒崎。」

「悪かつたな。」

「ん……あそこ」この辺のセリフをチャド………会ったかつたぞオエッ…」

「だからだまれ！！」

美紀とたつきにおなかのパンチを食らいノックアウト。

ほうといでね。いつも同じだから、

一
そ
う
か
し
」

「お前が何の用だ？」

「いや。遊子ちゃんたちがこのクラスに来たっていうから。確かめに。」

「やつかり。そうかい。はい。ここに、おせいかがりに来てこま
す。それじゃ、出でな。」

「ひどいな。茶渡君はお好きなように。僕は出ていく。」

۱۰۴

「じゃあな。黒崎。」「

「お、うーん。」

皆が死神になるまで、あと6ヶ月と3週間。

山田の反応（後書き）

短いです！！！

すいません。とこつか話が思いつきました。

次回からは日記形式です。

意外とそつちのほうが思いつくかも（汗）。

そこはデントマイとしか言しようがありません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつリクエスト。
などなどお待ちしております。

『月～（前書き）

わあ、田嶋彩氏です。

第30話スタート――――――

(驚き―――――)

9月

あたりめーだろ 誓つたんだよ・・・

絶対に助けるってな・・・

誰でもねえよ・・・

ただ俺の・・・ 魂にだ！・・・

b y - 護 漫画1-6巻より

遊子

2002年 9月4日(火)

最近変な夢を見る。

夢で田が覚めると私は水の中にいる。

最初見たときは”死ぬっ！！”と思つたけど水の中でも息ができた。

何でも試してみるもんだとthought。

水の中にいて、私は泳いでく。

陸に向かつて。

でも一向に陸は見えてこない。

しかも、陸どころか空も何もかもない。

此処には水しかないことがわかると私は、あきらめる。

そしたら声が聞こえる。

『私の姿が見える？遊子。』

まるでお姫さんのよつな声だ。

その時だけ一筋の光が見える。

『見えない。』

私は答える。そしたら声は消える。そして光も消える。

夏梨ちゃんに相談してみよう。

＊＊＊

夏梨

2006年 9月5日（水）

今日は、特に何もなかつた。

じって言えば、遊子が相談してきたこと。

『最近変な夢を見る』あたしと同じじゃん。

あたしも変な夢を見てるって言つたら、"やつぱり"と叫ってきた。

きっと予想していたんだろう。そんなことを言つているあたしも遊子が変な夢を見ているのではないかと予想していたから。

これが何か知りたいけど。これの答えを聞くのがなんか怖い。

一兄に聞いてみよう。どんなことだつて受け止める。

* * *

たつき

2002年 9月12日（水）

今日は、10人で1グループを作りみんなで対戦した。

対戦方法は、浅打での打ち合戦。

もう斬魄刀を持つてゐる一護は浅打を持つたら斬月に代わってしまふのではないかとみんなひやひやしていただが、ぎりぎり変化しなかつた。

そしてあたしが入ったグル プは当然、一護、織姫、遊子ちゃん、夏梨ちゃん、水色、啓吾（むかつくー）、美紀、貴仁斗、そして遼がいる。

そして優勝もー！」。

ま、当然だよね。一護がいるんだし。

* * *

啓吾

2062年 9月21日（金）

最近は、鬼道の練習ばっかりだ。

そろそろ飽きてきたな。

瞬歩は、普通だけできれば剣術を磨きたい。

といつも、俺の斬魄刀はいつご対面が出来んのかな？

皆変な夢を見てるとか言つてゐるけど。

どんな夢を見てんのかな？

* * *

水色

2062年 9月27日（木）

今日は久しぶりに、剣術の勉強をした。

それでもやけに啓吾が喜んでいた。

ま、いいけど。

練習台は一護。

皆の太刀筋を軽く返してアドバイスをする。

いい先生だ。

僕は思ひ。

＊＊＊

一護

2006年 10月3日（水）

剣術の練習はいいけどみんなの練習台は嫌になつてきた。

しかも今日遊子と夏梨が『最近変な夢を見る。』と言つてきた。

詳しく述べると夏梨は、いつも空の上にいる。

つまり浮いている。

そこは見渡す限り空と、夏梨の足元には大きな海がある。

そして声が聞こえる。

『私の名前は、 だ。 夏梨。 私の名前は だ。』

つて。 でも夏梨はまだ名前が聞こえない。

その声は直接夏梨の頭に響いてくるやう。

で遊子は、

夢で田が覚めると遊子は水の中にいる。

陸に向かつて泳ぐ。

でも一向に陸は見えてこない。

しかも、陸どころか空も何もかもない。

此處には水しかないことがわかると遊子は、あせりあめる。

そしたら声が聞こえる。

『私の姿が見える? 遊子。』

まるで母さんのような声だそつ。

その時だけ一筋の光が見える。

『見えない。』

遊子は答える。そしたら声は消える。そして光も消えるやうだ。

ここつらも見てんのか。精神世界。

俺がそう教えると嬉しそうな声を出した。

精神世界が見れるところ」とはもうすぐ斬魄刀に会えるところ。

それがうれしかったんだろうなと俺は思う。

* * *

織姫

2062年 10月9日（火）

そろそろ期末テストが近い。

先生がそう発表した。

でも私たちは余裕で合格できるだろ？

だって、私たちはもういろんな隊から誘いが来てるから。

* * *

遼

2062年 10月15日（木）

勉強が難しくなってきた。

それでも一護たち、4年から飛び級してきた子達は余裕な顔で勉強している。

いいな。

なんせもつ、護廷十三隊から誘いが来てるほどの実力者たち。

僕も頑張らなくちゃ。

* * *

美紀

2002年 10月22日(月)

今日席替えをした。

席替え方法はただのくじ。

決まつた席は、一護の隣に夏梨。遊子の隣に貴仁斗。私の隣に水色。

後はばらばら。

まさか私の隣に水色なんて。

最初に会つたときみたい。

うれしいな。

* * *

貴仁斗

2002年 10月26日(金)

席替え後の授業は、もう難しくなった。

なのに余裕な顔でついて行つて居る遊子はす」こと思ひ。

俺も頑張らなきやみんなにおいて行かれ。

確か期末テストは合格すると、護廷十三隊への入隊が確実になる。

絶対に合格する…！

* * *

雨竜

2062年 11月2日（金）

この学校の期末テストまであと1ヶ月を切った。

でも絶対に合格するとこつ自信がある。

絶対に黒崎よりいい点を取つてやる。

* * *

チャド

2062年 11月6日（火）

期末テストまであと4週間。

ちゃんと勉強して、いい点を取る。

そう言えば今日、護廷十三隊の檜佐木さんが来て

「此処を卒業したら俺の隊に来ないか。」

といつ誘いを受けた。

「考えておく。」

俺はそう返した。

皆が死神になるまで、あと4ヶ月を切った。

9月～（後書き）

書きやすい……！

驚くほど書きやすかつたです。

しかも田記だと、田記がどんどん進みます……！

もしかしたら、靈術院篇は予定より早く終わるかも知れません。

次回も田記形式です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといリクエストなどなどお待ちしております。

11月～（前書き）

また日記です。

以外と書きやすいんですねこれが。

書いていく順番は（一護たちのこと。）いくらか違いますが、（承
ぐださい。

第31話スタート！！！

11月～

ありがとな　お陰で　心は此処に　置いていかる。

by 海燕 尸魂界救出編

遊子

2002年 11月12日（月）

私が見ている夢の正体がわかつたから、私は夢に出て来る声の正体を突き止めたい！と思つた。

そして、斬魄刀の名前を聞くんだ。

お兄ちゃんは

「あつかけが必要だ。」

と語っていた。

あつかけてなんだりつへ。

お兄ちゃんはどうして名前が聞けたんだりつへ。

* * *

夏梨

2062年 11月21日（水）

期末テストまであと一週間。

美紀とか、貴仁斗とか。ほかのクラスのみんなは、物凄い勢いで勉強している。

あたしたちはまだ追いついてきてるけど、そろそろあたしも勉強しなくちゃダメかな？

早く死神になりたい。

絶対にこのテストは合格する！

* * *

たつき

2062年 11月29日（木）

期末テストまであと、六日。

合格できるか心配になつてきた。

皆、勉強を死に物狂いでやつている。

ただ一人を除いて。

あたし達、四年からの飛び級生はほかの六年と同じあり様。

頑張つて勉強しなきや！

＊＊＊

一護

2062年 11月29日（木）

皆、勉強頑張つてるな。

俺はいいけど。

つか、誘いが多すぎで決まらんね。

どこの隊に入ろうか。

決めるのが楽しみだ。

＊＊＊

織姫

2062年 11月29日（木）

勉強が難しい！！

でもあたしはクラスの中ではついて行っているぜ。

良くなつせねやんが質問しに来る。

しかも、隊からの誘いが増えってきた。

黒崎君には負けるなべ。

特に熱烈な誘いを受けてるのが十番隊。

田番谷君は来ないけど、乱菊さんが驚くほどスピードでリレーを來る。

もしかしたら、仕事をわざつくる感じないかと思へ。

田番谷君も大変だな。

* * *

略語

2002年 11月30日（金）

やばい。勉強が…。追いつけてなくなつてしまつて。

一護はいいな。絶対に合格できるだら。

もひ、一番隊や二番隊。

そして五番隊と十二番隊に八番隊、そして十一番隊から誘いが来てる。

しかも隊長自ら。

一番隊は違つけど…。

十一番隊の隊長。スゲー顔が怖かつた。

二番隊は隠密起動。

四番隊は医療専門。

この隊から誘いが来ないのはわかる。

一護は即答で断りそうだ。

残りの六番隊と七番隊と九番隊と十番隊からはなんで誘いが来ないんだろ？

十一番隊は別として。

一護の性格を理解してるからかな？

決めたことは絶対に曲げないって。

いくら誘つても入らない可能性のほうが高いし。

俺にもどつかの隊から誘いがこねえかなあ？

* * *

水色

2062年 11月30日（金）

僕にも隊への誘いがきた。

九番隊の檜佐木さんだ。

そこなら僕も入っていいかなあと思つ。

期末テストまであと5日になってしまった。

取りあえず頑張ろう。

* * *

美紀

2062年 11月30日（金）

水色にも誘いが来てる。

良いな。

水色は靈力操作がうまいから四番隊にでも入ればいいと思つけど。

本人はどう思つてんのかな？

知りたいな。

期末テスト。絶対に頑張つて水色と一緒に卒業してやる……。

* * *

貴仁斗

2062年 12月2日（月）

期末テストが明後日に迫つてゐる。

でも俺の今の調子で行くとたぶん大丈夫。

合格できる……と思つ。

最近の勉強がついて行けるようになつたので俺もテストが合格できる気がしてきた。

行ける！

* * *

遼

2062年 12月2日（月）

勉強がわかつてきた。

テストも近いし。この調子なら合格できると田中。

一護と一緒に。

護廷十三隊に。

雨竜

2062年 12月3日（火）

遂に明日だ。

頑張らなくては。

黒崎より良い点を取る！

絶対に。

チャド

2062年 12月3日（火）

皆の様子が変わった。

テストは明日なのに、もう緊張してるのだろうか？

皆につられて俺も緊張してきた。

明日。頑張つて皆と。

一護と。

卒業ができるよつこ。

皆が死神になるまで、あと3ヶ月。

11月～（後書き）

短いですね～。

なんか啓吾が長いです。

あの部分を誰かのところに書こうと思つていたんですけど。まさか、啓吾に書くなんて自分でも驚いてしました。（おい……！）

期末テスト。

意外とこのキーワードが出てきますがわかりますよね。

護廷十三隊への入隊がかかつていて、だ いじなテストです。

このテストで合格しなくても隊には入れますが、テストに合格すると新人より少し上の位に行けるのです！

（原作では違います。これはこのお話だけの設定です。お間違えないように。）

次回、また日記ですが内容は期末テストだけです。

そのまた次回は一月～二月。

そのまた次は卒業。という感じで予定しています。

お楽しみに！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。

などなど、お待ちしておつまみ。

期末テスト（前書き）

もうすぐ、 瞬術院篇が終わりそうです。

第32話スタート！！！

期末テスト

私の所為で死んだ者の傍に 私が駆け寄つて何が悪い！！

by ルキア

戸魂界編

遊子

2062年 12月4日（水）

今日が期末テストだった。

自分的には、筆記試験はそこそこできたと思つ。

実技の鬼道は満点だと思つ。

後は結果を待つだけ。

* * *

夏梨

2062年 12月4日（水）

遂に期末テストがきた。

筆記の歴史が微妙だつたけど、鬼道は完ぺきなはず。

結果を見るのが楽しみ！――！

* * *

たつき

2062年 12月4日（水）

期末テスト――！

たぶん大丈夫だと思つ。

つか、一護は受けてなかつた。

まあ、あの強さなら受けなくとも合格つてわけね。

少しむかつく――！

* * *

一護

2062年 12月4日（水）

皆期末テスト受けてたけど、俺は受けなかつた。

最初、受けようと思つて試験官がいる場所に行つたら、

「君は、試験官になりなさい。」

はあ？ って感じだ。

あーあ。俺も受けてみたかったなテスト。

試験管もなかなか捨てたもんじゃねえけどな。

* * *

織姫

2006年 12月4日（水）

今日インパクトがあったのは何と言つても黒崎君が試験官だつたこと。

一人ずつの実技の時、試験官は生徒の鬼道を受け止める役。

私の相手（？）が、黒崎君だつた。

こんななんじや撃てないよ～！

でも黒崎君は案外楽しそうに

なんていつてる。

「早く撃つてこい。」

だから私は黒崎君に向かつて鬼道を放てないの…！

はあ。期末テストは疲れた。

でも、いい線行つてる気がする。

大丈夫！

* * *

啓吾

2062年 12月4日（水）

一護！—！—！

なんで試験官。

しかも結構はまってる。

同じ試験官としてきたルキアちゃんと楽しそうに話しあって。

なんか、井上さんの顔が複雑だよ。

気付いてあげなよー護。

ほんと、鈍感だな。

期末テストは結構いい感じ。

頑張った甲斐があつたと思づ。

悔いはない。

* * *

水色

2062年 12月4日（水）

期末テストは只々疲れただけだった。

でも楽しかったこともある。

試験官としてきた死神の人たちと、色々話した」と。

なんか小さな隊長さんに会つて

「君、隊長？なんか小さいね。」

なんていつたらそのまま怒り出しちゃつて、

びりゅう氣にしてたみたい。

しかも名前を訊いたら

「十番隊隊長。 日番谷冬獅郎だ。」

なんていうから驚き。

まさかこんな小さい子が、最短で靈術院を卒業した天才児だつたなんて。

本人は、天才児の『児』の字がいやみたいだけね。

期末テストはまあまあ。

ま、いい線行つてると思う。

* * *

美紀

2006年 12月4日（水）

疲れたり。

水色たちはなんかすごいけどあたしは微妙だな。

結果を見るのが少し怖い。

* * *

貴仁斗

2006年 12月4日（水）

テストがやっと終わったー！！！

しばらくはみんなの魂と呼べるものが抜けるんだろうな…。

にしても、なんかテストでいろいろ驚いた。

一護の友達はみんな普通に隊長格と話してゐし。遼以外ね。

水色なんて、十番隊の隊長を怒らせてゐし。

一護は、十三番隊副隊長朽木ルキアと楽しそうに話してゐし。

それを見ている、織姫は何とも言えない複雑な表情をしてゐしで。

とにかく、疲れた。

テストはいいと思つ。

まあ、自分の実力を信じよ。

* * *

遼

2062年 12月4日(水)

一護が試験官…………！

テストはまあまあいいと思つ。

ていうか、一護がいないなと思つたら急に死霸装を着て斬魄刀を持つて現れたときは驚いた。

それはもう。言葉で表せないくらい。

ほんと一護にはいつもいろいろ驚かされるよ。

* * *

雨竜

2062年 12月4日（水）

黒崎が試験に出ない！！

何だよ。

これじゃあ、僕が頑張る意味がないじゃないか！

テストはもううん。

全て完璧。

結果が楽しみだ。

* * *

チャード

2062年 12月4日（水）

テストは結構いくてると思う。

まあ、合格だらうな。

一護がもし「」の試験に出でいたら点数がどのくらいか知りたかった。

多分、95点ぐらいか。

実技はいいが筆記で間違えると思う。

皆が死神になるまで、あと3ヶ月。

期末テスト（後書き）

期末テストが終わりました！――

次回は、予告通り一月から一月をまた日記形式で行きたいなと思います。

卒業式は、日記ではあつませんよ――

「あの日、あの時、あの場所に――」

とこう新しい小説を投稿しました！――

これからは、重投稿になってしまいますので、どちらかとどちらを一日交替で書いていきたいと思つので、これからは、（※分一）――日に一回の更新スピードだと思います。

（もし一度言いますが多分です。一日に両方一話ずつ投稿する可能性もあります）

良かつたら読んでみてくださいね――

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといふリクエストなどなどお待ちしております。

1月～（前書き）

もうすぐです！！

第33話スタート！！

1月

じうしてウチの連中はどういつもひこつも…

自分が死にかけてる時におれの心配なんかしてんだよ…！

・・・自分のことでじびつてる俺が・・・・・・

バカみたいじゃねえかよ！

by 一護 第1話より

遊子

2002年 12月10日（火）

もつすぐ冬休み。

でも、冬休み中はどこにいればいいのかな？

此処にいるのかな？

* * *

夏梨

2062年 12月16日（月）

試験が終わって合格発表の日付がわかった。

1月13日（月）

この日までは試験の結果がわからんないのか。

やだな。

* * *

たつき

2062年 12月23日（月）

明日から冬休み。

此処にはクリスマスってあんのかな？

まあ、多分ないだろうな。

冬休み中はどうようかな。

* * *

啓吾

2062年 12月25日（水）

今日、クリスマスじゃん！－！－！

プレゼントがない所を見ると、これにてクリスマスといつも贋はないんだな。

予想は、してたけど。

つか、冬休み。

暇すぎなんだけどーーー！

* * *

水色

2002年 12月30日(月)

明日が大晦日。

一護が、

「明日、瀬靈廷の一番隊集合だ。黒崎一護の仲間ついでに通してもらおうか。」

だとわ。暇だしいいけど。

一番隊に行くのか。

勇気いるな。

* * *

一護

2062年 12月31日（火）

今田は大晦日。

皆一番隊に来たけどびくびくしてんな。

当たり前だけど。

明日は、初日の出だな。

* * *

織姫

2063年 1月1日（水）

あけましておめでとうーーー

皆で初日の出か。

黒崎君て意外といベント好き？

初日の出、見に行くのに朝早くから山登りするなんて思わなかつた
な。

ちやつかり朽木さん来て阿散井君来て日番谷君来て乱菊さんが来た
ことに気付いたときは驚いたよ。

黒崎君て、顔広いな。

あああ！－黒崎君の顔が大きいんじゃなくて！－友達、多いつて
意味だから！－何言つてんの自分！

* * *

美紀

2063年 1月8日（水）

冬休み終わった !!

5日後に試験の結果発表だ。

緊張してきた。

* * *

貴仁斗

2063年 1月13日（月）

試験の結果発表。

合格者の名前一覧に

黒崎遊子

黒崎夏梨

有沢竜貴

浅野啓吾

小島水色

井上織姫

石田雨竜

茶渡康虎

のおなじみのメンバーの下に

津ノ井遼

犀川美紀

神山貴仁斗

俺たちの名前が入つていた。

大

遼

2063年
1月21日(火)

試験にも合格して、あと2カ月でいよいよ卒業。

長かつたけど短かつたな。

特に一護たちが編入してきてから。

勉強が楽しかったな！！

うわ、なんか卒業フラグみたい。

＊＊＊

雨竜

2063年1月30日(木)

あと1か月と少し。

これでここを卒業して死神になる。

そつと言えば最近あの夢を見なくなつた。

遊子ちゃんたちも見てないだろ？

顔が生き生きとしてるから。

* * *

チャド

2063年 2月6日(水)

もうすぐ。

死神になれる前で。

でもどこの隊に入るか決めなくては。

先生もそう言ってた。

皆はどうこの隊に入るんだ？

皆が死神になるまで、あと5週間。

1月～（後書き）

カウントダウンの数が週刊単位になりましたーーー
もひすぐですねえ。

皆をどこの隊に入れるかはまで決めてませんーーー（汗）

早く決めなれば。

斬魄刀は決めてますよ。

あと、水色とチャドの斬魄刀の名前と水色の能力だけ決めてません。
(決まってないじゃん！！)

次回は卒業式ですかね。これも日記で。

2月はバレンタインがありますが端折ります。
ホワイトデーも端折ります。

いきなり卒業式です。

それまでとくに事件はない。という設定です。

始解はまだ誰も会得していません。

得意科目の整理は次回です。

そしてこの章は終了です。

次回から、死神編です。

やつとりままで来ましたよーー。
(遠い目。)

誤文字の指摘。「チッ。しうがない。」といつ感じの感想などお待ちしております。ああ、あとスクエストモー！募集中です。

卒業式（前書き）

すこません。

やつば田記形式やねます。

最後だからやかひと書いひよと内なる自分があいつへきたんだす。（

！）

零崎 沢織様。大変申し訳ござこません。

あと一話田記形式をやるなとこつてたくせにやひなになんて…。

すこません…！

卒業式

私がいつ・・・死神として、貴様を斬ると言つた・・・

私が貴様を斬るのは・・・ただ・・・

貴様が・・・私の誇りに刃を向けたからだ

by -白哉- アニメ198話より

「ん 。」

あたしは田を覚ました。

今日で、今日で学校を靈術院を卒業できる。

やつとじこまで来た。

次は、どこの隊に入るのか。

もう、決まってるも同然な気がするけど。

「ああ！..夏梨ちゃんまた布団置んでない！..最後なんだからキチ
ンとやつなよ！..」

「はいはい。相変わらず早起きだね遊子。」

「時計。見てみて。」

時計？

あたしは首をかしげた。

そんなに起きんの遅かったのかな？

時間は、

「8時23分。」

‥。

「遊子！……織姫ちゃんとたつきひちゃんは……」

「時計見たらすっとんで行つたよー夏梨けやん早く支度して……あと7分で卒業式だよー……」

「分かつたーー！」

あたしは大声で返事をすると着替えてずいぶん伸びた髪の毛をくしでときポニーtailにし食堂へ行つた。

「待つて夏梨ちゃんーー。」はんなひーるあるよーー。」

後ろから遊子の声が聞こえた。

そういうえば、遊子早起きして食堂の手伝いしていつも2人前ぐら
いもらつてくるんだった。

「それを早く言ひてよー！」

「良いからーーーあつーーーお兄ちゃんーーー」

あたしは部屋に駆け込み、「飯、味噌汁、しあわせをほとんどかますに飲み込んだ。

一兄がいるつて。

今はそんなこと考へてゐる場合ぢやない！

「夏糸ちゃん！ ちゃんと歯んでねーーー！」

それを見かねてか。遊子が仁王立ちで言った。

「今はそんなこと書いてる場合じゃないんでしょ……。」

「まあね。」

「じやくへよー！」

「うん！」

あたしと遊子は靈術院に向かつて走つて行つた。

時間は8時25分。

大丈夫。間に合つ。

あー！！瞬歩使いたい！！

* * *

俺達は7時半に起きた。

いつもならもつと早起きだけど先生がな。

最後だからってめちゃ厳しい授業だった。

あれだぞ！！俺なんて。実験体つーかなんつーか。

皆の鬼道を一人一人受け止めんだぞ！！

まあ、皆一人ずつそれはやつたけど。

俺の時にだれも容赦なしに撃つてくんんだぜ！！

赤火砲、蒼火墜、双蓮蒼火墜もろもろ。

お返しに俺も思いつきり撃つたけどな。

結果は言わないでおこひ。

取りあえず、今日俺たちはここを卒業する。

3月15日（金）

これで俺たちはもつての学校に来ることはないだろ？

それより、どこの隊に入るかだ。

チャド、水色は九番隊。

石田も決まってなかつたな。

後啓吾も。

井上とたつき。そして夏梨が十番隊だろ？

たつきと夏梨は予想だ。

なんとかつて。簡単なこと。

まず井上が確実に十番隊に入るだろ？ それについてたつきだ。

んでもって、冬獅郎と面識のあつた夏梨。

知つている隊長のことに入るだろ？

これが入つたら（井上・夏梨）乱菊さん喜びやうだ。

冬獅郎も苦労が絶えない。

後決まつてないのが、石田、啓吾、俺、遊子か。

遊子と啓吾は俺についてくんな。絶対。

遊子はいいけど皆町がやだな。

でも、隊を決めるのは明日でいいって先生が俺たちだけに言ってたから決めるのは明日でいいのだろう。

取りあえず卒業式。

時間は、8時20分。

こんなこと考えてたら時間経つの早いな。

準備は終わってる。

「準備終わったか？」

「もううん。」

「おうー。」

「ム。」

「…。」

石田は無視か。

「よし、行こう。」

俺が欠けた声を合図に皆町が歩き出した。

靈術院に向けて。

* * *

「おーい……兄……」

「おじーちゃん……」

「おひ。夏梨。遊子。」

「一緒に行こう。」

遊子が笑顔で言った。

「いいぜ。でも急がなきやな。」

「うん。…瞬歩使っちゃダメかな。」

「だめだろ。とにかく走るんだ。」

一護の声を合図にして皆が駆け出した。

そして、5分足らずで靈術院についた。

「やつと……。」

夏梨がつぶやいた。

みんな、今夏梨と同じ気持ちだろ。

皆を護れる力が。手に入る。

もつて、田前に迫つてきている死神とこの職業に舐め胸を躍らせた。

「行こう。」

一護が卒業式会場の扉を開けた。

「クラス順に座るんだって。行こう。一護。」

声が聞こえた。

「この世は…。」

「遼…！お前早いな。」

「一護たちが遅いんだよ。一組ははいりや。二組はあいつ。急いで。あと一分で始まる。」

「ほんとか…。」

一護は言ひが早し。

いつの間にか椅子に座っていた。

「一兄。…。絶対今！瞬歩使つた！…！」

「早くしろー始まるぞー！」

ムカ

夏梨の眉間にしわが寄つた。

「一兄。あとで覚えてるよ。自分じゃ使はなとか言つてたくせに……。

「

夏梨から何かオーラが漂い始めた。

「夏梨ちゃん。お、抑えて抑えて。」

夏梨の異変に気付いた遊子は夏梨の肩に手を触れた。

「とにかく！…早く来て。織姫とたつきはもう来てる。美紀も貴仁
斗もね。」

遊子、夏梨、啓吾、水色、石田、チャドは最低限の早歩きで席に着
いた。

「これより。卒業式を始める……」

山本元柳斎創設者、またの名を総隊長が開会の言葉を言った。

* * *

「卒業賞状授与。」

一組から順番に呼ばれた。

そしてすべてのクラスが終わり校長、山本元柳斎が話し出した。

「お主らが無事に卒業できたことをうれしく思つ。護廷十三隊、隠

密機動、鬼道衆となり歴史に名を残すほどの者になつてほしこの。これにて、卒業式を終わる。」

終わった時間は10時ジャスト。

そんなに長く感じなかつたな。

「お兄ちやん……」

「一兄……」

「黒崎君……」

「一護……」

「なんだよお前ら何ひいて。」

「一兄せどりの隊に入るの……。」

夏梨が少し怒つてゐるような態度で一護に聞いた。

「まだ決めてね。でも決めんの明日だ。そんなに勢い良く聞くから答えりんねえよ。やつお前らはどうなんだ？」

「あたしは、十番隊。」

「あたしも。」

「私も。」

予想通り。

「遊子はどこだ？」

「まだ決めてないよ。」

「一護ー。」

一護は振り返りながら言った。

「何だ？ 遠。」

「此処から早く出よう。早く、誰もこないよ。」

「…。やつこのままと早く戻るよ。行くぞ遊子、夏梨。」

「一護ー。」

「うして、遊子、夏梨。一護に織姫。たつき、啓吾。水色にチャド。そして石田の学校生活は終わり、死神として動き出す。

それぞれの思いを持つて。

* * *

「そろそろか。」

鏡を覗きながら一人の男がつぶやいた。

「待っている。黒崎一護。藍染の意志。今だ絶えず。」

鏡には楽しそうに笑い合っている一護たちの姿が映っていた。

卒業式（後書き）

おわっ

！――！

た

靈術院篇が終わった

！――！

はい。卒業式がよく分からぬので少し端折つましたがようやくここまできました。

（経験なし）

最後の男は誰でしょう。

みなさんは知らないですよ。（オリキャラですから。）

藍染とか言つちゃつて。危なそつな感じただもれつて感じです。

次回から新章！お楽しみに。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいとこリクエスト。のんびりとお待ちしてます。

隊（前書き）

話の冒頭に書く名台詞。

こういつちゃあ、だめかも知れませんが書くのめんどいんですよ。
なのでこの章から書くのをやめます。
新章スタート！！

ユニーク、10'000人突破！！！
めでたいです！！

隊

「おー、ルキア。どーも行くんだよ。」

一護達は、卒業式終了後どこからか現れたルキアについて行つている。

「とつあえず、十三番隊舎か。」

「なに、一人でぶつぶつ言つてんだよ。」

「静かについてこ。もう少しだ。」

ルキアは振り返りもせずに答えた。

「へへへ。」

* * *

「ついたぞ。」

突然ルキアが止まった。

「此処。」

「十三番隊だ。お前ら泊まるとこがないだろ？ 今日せーじに泊まれ。」

「サンキュー。」

一護たちはルキアについて隊舎に入った。

＊＊＊

「ルキ姉。あたし達が入る隊舎つて希望した隊舎に入れるんだよね。」

L

「まわな」

取りあえずルキアの部屋に来た一護たちは寝転がつたりお茶飲んだりそれぞれくつろいでいた。

「俺、どこ入ろうかな。」

「あれー。啓吾は檜佐木さんからお誘いがなかつたの？」

「な、何だよ！まるでお前は誘いがあつたみたいに。」

「うん。あつたよ。」

「即答ーー！即答ですかーー！もしかしてチャドも誘いがアツタのーー！」

ガバつと寝ている体制から起き上がった啓吾が叫んだ。

「もがきん。」

「ガーン！！！なんで、なんで俺は。いつもそういうのがないの？」

! !

ムカ

「言つてやひつかち。その原因。」

「えつ！…何々…お前その原因、わかニボニッ…」

「お前のおしゃべつが鬱陶しんだよ…」

たつきは畠畠のおなかを思つてきりふんずけた。

「あつそうだ。」

「ん。なんだルキア。」

「お前らはいくつか聞きたことあるのだが。」

「なんだ。」

「お前らは自分がどの隊に入るか決めておるか？」

「俺は決めてね。」

「私は決まつてる。」

「あたしも。」

「あたしも。」

「俺も。」

「僕も。」

「僕は決まってない。」

「私も決まってない。」

「…。」

「あたしも。」

「僕も。」

「俺も。」

上から、一護、織姫、たつき、夏梨、チヤド、水色、石田、遊子現在答えることができない状態に陥っている路吾、美紀、遼、貴仁斗だ。

「そうか。決まってないのは一護、遊子、石田、路吾、美紀、遼、貴仁斗か。」

「ああ。」

「…。お前ら此処に入らないか？」

「此処つて？」

「十三番隊。」

ブウウ

遊子は飲んでいたお茶を噴出した。

「だ、大丈夫か？遊子。」

「うん。大丈夫。お兄ちゃん。」

「それで。なぜ、僕たちを十三番隊に誘つているんだい。」

「…。人手が足りないから。」

「それほんとか。ルキア。」

「まあ、そうだ。で？』

「で？ってなんだ。』

「お前ら此処に入るか？』

「お前が上司はやだな。』

「此処は上司とかそんなものあまり関係ない。』

「入ればいいんだろ。入れば。』

「お兄ちゃんが入るなら私も入るー。』

「俺も俺もーー。』

「僕も。」

「あたしも。」

「俺も。」

「まあ良い。」

「やうか。」

ルキアはまつとしたような声を上げた。

「じゃ、明日。詳しことを説明する。隊のことをな。それまでは自由行動。色々見学していくくれ。」

「ああ。」

「じゃ、私は仕事があるから。」

「おう。」

ルキアはさう言って執務室に向かった。

ヤハラえんぱあいつに面長だつたな。

遼たちせびに行つたんだ？

れつちまでやつこつたの。」

こうして、皆の死神としての日々が幕を開ける。

隊（後書き）

新章です！！イヤッホ！！

皆をどこの隊に入れるのか。

結構悩みましたが、決まりました。

さあ、次は死神としての働きぶりと斬魄刀ですかね。

あつ、皆が来てる服はまだ靈術院の制服ですよ。
死霸装はもう、もはつてますが着てないんですよ。

次回から死霸装です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといリクエスト。
などなどお待ちしています。

斬魄刀の力（前書き）

昨日更新できませんでした。
パソコンの機能がおかしくなり何にもできない状態だったので。
すいません。

気を取り直して、第36話スタート！！

斬魄刀の力

私が死神になつて約1ヶ月。

そろそろこの仕事にも慣れてきた。

でも、物足りない。

虚を倒すとか、現世に行ってさまよつ靈を魂送したい。

まだ新人だから私は無理だけど、お兄ちゃんは行つてゐる。

現世で虚は倒さず、といつことまではやらないけど流魂街に出た巨
大虚（メノスグランデ大虚ではない）を倒したりしている。

いいな。

私はいつも羨ましかつた。

でも、当然のこと。

お兄ちゃんがそう言つた任務に就くのは。

でも、そんなある日私にも任務がやつてくる。

「流魂街にて巨大虚発生。至急、死神を送るよつこ。繰り返す。流
魂街……」

そのメンバーになんと私も選ばれた。

正しくには、私、お兄ちゃん、先輩2名。十三番隊第七席・神流崎みえさんと十三番隊第五席・伊南嘉威さん。それと副隊長のルキアちゃん。

「遊子は初めての任務だな。頑張つてくれ。」

「はい！」

ルキアちゃんにさう言われ私はうれしくなった。

「北流魂街・80地区。更木か。」

神流崎さんがせつづぶやいたのが聞こえた。

「早く行こうぜ。ルキア。時間が…。」

「ああ。行くぞ…！」

ルキアちゃんの声とともに、虚の姿、そして靈圧を確認した。

* * * * *

「グオオオオウオオオオ

……

物凄い叫び声とともに、虚の姿、そして靈圧を確認した。

「止まれ。」

ルキアちゃんが腕を横に伸ばしそう図した。

虚がいる場所は何もない平凡な土地。

そこには、虚の能力であるであろつ、変な植物が生えていた。

「これからあいつを倒す。切かかるときは順番にだ。私、一護、
美栄、嘉威、最後に遊子。遊子はまだ斬魄刀を持ってなかつたよな。

」

「はい。」

私は少し不安になつた。

斬魄刀がないのに虚は倒せるのだろうか。

第一、何故斬魄刀の無い私がこの任務に選ばれたのだろうか。

「ならお前は鬼道を撃て。撃つは何でもいい。それでは、これよ
り虚退治を行う。行くぞ！－！」

ルキアちゃんが叫び、虚に切りかかつた。

「ウオオオオ

！－！－！」

虚の周りにあつた植物はどうやら伸縮自在でどんな方向にも飛んで
くる。

虚はその動きを自分で操作し誰も己に触れられないようにバリケー
ドを作る。つまり、植物＝能力。

もし相手がそのバリケードを崩したとしても生える。

そして内側から自分で腕を伸ばし少しの隙間を開け自分の腕を出し相手を叩き潰す。

これがこの虚の戦い方。

最初ルキアちゃんが切りかかった時、植物のバリケードにはじかれた。

がこれがきっかけでルキアちゃんはこの虚の戦い方を理解し、ルキアちゃんはわざとバリケードを崩しバリケードに近づき虚の腕を誘い出した。

そして、出てきた手を切り落とした。

「グアアアアア
！－！」

虚は、苦しみの声を上げた。

立派な能力があるのにこの虚は話すことはできないのか。

「一護－－！」

切り落としたすぐに瞬歩をしある兄ちやんに合図した。

「分かつてゐて－－月牙天衝－－！」

お兄ちやんは空を歩き虚の真上から月牙天衝を

さつき、一部

だけ崩れたバリケードの部分に向かつて

撃つた。

「グワアアアアオオオオオ

！！

！！

虚も反撃してきた。

バリケードを崩し　　バリケードの意味はないとでも思ったのだ
るうか　　最初は神流崎さんに手を伸ばしたときつけた。

「神流崎さん！　！」

私は叫んだ。

「大丈夫よ。」

瞬歩で逃げたようだ。

次に、虚が狙いを定めたのが私。

虚の大きく、そして太い腕が私に向かつてくる。

「遊子！　！」

「つー遊子！　！」

「遊子ちゃん！　！」

「遊子！　！」

ルキアちゃん、お兄ちゃん、神流崎さん、伊南さんの順で声が聞こえた。

「くそ……月牙でグオオ……」

お兄ちゃんが、月牙天衝を撃とつとしたら虚の能力である植物のツルにつかまつた。

いつもなら簡単に避けられる攻撃なのに。

私が狙われたという事実がお兄ちゃんの冷静さを奪つてしまつたんだろう。

「一護……つ……。舞え『袖白雪』次の舞・白漣……」

ルキアちゃんが斬魄刀を開放した。

だが失敗。

虚には当たらなく、逆に虚に体を吹き飛ばされた。

「「副隊長……」」

「つールキア……」

この光景を見て、私は思った。

ああ。また、私は誰かに護られるのか。

体を張つて助けようとしていた、一護・そしてルキアを見て遊子は

思った。

もう、護られたくないって思つてたのに。

私達が今度はお兄ちやんを護つてやるつて、夏梨ちやんと約束したのに。

自分をつかんでいるツルと格闘している一護。そして吹き飛ばされたルキア。それに駆け寄つている神流崎・伊南を見た。

なんて、情けないんだろう。

なんで私は力もないのに”任務に就きたい”なんて思つたんだろう。実現できるだけの力は私にはないのに。

力が。 欲しい
！

私は自分の唇をかんだ。

『なら、私を使って。遊子。』

えつ！

突然私の心ながで声がしたと思つたら私の目の前は自分の精神世界。永遠に広がる水の中にいた。

『あなたを使つて？』

『私の力をあなたが使って、そして、皆を護るの。自分の力で。』

はつきりと声が聞こえる。

『でも、あなたを使うこと、それは、私の力じゃなくてあなたの力なんじゃないの?』

『ふふ。違うわよ。私はあなた自身なの。』

声の主の顔が見えてくる。

『それってどういづ…。』

完璧に、顔が見えた。

お兄ちゃんと同じ髪の色をしていて長い。

瞳の色は若葉色。

白い帽子をかぶり、足が見えないほど長く薄い緑の花模様が描かれている着物を着ている。

『遊子。自分の力を信じて、前を見て。進んで行って。決して立ち止まつてはだめ。』

そう言い、私に近づいてくる。

『引いたら次のチャンスは来ない。』

私は虚のほうへ体を向けた。

『「ヒヒで、止まつたらあなたが死ぬ。』

私の自分の手が何かを握る感覚に包まれた。

『叫んで！私の名は…。』

「「花月かげつ！」！」

「オオン！－」

私の手から柄が出てきて刀の刀身が現れた。

お兄ちゃんの斬魄刀とそっくりな形。

「「月牙天衝！－！」」

私の手から斬魄刀が急に出てきたことにあっけにとられたのか虚は一瞬動きが鈍くなつた。

私はそこへ、月牙天衝を撃つたのだ。

花月とともに。

「…。できた。…。お兄ちゃん！－」

私はさつさまでツルと格闘していたお兄ちゃんに駆け寄つた。

虚が消えたことによって、虚の能力であるあの植物も消えたようだ。

「遊子、か。さつきのあれ撃つたの。」

突然、ツルに開放されしりもちをつこうとするお兄ちゃんが呆気にとられて言つた。

「えつ。まあ、そうだけど。」

「すげえな。」

お兄ちゃんはなぜそんなにも驚いているのだろうか。

私は、不思議になつてお兄ちゃんが否ルキアちゃん・神流崎さん・伊南さん・そしてお兄ちゃんが見ている方向に向かつて振り向いた。

その瞬間、私は驚いた。

私が、月牙天衝をを撃つたところは地面が抉り取られていてまるで、大きな隕石が衝突しているような形になつていた。

私、こんなのが撃つたんだ。

自分の力を信じられない。

私は自分の力に少し恐れを感じた。

でも、恐れを感じてはいけない。

自分には花月がついていて、お兄ちゃんがついていて、夏梨ちゃんがついていて。

私の周りには仲間がいっぱいいる。

これからもこの力で。

皆を。護れるようにな。

いっぱいいっぱい修業して。

そして強くなるんだ。

誰も、私の目の前から消させないようにな。

少し名残惜しく思いながら遊子は瞬歩で移動をしたルキアたちについて行つた。

なぜ、流魂街にあれほどまで大きく、強く、能力を持ち、なぜか話せない虚がいたのだろうか。

後には少し疑問が残つた。

* * * * *

「失敗か。」

男は人が立ち寄らない洞窟の中でつぶやいた。

「まあ、予想通りだ。あいつは藍染の実験体の生き残りだからな。それにしてもいいデータが取れた。これは使える。月牙天衝。か。
なあ、啓助。」

「そうですね。」

男が話しかけた相手は黒い、死霸装をまとい腰には刀を差していた。男が見ている鏡には遊子が撃つた『月牙天衝』の地面が映っていた。

「もうすぐ。あと少しの辛抱だ。」

斬魄刀の力（後書き）

遊子が、斬魄刀を手に入れました！！！！！
なんかうれしいです。

（ホッコリ）

斬魄刀を出す瞬間。

ほぼ一護と同じだ。

夏梨もそうかも。（汗）

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなど、お待ちしています。

きつかけ（前書き）

少し更新遅れましたか？

今回は長めです。

第37話スタート！！

きつかけ

一週間ぐらい前。

遊子が斬魄刀を手に入れた。つて、冬獅郎から聞いた。

冬獅郎は一兄から聞いたんだって。

斬魄刀。

いいな。

あたしもほしいな。

あの世界での声の主の名前が聞こえればいいのに。

遊子はどうして、斬魄刀を手に入れることができたのだろうか。

あたしは冬獅郎から聞いた。

「自分が虚の標的になつた時、黒崎が助けよつとして虚の能力である植物のツルに捕まつた。それを助けようとした朽木が虚にふつとばされたんだ。それを見た遊子が少し下をうつむいたと思ったら斬魄刀が出てきたらしい。つまりきつかけが必要つてことだな。まあ、お前も頑張れ。」

らしい。

ま、遊子に聞けばいい話なんだけどさ。

取りあえずあたしは斬魄刀が皆を護る力が欲しくて欲しくてたまらなかつた。

普通の虚はあたしの鬼道で倒せるし、少し大きい虚だつたら鬼道をまとつた浅打で倒せる。

それでも斬魄刀が欲しかつた。

欲しくて欲しくて。

遊子を少し恨めしくも思つてしまつ。

そんなことを思つても自分の斬魄刀は自分の手元に出てこない。

自分が努力をしなくちゃならない。

”遊子が斬魄刀を手に入れた“ことで、新人たちは自らの斬魄刀を手に入れるためいろいろ努力をしている。

精神世界を見ていかない新人がたくさんいる中、あたしや織姫ちゃん。そして、たつきちゃんは十番隊の新人の中でゆういつ精神世界を見ている。

あたしは空。織姫ちゃんは地。たつきちゃんは只白く色がない世界。

あたしたちの中で一番斬魄刀取得に近いのは織姫ちゃんと思つ。

なんたつて、何時も聞こえる声の主の顔・声はもう聞いて、見えて
いる。

たが、やはり”きつかけ“が必要。

まだ名前が聞けてないらしい。

だけど、織姫ちゃんはよく実践に連れて行つてもうっている。

織姫ちゃんの場合、男の隊員が織姫ちゃんを護つちやうし、もし虚
に目をつけられても鬼道だけで倒してしまうほどの鬼道の大天才。

それを訊くたんびに良いなあつて思うから、”たまにはあたし達も
つれていけ“つて冬獅郎に駄々をこねた。そしたら、

「じゃ、今度な。」

だつて。

これであたし・たつきちゃん・織姫ちゃんは実践に連れて行つても
られることになつた。

そして、ある日。

また、北流魂街・80地区。更木で虚が発生した。

今度は巨大虚でなく大虚。メノスグランデ。

「行くぞ。お前ら。松本！！」

「はい！…」

「第三席・花宮隼。はなみやしゅん。第四席・大泉亞美奈。おおいずみあみな。来い。」

冬獅郎がメンバーを発表した。

「夏梨たちには悪いが今回は引いてもらひ。」

あたしたち三人を見て行つた。

「何でよ！…」

「当たり前だ！…巨大虚ならまだしも大虚メノスグランデだぞ。斬魄刀も持たない新人なんか誰が連れて行くか。」

「でも！…」

「駄目なもんは駄目だ。あきらめる。そんなに連れて行つてもらいたいんなら斬魄刀を手に入れろ。そしたら次回は連れて行つてやる。お前ら！…行くぞ！…」

冬獅郎は氷輪丸を背負い自分の部下を連れ瞬歩で消えた。

「やつぱり、斬魄刀を手に入れなきゃダメなのかな？」

織姫ちゃんがつぶやく。

斬魄刀。

この言葉はあたしに否あたし達に重くのしかかる。

「！」あきらめひやダメ。絶対に斬魄刀を手に入れてやんなきゃ
！……」

たつきちやんが氣合の入った声で叫ぶ。

手に入れたい。

でもどうすれば手に入るのだろう。

一兄は「きつかけが必要。」と言ひ。

遊子は己の身がピンチで仲間のが自分を助けようと逆にやられそれを見て自分で護れないのが悔しくて。皆を護れる力が欲しくて力が開花した。

＝きつかけがあつて開花した。

つまりあたしが斬魄刀を手に入れるにはきつかけが必要。

ところが結論にたどり着く。

「やっぱし、きつかけ。」

あたしはつぶやいた。

”きつかけ“なんて簡単に言つけど実際に考えるとかなり難しい。

一番、最初に思うのは”仲間がピンチ“や”自分がピンチ“・”仲間を護れる力が欲しい“と強く願う時、”あたしが全員無事に

過^{（）}したい。“などと感じた時や思う時だと想^{（）}。

取りあえず、誰かしらがピンチの時や自分を仲間を護れる力が欲しいと願、皆が無事に過^{（）}せるようにしたいなどと思つ時なのかな。

冬獅郎たちはいなし暇だから流魂街らへんをフリフリ。

……ちょっとだけなら。

大虚メノスグランデと冬獅郎達が戦つてゐる場所を。

見ても、良い、よ、ね。

* * * * *

「隊長……」

「俺は大丈夫だ。」

ただいま、北流魂街・80地区。更木。

冬獅郎が虚にふつとばされた。

それを見た乱菊さんは叫ぶ。

ま、当然。

「ちつ。…。霜天に坐せ 氷輪丸！！」

冬獅郎が始解した。

結構離れているつもりなのに冷氣が漂ってきた。

あそこにはいたりどんだけ寒いんだね!。

「つ木。いつの隊長始解してんジヤン。つか、無傷。」

「ほんと。」

後ろで声がした。

「うひー、うひー。たつあくやんこ織姫ちゃん!ー。」

「ねひー。」

「じゅ。」

「なんでもう二度とー。」

あたしは驚いて聞いた。

靈圧を閉じて冬獅郎たちの戦いを見逃さないよつこ。

「夏梨ちゃんが隊舎玉へくの見たからつこてきただけ。」

「うふ。」

「や、やつ。…。」

あたしは次の言葉が思いつかなくて言葉を詰まらせた。

それを察してくれた織姫ちゃんが話をつなげてくれた。

「やうひえぱ。隊長つて戦いは大体無傷なんだよね。」

「やうやう。すじこよねほんと。取りあえず黙つて観察してよつか。
なんか楽しそう。」

「うん。」

あたしはたつきちゃんに同意して冬獅郎たちを見た。

今、始解をしているのは冬獅郎と第三席の花富さん。

花富さんの始解は刀が全体的に橢円形で真ん中に穴が開いている。

その中から炎が出る炎熱系。

冬獅郎が冰雪系なのに炎熱系の斬魄刀を始解しちゃ相性悪いんじや
ないかな。

「松本……」

「分かつてます!!」

冬獅郎が乱菊さんに叫んだ。

何が分かつてんだろう。

「唸れ 灰猫！」

乱菊さんも始解した。

「行くぞ。」

「はい。」

ここからが本当の戦闘開始……だと囁く。

冬獅郎と乱菊さんの絶妙なコンビネーションが虚の動きを封じ混乱を生む。

そして、交互に斬り付け最後に冬獅郎が大虚を斬り、この戦いは終わった。

「終わつたな。」

「はい。」

少しも息を乱すことなく虚を倒した冬獅郎たちは踊つてゐるよつとも取れた。

虚を自分の手に取り、踊つてゐるよつと。

「おい。やこにいる夏梨・有沢・井上。」

ギク！

「なんで冬獅郎あしたちのこと分かつたのかな？」

「分かんない。でも、隊長だし。」

「ていうか、名前呼ばれただけ「出て来い。」

「”出て来い“だつて。どうある~たつせりやん。」

「いや、此處は出でかなくひや…。」

だからなんで冬獅郎はあたしたちの存在に気づいたんだよ…。

あたしは心の中で虚じく叫ぶ。

「しようがない。出でぐ。」

「ちよつとー。」

「夏梨ちゃん!..」

ガサ

あたしは冬獅郎が見えるであろう位置に来た。

「お前ら。なんでついて來た。」

「…。なんとなく。」

「はあ？まあいい。言い訳は隊舎で聞く。後ろの一人…！」

「「はい…！」

いきなり呼ばれたので驚いたのか一人は物凄い勢いで立ち上がった。

「お前らも来い。」

「「はい！」」

その時だった。

「キヤ
！..！」

「ウオオオオオオオオ
！」

ドン

悲鳴とともに聞こえた雄叫び。

そして何かが落ちる音。

「大泉！..！」

乱菊さんの叫び。

冬獅郎は急いで振り向く。

あたし達もあの叫びが聞こえた場所に目を向けた。

「「「「！」？」」

あたしたちは驚き、固まった。

そこには倒したはずの大虚・メノスグラントが何匹もいた。

精々五匹ぐらいだらうか。

いつの間にか背後に忍び寄つた大虚に大泉さんは吹き飛ばされたの
だろ？

完全に油断してた。

「お前ら……下がつてろ……！」

「いやだ……あたし達も戦う……！」

「せうよ……みんながやられる様子を黙つてみるとでもいいの……！」

「ああ。せうだ……第一俺らは簡単にやられねえ。」

あたし達は冬獅郎の”下がれ”といふ言葉に反発した。

冬獅郎が言うのはもつともだけど、あたし達も戦いたい。

なんたつてあたし達は鬼道が大の得意だからだ。

「そうかもしれない。けど、もしも大泉さんみたいに吹き飛ばされ
たら誰が虚を倒すの？ 誰が、大泉さんを助けられるの？」

織姫ちゃんが言つ。

「俺たちはやられねえ。そんな、簡単には……やられねえんだ！」

！――！」

そう言つ冬獅郎は何かを抱えているように見えた。

そりや、冬獅郎は隊長だ。隊のみんなの命を抱えているだろう。

だがそれよりも大きなものを抱えているように捉えられる。

前に起こつた”藍染との戦い“のせいだらうか。

あたしが思案を巡らしている中、冬獅郎は虚に向かつていった。

「と しろ

あたしが叫んだ。

「そんなに戦いたきや三人がかりの鬼道で大虚メノスを一匹ぐら^イい倒せ！」

「…分かつた！…」

急にOKを出した冬獅郎に少し疑問を感じながらあたし達は一匹の大虚メノスに向かつていった。

「卍解。 大紅蓮氷輪丸！…！」

冬獅郎が卍解した。

当たり前があたりにはさらに冷気が立ちこもれた。乱菊さんは、吹き飛ばされた大泉さんを抱え瞬歩で無事な場所に移動している。

ついでに花富さんも。

「あつちは大丈夫だと思つ。取りあえず。行」」

「「うん。」」

あたしの掛け声で始まつた、王族管轄の虚との戦い。

「完全詠唱で行くよ！」散在する獣の骨・尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる“破道の六十

三 雷吼炮！――！」

あたしが叫んだ。

ヒット。

あたしの手から雷を帯びた爆砲が放たれた。

「グオオオオオオオ

――！」

虚にはあまり効いてないように見える。

「行くよ――！」君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ“破道の七十三 双蓮蒼火墜！――！」

たつきちゃんが言った。

だが失敗。虚には当たんなかった。

「『』めん！！」

「良いよー。」

「気にしないで。」

あたしたちが声をかける。

「私も行くよ。」君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ“破道の七十三 双蓮蒼火墜！！”

今度はヒットした。

だが、大虚^{メノス}も負けじと反撃を開始する。

織姫ちゃんに向かつて足を伸ばし踏みつけようとしている。

織姫ちゃんはそれをおけたが予想以上にスピードが速く、腕に深い傷を負つた。

「大丈夫！織姫！！」

「だ、大丈夫。」

だが、大丈夫という織姫ちゃんを見てもあたし達は織姫ちゃんをリタイアさせたほうがいいと感じていた。

織姫ちゃんの手からはあり得ないほどの大出血が出ていた。

「織姫。休んでなよ。」

「大、丈夫。」

「駄目。休んで。織姫ちゃん。お願ひ。」

あたし・たつきちゃんは織姫ちゃんを休ませようとした。

今戦っているのは王族管轄の虚。大虚・メノスグランデ。

それに対しあたし達は名もない斬魄刀・浅打を腰に差す新人隊員。
それに、深い傷を負っている織姫ちゃんは言つちゃ悪いけど足手ま
といだらう。

「お願ひ。休んで。織姫。」

たつきちゃんの悲痛な声が聞こえる。

織姫ちゃんの腕から出る血は地面を緋色に染めている。

「大丈夫。……。大丈夫。……。」

つぶやきながら織姫ちゃんは何も持っていない手で刀を握り構える
姿勢を取った。

その時だった。

織姫ちゃんが握りしめる手からは刀の柄らしきものが見えた。

「盾舜六花——！」

せつかけ（後書き）

いやー。やつといい今まで来ましたよ。
ほんとはこの回で三人の斬魄刀が出てくる予定だったんですけど長
くなってしまったので一回に分けたことにしました。

田線は夏梨です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつづクエスト。
などなどお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8579x/>

A new adventure and bonds

2011年11月20日00時08分発行